Kimura, Ki
Meiji bungaku o kataru

木村毅著

明治文學を語る

東京
樂浪書院

序

明治文學の研究は、まさに極盛期に達したのではないかと思ふ。未だ此れが殆んど捨てゝ顧みられない荒蕪地であつた時から、幾分その方面に微力を致して來た私としては、欣快この上も無いことだ。

この書は第一部に於て、明治文學の總體を概觀的に語つた。もと或る婦人會から頼まれてした講演筆記を更に要約して、關西婦人會の機關紙として大阪朝日新聞社から發行せられてゐる『婦人』に連載したので、確か大正十五年の後半期に、丁度半ケ年續いたかと記憶する。

第二部は隨時、新聞雜誌の求めに應じて寄稿したもので、この中特に『リツト

ン卿を迎へて』の一篇は、東京日日新聞に掲載せられるや、時の外務省當局の眼に留まり、直ちに英譯の上、來朝中のリツトン卿に示された因緣がある。明治文學と外國文學との交渉の討究は、恐らく今後もかうして國際的な文化交涉に何等かの役割を果すことが、ます〳〵多くなつて來るであらう。

それから他の諸篇はさうした心配はないが、「日本雜誌與亡史」は雜誌『若草』に、「シエークスピアと明治文學」は同『沙翁復興』に掲載されたものである事を付記しておく。さうでないと文中、理解しがたい一二句があると思ふから。

私は學者でない。特に專門の國文學者とは最も遠距離な存在だ。だから此の書が學問の殿堂の入場劵代りにならうなどとは決して思つてをらぬ。素人の研究である丈けに、私の此の方面の著書は從來、暗示的であり、刺戟的であると云つて、讀者諸君から歡ばれて來た。此の書に於ても願はくばその特徵

が、舊に依つて存してゐてくれゝばいゝがと念じてゐる。

明治文學に關する私の著書は、さきに『文藝東西南北』と『明治文學展望』と があり、昨年と今年とに出した『近代ジャーナリズム研究』と『大衆文學十六講』との中にも、その方面關係のものが數篇宛收まつてゐる。そして今度の此の一卷で、この方面の私の書いたものは、殆んど全部網羅せられた事になる。

恐らく此の書を境界として、私が明治文學に就いて、物を書くことは次第に減じて行くであらう。私は自分で又、新たな關心の分野を開拓して行きたいと思つてゐる。その意味で自分だけでは、此の一卷は、極めて意味の深い、區劃線になる。

一九三四年 四月二十一日

木村 毅

目次

第一部

第二部

一　明治開化期の文學

——新文學以前の諸相——

一　序　言

明治大正の研究は、少くとも昨今最も世の視聽を集めてゐる流行題目の一つであるが、私は今から明治大正文學の誌上連講を始めるであらう。

その前に、なぜ現在の吾々が明治、大正について知るところがなければならぬかについて、一言しておかう。

外でも私の述べたことであるが、現在の昭和時代を自分に譬へると、明治大正は恰も兩親乃至は祖父母のやうなものである。自分を知り、かつ現在未來にこれを十分成長させるがためには、自分自身において始めて創造せられてゐる特性と共に、それが培育された環境、それが傳統をなした遺傳などについても知るところがなくてはならぬ。それは親なり、祖父母なりを究めずには知る方法がない。

德川期以前は、餘りに吾々とは繫がりが遠い。日本が封建の舊殼を脫して、吾々が現在

あるが如き近代的國家、乃至は資本主義的社會制度の出發點を切つたのは實に明治に始まる。

もし自分の祖先に關ヶ原の合戰で勳功を立てた人があつたと聞かされても、それには單なる歷史といふ以外の興味は覺えられないが、祖父が若い時にかうしたとか、母が幼い時にかうあつたなどと聞くと、現在その人が生きてをり、或は死してゐても顏を見覺えてゐるだけに、今度は歷史といつただけでは盡して了へない生動的な、血の繫がりから生ずる特殊性の明かに意識出來る關心をもたないではゐられない。

明治、大正は吾々に取つて實にそれに相當する時代である。そしてなほその上に、この時代は吾々の住むこの日本が經過した中では、最も光輝ある文化の燦然として映發した時代であり、廣く世界史の上から大觀しても、躍進の迅速さにおいて、奇蹟的とさへ賞讃せられてゐる時代である。それがルネッサンスとか十八世紀の啓蒙時代とか、又はわが奈良朝などと相似た研究的魅力を感ぜしめる。

明治大正の文藝は、その光輝と奇蹟と魅力とを映寫したフイルムであり、その豐富な精神生活の頂上に咲き誇つた花だといへば、これを常識として一通り知らなければならない理由は、これ以上又縷說の要がなからう。

さて、これが大學の講堂における講義だと、序論の終つたところで多くの參考書を書き並べるのだが、私はそれを、その各項下において適宜に指示することにして、すぐに本論に入ることを急ぐ。

二　啓蒙期の天才　福澤諭吉

青島戰爭の當時であつた。神尾大將があの地を巡檢の途中、田舍の小學校に立寄ると、支那人の敎師が日本の高官をもてなすつもりで、何なりと質問して御覽なさいといつた。そこで大將が敎壇に立つて『お前方は日本で誰が一番偉いと思ふか』といつて尋ねると、生徒は何の迷ふところもなく皆一様に『福澤諭吉だ』と答へた。

これには神尾大將も驚き、付いてゐる武官等は色を失つたといふ話である。右の話を傳へた吉野（作造）博士は『支那の子供は或る意味において日本人よりも能く日本を知つてゐる』と論結してゐられる。（『公人の常識』四二頁）

この意味が、讀者諸君に分りますか？　或は恐れる。諸君も神尾大將と同じくこれを驚く仲間ではなからうかを。

西洋史を讀んだ人はフランスの十八世紀に啓蒙時代なる一時期があり、かつまた百科全書編纂の一大事業のあつたことを知つてゐるであらう。それは道理を重んじ、迷蒙を打破する上に特色のある時代なり、また事業なりであつた。たとへば彼等の一人は、宗教の起原が押しつめれば野蠻人の迷信に發足する事を究めて、不合理と罪惡の巣窟になつてゐた教會制度に根本的衝撃を加へ、宗教を特別に神聖視する時の人の惑ひを解いた。その同じ精神は當時の國家制度乃至は社會制度のからくりにまで假借なくメスを加へずにはおかなかつた。王や貴族は奢侈淫逸を極め、萬民は飢餓に泣いてゐる。この不合理な社會制度は

一見鐵壁の如く堅牢に見えるが、實はこれ〳〵のつまらないからくり、つまらない迷信によつて保たれてゐるに過ぎない――彼等はさういはぬばかりに、凡ゆる不合理を摘發して見せた。だから新興の市民階級が猛然と蹶起して、王や貴族本位の社會を打破するに至つた。これがフランス大革命である。

福澤諭吉は維新の際に、この啓蒙の任に當り、この百科全書家としての仕事を完成した草創期の一大天才である。されば明治時代は、福澤の筆舌のさきから生れて來たのだといつても決して無稽な誇張でなく、この意味においてこそ、彼は日本で一番ヱライ人なのである。明治維新と同じやうな過渡期にある支那の少年が、彼を目して日本の最大の偉人と答へたに少しの不審もない。

彼は獨立自尊といふ事を說いた。人に迷惑を掛けて生存してゐるやうではいけない、個々人が十分に獨立して始めて國家も完全な獨立が保てる。彼はかう說いた。すなはち祖國の獨立を何より希念してゐる點で、彼は非常な愛國者である。しかし個人として獨立を保た

しめる最大原動力は金錢である。したがつて金錢を尊重しなければならぬ、ほかにいかに立派な才能特技があらうと、一身の生存を保つ金錢も得られないやうでは獨立人といへない。彼はかうも說いた。そして結局は『金』が中心となる經濟學なる新らしい學問を始めて日本に植ゑつけた。ところが日本には古くから金錢を蔑視する惡習がある。これは刀を魂とする武士を首班に頂く封建制度の餘弊だ。國を閉ぢて文明をおくらせ、有爲な新興階級を、家柄の故に頭を抑へて伸びさせまいとするのも、皆この封建制度あればこそだ。よろしくこれを叩き破つて海外の新知識を導入し、一般民衆の知見を高めねばならぬ。彼はかうも說いた。この意味で彼は常識の世界化を絕叫した豫言者であり、開化の父である。新式の學校を最初に築いたのも彼だ。今日の慶應義塾がそれである。女子の開發にも力を用ひた。『新女大學』の著が有力に之を實證する。西洋の文物制度を嚙んで含めるやうに說いた『西洋事情』の著は、明治新政府が諸事制定の唯一の智慧袋であり、相談役であつた。憲法も政府の作る前から雛型を作つて國民に示してゐる。西洋流の演說を始めて試み

たのも彼なら、雜誌にも早くから着手した。

以上の一筆書きの輪廓だけ見ても、彼があらゆる文明の種子を蒔き、フランスの百科全書家の仕事に似た事を、手一つで成就してゐる事が合點出來やう。

まことに彼は傑れた敎育家であり、文明批評家であり、また經濟學者、政治家、實業家、ジヤーナリストでもあつた。

文藝の方面においても彼の貢獻は少なくない。單に文章だけからいつても、萬人の胸に徹して理解出來るやうに、草稿が出來上ると先づ下女に讀んで聞かせて彼女に分らないことは、分るやうになるまで改刪した。その位だから彼の文章はたとへ文章體であるにしても、口語と壁一重の所まで接近した平易なものである。『世界は廣し、萬國は……』で書き始めた『世界國盡し』の著は、最初期の小學校敎科書となつて世界地理と文化の概念を與へたばかりではない、そのなだらかな七五調は、今日の新體詩の先驅をなすといはるゝ。しかし私は彼が文學的貢獻の中では『かたわ娘』なる寓意譚こそ、見やうによつてはもツ

と意味の多いものだと思ふのである。

三　『かたわ娘』の寓意

『かたわ娘』は明治五年の出版。今日の雑誌のやうに組んだら三四ページにも充たない短い物語である。

大意をいへば、ある富豪に女の子が生れ、外に難はない玉のやうないゝ子だが、たゞ生れつき眉がなく、やがて齒が生え始めてみるとそれが又眞黒であつた、乳齒が脱け代つてもやはり黒い齒が生えた。近所の者は、眉がないのは癩病の血統だらう、齒が黒いのは祖先が炭團屋ででもあつて、黒い炭團を高く賣り、白い飯を食つた天罰であらうなどゝ蔭口をきいてゐた。親はそれを直すのに神佛にも祈願し、醫者にも頼んだが一向効果がなかつた。

しかるにこの娘が二十ごろになると、その評判も全く消えて蔭口をきくものは誰一人なくなつた。といふのは、いはゆる『新造』は眉を剃り、齒を黒く染めるのが當時の婦人の

風習であつたから、件のかたわ娘も一向目立たなくなつたのである。そして遂に立派な婿を迎へて幸福な家庭を作ることが出來た。

この物語には一體どんな寓意が含まつてゐるのであらう。

太田正孝博士はいはるゝ。それは當時の時世に一歩先んじた洋學者（福澤自らもその一人であつた）の事を暗にいつたものだ。攘夷論のやかましい際だから、洋學者は固陋な愛國家や物の分らない刺客からつけ狙はれ、一命の危うきことも一再でなかつた。そこで福澤が、今こそ洋學者のいふことは餘り進みすぎてゐるが故に片輪扱ひにされる、が、もう少し世の中が進めば、これがあたりまへに思はれる日が來るのだといふ事を婉曲に諷したのだ——と。（『町人諭吉』參照）

なるほど、これも一解釋ではあるが、私はさうは思はない。やはり直接には日本の婦人が眉を剃つたり、齒を染めたり、不自然な化粧をしてゐるのを戒め、間接には煩雜な、不自然な封建的社會の弊風を突いて、もツと天然自然な制度に則るべきを敎へたに違ひな

い。力點をおいたのは二十歳になつて蔭口をきかれなくなつた所でなく、むしろその出生、その出發が如何に不自然、不合理なものであるかといふ點なのである。その證據には左のごとき言葉で物語を結んであるではないか。

『このむすめは、不幸にして幸を得たるものといふべし。外國にてはかゝる不具に生れつきなば、生涯身の片付も出來ぬはずなるに、幸にして日本國に生れ、同類のかたわ多ければこそ人の妻となる上は、その娘の時の出來を知るものこそこれを不具なりといはん、知らずしてこれを見れば、隣の細君が眉をはらひおはぐろをつけたる風に少しも異なるなし。唯となりの細君は剃刀を以て眉の毛をそり、ふしの粉を用ひておはぐろをつけ、錢を費し手間をかけ、まんぞくなる顔に疵をつけて漸くかたわになると、この娘は生れつきあつらへのかたわづらにて、剃刀を用ひず、おはぐろを求めず、やすく〱と世間のかたわに仲間入して錢も手間も費さゞりしとの相違あるのみ。實に不思議なるは世間の婦人なり。髮を飾り衣裳を装ひ、甚だしきは借着までしてみえを作りながら、天然に具はりたる飾りを

ばおしげもなく打捨てかたわ者の眞似をすとはあまり勘辨なきことならずや。まして身體髮膚は天に受けたるものなり。漫りにこれを疵付くるは天の罪人ともいふべきなり。』

以上の引用は私の解釋の方が太田博士のそれより妥當なる事を明證する傍ら、福澤の文體がどんなものであつたか、引いては明治五年ごろの文學が如何なるものであつたか、その片鱗を窺はすであらう。

參考書——福澤諭吉について知らうと思ふなら第一に彼の自叙傳なる『福翁自傳』を讀まなければならぬ。ルッソオの『懺悔錄』にはまだ多大な嘘と誇張がある、ミルの『自叙傳』に至つて始めてこれなしといはれた。そのミルの著と併稱する人さへある名著である。外には太田正孝博士著『町人諭吉』、田中王堂氏著『文明批評家としての福澤諭吉』、近くは石河幹明氏の『福澤諭吉傳』五册。

四　明六社の急進的論策

西洋文明が洪水のやうに移入されると共に、珍事異聞をはじめ諸種の知識の傳播機關な

る新聞雜誌發行のことも既に文久年間あたりから吾が國で實現されてゐた。が始めは西洋の新聞の飜譯を木版活字で日本誌に刷つたものであるにとゞまり、維新の際には漸くそれが官軍と賊軍の戰況を報知するところまで進化した。(尤も發行者が福地源一郎始め幕府の遺臣が多かつたゝめ、官軍戰敗の虛報などを傳へた)

それが直接に文明の促進と交涉し、文學史と連絡するやうになつたのは、實に明治七年發行の『明六雜誌』に始まるといつていい。その發行の宣言は次の如くである。

『頃日吾儕盍簪し、或は事理を論じ、或は異聞を談じ、一は以て學業を研磨し、一は以て精神を爽快にす。其談論筆記する所積つて冊を成すに及び之を鏤行し、以て同好の士に頒つ、瑣々たる小冊なりといへども邦人のために知識を開くの一助とならば幸甚。明治申戌二月。明六社識。』

この『吾儕』とは當時の新知識たる洋學者の一團で、前記福澤諭吉もその一員であり、外には西村茂樹、津田眞道、西周、中村正直、加藤弘之、箕作秋坪、杉享二、箕作麟祥、

神田孝平などが名を列ねた。

これは明治六年七月に森有禮が主唱して立てられた學者の團體だから、それで明六社の名がある。英國でもジョンソン、バークなどの文人や史家が會同して始めて倶樂部が生じたのだが、明六社はいはゞ日本の洋學者の倶樂部であつた。そして新興日本の文明的論策、急進的社會改造論——それは明六社の獨占に歸した觀があつた。そして福澤がより多く物質的改革家たるに對比して、精神的改革家たる立場を取り、明治三年『西國立志篇』を出して洛陽の紙價を高からしめ、當時御法度の聖書を推稱し、講讀して憚らなかつた者は敬宇中村正直である。

その他の人々も、それ〴〵明治の開化に貢獻したこと尠少でないが、こゝではそれを個別に記してゐる暇がない。假りにこゝへ『明六雜誌』第三號までの總目次を轉載して見やう。

第一號

第二號

第三號

第一卷の劈頭から國字をローマ字書きにせよとの急進論が見えてをり、第二卷の卷頭論文にはコムムニスト黨やリベラールの語の紹介も見える。以て明六社の主張の如何に急進的であつたかを知ると共に、又當時の思想的潮流の最尖端がこれによつて窺はれるであらう。

五　戯作者の殿將　假名垣魯文

附　成島柳北

明六社の一派を、假りに硬派の文學といふなら、別に軟派と稱すべき一派がある。前者は文明的論策を以て當時の知識階級の眼を開かうとし、後者は徳川期に異常な發達を遂げた戯作――、稗史、小說、その他草双紙式の讀物を以て一般大衆、婦女幼童に至るまでの愛玩に供しやうとする。

隨つて硬派が主として洋學者なるに對し、軟派は幕末から殘存した戯作者であつた。試み

に名を擧ぐれば假名垣魯文、萬亭應賀、二世爲永春水、柳水亭種淸、山々亭有人、笠亭仙果、梅亭金鵞などで、中んづく魯文は垢脱けのした點と、讀者の嗜好をはかる目さきのよく利く點とにおいて、さながら彼等仲間の首領たる觀があつた。

魯文一代の著作は隨分と多い。しかし今日、明治文學の研究家が目を通すものは大抵左記の數點に限られる。即ち『萬國航海西洋道中膝栗毛』『安愚樂鍋』『胡瓜圖解』『高橋阿傳夜叉譚』

右の中『安愚樂鍋』は當時急速に東京市内に殖えて來た牛肉店に牛可通が幾人か寄り集まつて、變痴氣論を戰はす時勢諷刺の滑稽譚である。一體日本人は、いつごろから牛肉を食ひ始めたものであらうか。ペルリが下田港に滯在中、牛肉の缺乏に困じはてゝ、日本側の役人に何十頭かの牛の提供を懇請すると、役人は船中で耕作も出來まいが、そんなに多數の牛を何にするかと訊ねた。彼等が食糧にするのだといふと、役人は、『牛は人の勞役を助くる仁獸なるに屠殺して食らふとは以ての外である』といつて、一應これを拒絕した

事が記錄に見える。それによつて、日本で牛肉を食ひ出したのは少くともその後の事で極めて近世であるとの推察が付く。現に田舍にゐる私の母などは、今でも牛肉の匂ひを氣持が惡いといひ、またそんな惡臭を家の中でたいては御先祖の位牌に對して濟まぬといつて、私の少年のころは、家の中では煮させなかつたものだ。

その位だから、明治の初年においては、牛肉屋そのものゝ未だ珍らしく、青年がこれを食ふのは、あたかも明治末期に青鞜の女性諸君が五色の酒を呷つた事が新聞種子になつたのと同じほど、舊弊な世人の眼に駭異として映つたらう。魯文はこの點を敏感に觸知して作品の材料としたので、今から讀むと時代の相違を知るよき一資料である。

『胡瓜圖解』は福澤諭吉の名著の一つになつてゐる『窮理圖解』をもぢつたパロディである。窮理とは今日の物理學の事である。パロディとはたとへば『秋の田のかりほの庵の苫をあらみ……』を『秋の田の刈りほす稻をぬすまれて……』といふやうに名作をもぢつた擬文、擬詩の類をいふのだが、明治の初年には隨分とこれが流行した。たとへば萬亭應

賀には、同じく福澤の著『學問のすすめ』『かたわ娘』をもぢつた『學問雀』『かたわ息子』がある。魯文の著作もその類に外ならない。

『西洋膝栗毛』は一九の著作から思ひ付いたもの、東海道が西洋に變つた所に時代の推移が窺はれる。明治初年には英語を知つてゐると、大變にえらい人間のやうに思はれたもので、この書中に彌次郎兵衛、喜多八がロンドンへ行つて『さすがに西洋だなあ、子供までが英語で話をする』と感嘆する滑稽のあるのは、この書を一讀した事のない人まで知つてゐる。但し魯文は渡歐した事がなく、主として福澤の『西洋事情』その他を基礎として空想ででつち上げた西洋を書いたのだから、實況とは非常に違つたものだ。たゞ明治初年まるで驚異な世界として、崇拝と好奇心との對照となつた西洋を、實地に西洋に行つた事のない人間が大凡どんなに空想してゐたかゞ窺へるのがこの書の面白い點である。

以上の諸著を中心としてみた魯文の作は主に諧謔と皮肉と滑稽とに異常な才氣を輝かせてゐる。地口や語呂を合せるに巧な點は驚嘆の外ない。が單にその場限りのもので、深き

文明批評も見えねば、深刻な人間觀察の結果として發せられたものでもない。折角の嶄新さが單に趣向の上に留まつて、その上に進んだ所がない點は、どうしても江戸戯作者の直系だといはなければならない。

『高橋阿傳夜叉譚』は、同じく魯文の著作でも上記の諸著とはやゝ趣を異にした實錄風のもので、世を騷がした稀代の毒婦の一代記を虛實うち交ぜて草双紙風に綴つたものである。いづれかといへば、魯文の才氣も現はれてをらず、彼の作としてはむしろ傑れたものといふことが出來ない。が夜嵐お絹、權妻お辰、鳥追お杉などゝ題するいはゆる毒婦もの〻草双紙が一時かなり世好に投じたので、こゝに一言しておいたのである。

成島柳北は魯文のごとく戯作者ではない。維新前は幕府の重臣であり、門地も高く、魯文とは違つて英書も一通り讀めれば漢文は殊によく出來た。が、明治になつてからは向島に風流隱士として退隱して世の事にかゝはらず、新政府の施設を冷やかに眺め過ごした。そして『花月新誌』といふ雜誌や『朝野新聞』に諷刺や戯文を草して僅かに鬱をやつた。

『柳橋新誌』三卷と『京猫一班』が中んづく世に迎へられた。前者は江戸及び東京となつてからの柳橋、後者は京都の祇園の花街の見聞を書き綴つたもので、流暢な和臭漢文だから今日も優に流讀するに足りる。紀行文や詩の遺作も多く、古錢に通じてその著があり、刊行はされなかつたがペルリの『日本紀行』の譯書もある。

六　政治小說と飜譯小說

明治七年一月、板垣退助、後藤象二郎、古澤滋などは『民撰議院設立建白書』なるものを時の政府に提出した。民撰議院とは即ち衆議院の事である。

これは意外の波紋を全國の津々浦々に向つてまで卷き起して、新政府の施設にあき足らぬ有志が所在に蹶起した。そして土佐の立志社を筆頭に、大小さま〴〵な政治的結社の全國に出來た事、恰も今日の無產政黨の支部の如き觀があつた。殊に城山に西鄉隆盛が敗れて以來といふもの、到底武力をもつては新政府に迫り得ない事が明かになつたので、ます

ます政治運動が白熱した。
そこで明治十五年には、さすがに政府も民間の運動を無視し得ず、二十三年を期して議會を招集し、憲法を制定すとの勅令を發布した。民間志士の得意や思ふべきである。彼等は意氣軒昂として、文字通りまさしく意氣天に冲する勢ひであつた。世に自由民權運動といふのは卽ちこれを指す。
そして自由民權運動を理論的に指導し聲援するに、英、佛二樣の潮流があつた。佛派の代表は中江兆民で、その譯に係るルツソオの『民約論』は一部青年から寶典の如く尊重せられた。現在唯一の元老西園寺陶庵公も明治十四五年のころは東洋自由新聞を發刊し、この運動を支援して宮內省の頭痛の種子になつた事がある。
英派の方は福澤を始め、三田出の俊才が多く陣頭に立つた。佛派は主に自由黨なる政黨の下に集り、英派は改進黨の周圍に參じた。前者はより多く、急進的で、矯激で血氣の青年が多く、後者は漸進的で着實で旣に家をも成してゐるといふやうな人が多く集つた。今

日の無產政黨に比較を取れば、前者は勞農黨の如く、後者は社會民衆黨のやうであつたといへる。この氣勢は自づと文藝作品にも反映せずにはゐなかつた。そしていふところの政治小說が續々として雨後の筍の如く現はれた。

その中で今日讀んで見るだけの興味のあるのは矢野龍溪の『經國美談』と、柴東海散史の『佳人之奇遇』とであらう。藤田茂吉の『文明東漸史』も一過讀の價値はあり、多くの明治文學史家が政治小說の中に數へてゐるが、これは嚴密に史談であつて小說ではないと私は思ふ。小說といふ以上、多少假構の分子が含まれてゐなければならないはずだが、東漸史には全然それがない。

面白いのは『經國美談』もなか〳〵面白いが、何をいふにも遠いギリシヤのテーベの覇業をグロートの史書によつてその時代に向くやうに潤色したものである。政治小說なる當時特有の文藝の核心に觸れたいと思ふ人には私はやはり『佳人之奇遇』の方をすゝめたい。

これは會津落城の悲運に泣いた著者自身がアメリカに遊學中、幽蘭紅蓮の白皙の二人の

美人志士と邂逅したことから筆を起し、舞臺は全世界に跨り、强大國の横暴、弱小國の悲運を慷慨激越する氣の全紙面に横溢した物語である。

中には色々な漢詩が挿んである。それが當時はいかなる山間僻地の讀書靑年にも聲高に朗吟せられたとの一事で、それがどんなに流行した小說であるかゞ分るであらう。讀者がもし德富健次郞氏著『黑い眼と茶色の眼』なる小說を一讀さるゝならば、『佳人之奇遇』が明治二十年以前の同志社で如何に愛讀せられてゐたか一端を窺ひ得る。なほ德富氏はその著書の中で、新島襄氏の夫人は會津落城の際『明日よりはいづこの人か眺むらん、なれし大城に殘る月影』なる詩を題して奮戰した烈婦で、『佳人之奇遇』にも出現すると書いてあるが、それは同書第二卷にある挿話で、しかも繪まで入つてゐる。

それから數年の後に出た末廣鐵腸の『花間鶯』『雪中梅』などの小說も、同じく政治小說として名高く、殊に國會開設をあてこんで書いた點が注目するに足る。

飜譯小說が現はれ始めたのは、政治小說のそれよりも早く、明治十一年刊行の、川島忠

之助翁譯『八十日間世界一周』（佛ジュール・ヴェルヌ原作）、丹羽純一郎譯『花柳春話』（英リツトン原作）などが先頭を切る。川島譯はやゝ逐字に近いが、丹羽譯は荒筋を傳へるだけの粗笨なものだ。後に英語世界の記者はかうした譯文を『豪傑譯』と稱した事がある。川島氏はトランプのハートやダイヤを『燕』『菱』などと譯してをり、丹羽氏は今日なら『キスさせて下さい』とでも譯すべき所を、『乞ふ卿が朱唇を一嘗せしめよ』などと譯してゐる點、微笑なしには讀めない。明治十五年大久保勘三郎譯『群芳綺話』出づ。これイタリー文學飜譯の始め、原作者はボツカチオ。明治十六年井上勤譯『禽獸世界、狐の裁判』出づ。これドイツ文學移入の始め、原作者はゲーテ。同年高須治助譯『花心蝶思錄』宮崎夢柳譯『鬼啾々』など出づ。これロシヤ文學飜譯の始め。原作者はプーシキンとステプニヤツク。

參考書――明治のころまでの文學の參考書として私が最もよいと思ふのは「文藝講座」所載、小島政次郎氏の明治文學史である。

二　坪内逍遥と二葉亭四迷

――固有明治文學の創成――

一　新文學の曉鐘

明治九年八月の事である。伊勢の四日市から船に乘つて、難航の後横濱へ着いた二十人許りからなる書生の一團があつた。彼等はみな名古屋英語學校の卒業生で――そのころ官立の英語學校は東京、名古屋、松山、長崎など全國に數ヶ所位しかなかつた――これから東京の大學に入るべく、青雲の志を抱いて故郷を出發したのである。この一行の中からは後に三菱の婿となり、憲政會の總裁となり、遂に一國の總理とまでなつた加藤高明も出た。シーメンス事件後海軍大臣となつて部内の廓淸に鮮やかな手腕を揮つた海軍大將の八代六郎も出た。明治の文運を新たに開拓して、文藝を眞の軌道にのせた博士坪內逍遙も出た。

旣に見た通り、それまでの文藝は、江戶時代から引き續いた卑俗な戲作か、文藝を宣傳の傀儡と考へる幼稚な政治小說、不完全な泰西文藝の畸形的飜譯などに過ぎなかつた。それを坪內逍遙が出でゝ始めて、藝術の眞の價値と使命とを宣示した。この劃期的機運を作

つた書は『小說神髓』と『一讀三嘆當世書生氣質』とである。共に明治十八年の出版。

大學に於ける逍遙の成績はあまり芳ばしい方でなく、英語が出來なくて一度は落第した事もある。ある年の試驗に、シエークスピアを講義してゐた米人教授ホートンから、王妃ガーツルードの character（性格）を批評せよとの問題を出され、この character の意味がよく分らないで、（恐らく品性といふ當時行はれた日本の譯語から考へ違ひをして）道德的な解釋をして惡い點をつけられた。それから發奮して圖書館に通ひ、西洋の文藝批評を漁り讀んだ。その結果、文學が自分の從來考へてゐたものとは非常に違つた使命をもつものである事を悟つた。

それまで逍遙は、名古屋にゐるころ大惣なる貸本屋の倉の中にある稗史小說を讀み盡してゐたので、その方面に通曉してゐることは、當時の帝國大學の學生中第一番であつた。その代り文學に對しても江戶式な傳統に捉はれた考をしてゐたのを、この圖書館通ひですつかり叩き壞した。當時はさきにもいつた如く假名垣魯文が文權を支配してゐて、その弟

子入りをなし、その名前の一字を頂戴した戯號でも付けなければ中々筆を以つては世に立てなかつたので、逍遙も一時はそんな考へを起した事もあるが、泰西の高尚な文藝批評を讀み漁るに及び、漸くそんな舊式な考へから醒めた。この間の研究が後に整理統一せられて、『小説神髓』となつたのである。

それから明治十五年ごろの事である。東京大學學生中の有志が市川鴻の臺へ遠足した。その時一行に加はつた面々をモデルにして、逍遙は面白可笑しい紀行文を草し、みんなに見せた所、モデルが一々紙面の上に躍動してゐるといふので非常な喝采を博した。彼はそれを骨子とし、更に西洋の新らしき小説に暗示を得た趣向を加味して世に問ふた。これが『當世書生氣質』で、明治新文學の先頭を切る榮譽を荷なふた長篇小説である。

『小説神髓』にはどんな事が書いてあるのだらうか、まづ「美術」（今なら「藝術」とあるべきだが、そのころはまだそんな言葉がなかつた）の何たるかを說き、次に「小說」もまた美術の一分野である事を說き、泰西小說の發達史から、ロマンスや劇と小說との關

係及び差異を說き、一轉して小說の主眼は專ら人情を寫すにある（今の言葉でいへば人生の眞を具現する）事を說き、德川末記に馬琴などを中心として一世の流風をなした勸善懲惡思想——卽ち善人榮えて惡人滅ぶの訓戒的主旨を寓するのが決して小說の主意でない事を說き、文體論、脚色法、主人公の論、叙事法などのテクニックにまで論及した。

これで、日本人は始めて、なるほど文學乃至小說とはそんなものか、卑猥なエロチシズムと淺薄な敎訓を綯ひ交ぜにした江戶末期の物語とは違つてさうした高尙なものであり、人生と緊密な重要な係はりをもつものであるかといふ事を知つた。この書は一面、馬琴を攻擊したものとして知られてゐるが、逍遙は馬琴の殆ど全著作を涉獵し、その八犬傳を繰返して讀むこと數十回に及んだと噂されてゐる、それほど愛好し、耽溺した馬琴であつたればこそ、巨細に缺點が眼に映つて遂にその弊に堪へられなくなり、馬琴を打つのかたはらその背後に鬱積してゐた時の人の文藝に對する迷蒙を打破したのである。近代小說は十八世紀の中ごろ英國に發生して全歐を風靡し、それを理論的に究明した小說論の著述は英

國においてはウオタア・ベザントなどが最も早いが、ベザントの小說論と逍遙の小說神髓とは同年に著述され、刊行にもわづかに一年の差あつたのみである。されば海外にも纏まつた參考書が一冊としてない時に、大學の圖書室に備へられた西洋雜誌の論文などを拾ひ讀みしたゞけで、これだけの著述を纏め上げた逍遙の見識は偉としなければならぬ。

『書生氣質』はその議論の實物見本ともいふべきもので、明治十四五年の大學の學生生活を寫したもので、中心の筋といふものは乏しく、いへばサツカレイ流の Discursive Style (散漫體) 又は Novel without the Hero (主人公なき作) ともいふべき小說である。小說といへば荒唐怪奇な因緣話か、淺陋卑俗な色話のやうにのみ心得てゐた讀書界は、この輕妙な、淸新な物語を驚喜して迎へた。殊に作中人物には大抵一々モデルがあるので、一層內部の喝采を高うし、しかも作者は大學を出たての年少な文學士で、これが述作されたのは學生時代であつたといふやうな噂もこの作に對する好奇心を强からしめた。

しかし急激な時代の歩みは、出た當時破天荒に淸新な作とせられたこの作をも、今日で

は錆びさせてしまつたが、回顧的興味のもてる人は今も一讀して見るがよい。篇中に最も多く出てくる小町田のモデルは今の高田早苗博士、西瓜を拳骨で破つて食ふ快漢桐山は三宅雪嶺博士、一番の遊蕩兒になつてゐる宮賀は有賀長雄博士だなどといふ事まで明瞭に分つてゐる。

二　坪内逍遙の功績

劇作界の第一人者

明治新文學の序幕を開いた功績者なる坪内逍遙は、その後の文壇の潮流の幾變轉にもおし流されず、常に恒星の如くに輝いて今日もなほ矍鑠たること壯者を凌ぐが如き勉强ぶりを示してゐる。隨つて明治、大正、昭和三代を通じ、半世紀に渡つて文運の開拓に貢獻した事は尠少でない。

小說の作では『妹と脊かゞみ』と『細君』とが傑れてゐる。逍遙は後に二葉亭四迷などの

擡頭後、自分に小說を書く才能のない事を悟つて、筆を折つたが、以上の二作は彼がその方面にも優に第二流には位し得べき素質を持つてゐたことを明證してゐる。殊に『細君』は明治最初の短篇小說（そのころは端物小說といつた）の一つで、二葉亭の影響の跡が著るしく見える。

劇においては作家としても批評家としても彼の右に出づる者はない。殊に私は『桐一葉』を好む。これは明治年間における最高最大の歌舞伎劇の一つで、彼の事を殆ど語つた事のない永井荷風でさへ『ワグナアの樂劇を見るやうに偉大な作者の權威が見物人の首筋をギユウ〱と押へつける』といつてゐる。シエークスピア三百年記念祭の時、ロンドンの王立大學で、世界的な學者の列にある。シエークスピアの研究者としては世界的な學者の列にある。シエークスピア三百年記念祭の時、ロンドンの王立大學で、世界各國の著名な沙翁研究家の寄稿を集めた論文集を發行したが、日本を代表して之を求められた者は勿論逍遙であつた。彼は“Shakespear and Chikamatsu”なる一篇を寄稿してゐる。

早稻田大學文科の統率者として、今日の隆盛に至らしめたのも彼なら、兒童劇を創設し

て、あのやかましやの岡田文相に『これなら差支ない』といはせたのも彼だ。森鷗外との對戰の『沒理想論』は明治大正空前絶後の大論戰で批評壇の確立に預かつて效あり、日露戰爭の後では西洋のオペラのやうな國劇を建設することを考へて『新曲浦島』『新曲かぐや姫』などを作つた。高山樗牛とニイチェ論を戰はして倫理學界の方面にも問題をひき起してゐる。されば明治の末年文部省に官設文藝委員會が開かれた時、最初の賞金を、『日本文壇開拓の最大功績者』としての逍遙に贈つたのはさもあるべき事と思はれた。

逍遙出づるまでの日本の青年の情熱は悉く政治運動――自由民權運動に注がれたといつてよいが、逍遙出でゝ後は一部青年の志望が文學に向いた。

明治中期の文壇において個人として語らねばならぬ文人は二葉亭、鷗外、紅葉、露伴、樗牛、一葉、團隊として語らねばならないのは隱然として紅葉の統率した硯友社、透谷を中心とした『文學界』、蘇峰の創立した『民友社』、子規の中心をなした『ホトトギス』、與謝野鐵幹の起した『明星』、外に東京大學の文科と、東京專門學校（後の早稻田大學）の文科

などであらう。順を追うて之を敍して行くであらう。

三　二葉亭四迷

驚異すべき名作『浮雲』

『小說神髓』と『書生氣質』の出た翌明治十九年一月二十五日、坪内家の玄關に刺を通じた一青年があつた。名は長谷川辰之助といつた。

その後その青年はしば〳〵坪内逍遙を訪れては、『小說神髓』に一杯不審紙（今はさういふ事をする人もなくなつたが昔の漢學書生は讀書中十分に會得出來ない所に出會すと赤い紙を貼りつけたものである）を貼り付けて議論した。彼はロシヤ語を學んでゐたので、ベリンスキイ受賣りの藝術論を頻りに自分でも述べた。

この青年もまた小說家志望だつたが相憎と國文の素養を十分にもたぬので文章が堅くて困るとこぼした。

『君は圓朝の落語をきいた事があるか。』から逍遙が尋ねた。

『あります。』

『あの落語の通り一つ書いてみたらどうだ。』

そこでその青年は家に歸つて、ロシアの文豪ツルゲエネフの名作『父と子』を『通俗虛無黨形氣』と題して少し譯してみた。但しこれは出版にはならなかつた。ついで一篇の小說をものした。逍遙は一過讀するとハタと膝を打つて『頗る妙！』といつた。

そして金港堂へ出版の掛合をすると、逍遙と合著の名儀なら出してもいゝといふ事で、相談がきまつた。青年はその時まで冷冷亭杏雨の戲號をもつてゐたが、その前後に叔父さんから『無益の穀潰しの文學なんかやる位ならいつそくたばつてしまへ』と叱られた、しかし自分は眞劍に文學をやる積りだつたので、叔父さんの愼戒の言をそのまゝもぢつて『二葉亭四迷』と號を定め、それをその新作に署した。かくして明治文壇隨一の傑作に推さるべき、『浮雲』は世に現はれたのである。

あの早い時代に、かうした精刻な心理描寫になる立派な小説が現はれた事は、明治文學史上の最大驚異である。この作は明治の末期、或は大正時代に現はれたとしても優に名作の一に數へられたらうが、それが明治の二十年に出現してゐるのである。

この小説を初めて讀んだ時の感想を德富蘆花はその自叙傳的小説でかう書いてゐる。

『……その中に「浮雲」といふ紙表紙の小説があつた。「妹と脊鏡」と「書生氣質」で夙に名を知る春の舍主人著と表にあつて、中には二葉亭四迷著とある。殆んど初めてぶつつかつた口語體の文にいささか勝手が違ひながら、一頁、二頁と繰る每に一句のたるみもないきび〳〵とした一筆々々に、景も人も心の底までも活々と鮮明に浮み出るその筆力に魅せられずにはをられなかつた。一時間の後には、敬二は、赤くなつたり、微笑んだり、色を失つたり、涙ぐんだり、震へたり、大息ついたりする人であつた。敬二はこれを餘所事に文字の戯れとして見ることは出來なかつた。彼は自分の爲に書かれた寧ろ自分を書いたものとしか見ることが出來なかつた。……敬二は恐ろしい「浮雲」をはたとふせて、二

度と繰返しては讀まなかつた。』（黒い眼と茶色の眼・三二〇－三二二頁）

この敬二とは蘆花自分のことである。

實をいふと『小説神髄』の理論の眞の見本はこの『浮雲』において示された。『書生氣質』にはまだ多分に舊戯作的不純物が殘存してゐる。『浮雲』の内容を一口にいふと漢學も英語も上ツ面を嚙つた浮薄な併し新時代らしい（今日の言葉のモダン・ガールに該當する）お勢なる女主人公を巡つて、調子のいゝ、上役には諂ひ下には威張るいはゆる當世向きの才子の本多と、意久地なしのハムレツトから情熱をぬいたやうな文三との戀の三角關係で、世紀末的なモダーンな匂ひがすでに感ぜられる、それに物語が凡て文三個人の視點を通して語られてゐて、『書生氣質』の如く視點が隨時に散亂せず、“Compacted Style”（緊縮體）を取つてゐるのも完全に近代小説たる資格に該當してゐる。

ついで彼は明治二十一年ツルゲエネフの名作『あひびき』の飜譯を出したが、これまた時の文壇を驚倒させ、渺たる一短篇の譯でかくの如くわが創作壇の培ひとなつたものは他に

ない。國木田獨歩の名作『武藏野』なども最初の暗示を此の作に負うてゐる。爾後は主として飜譯のみを示し、明治三十年ごろの『太陽』に連載せられた『浮草』(ツルゲエネフのルーヂン)は、花袋、獨歩、風葉などの讃崇愛讀措かぬもので、風葉の最大傑作『靑春』はこの書の暗示の中に胚胎した。

しかしこの少し前から一種深刻な煩悶と懷疑とが彼を捉へ始めた。『文藝は果して男子一生の事業とするに足る乎!』から彼は疑ひを抱いた。二葉亭といへばすぐにもこの懷疑が連想される位である。さうも勝れた天禀がありながら彼は自分に文人たるの才能の稀薄な事を痛感し、政治とも付かず事業とも付かず――謂はゞその二つを合せたやうなものをなしたくて、頻りに焦慮した。その結果、專ら文壇とは絕つて外國語學校、海軍省、官報局、北京警務學堂等にも勤め、滿蒙に飛躍を目ろんだ事もあるが一も成功したのはない。

日露戰爭當時は東京朝日新聞社員となり頻りに滿蒙の經營策を論じ、及びその方面の調査に沒頭したが、池邊三山その他が切にすゝめたので二十年目に小說『其面影』を連載

した、兎角の評もあり、『浮雲』以來進境なしなどともいふが、名作である事は爭はれない。老巧圓熟、しかも銀臺に燻しを掛けたやうな眩しさをもつてゐる。ついで『平凡』が出た。自叙傳體のものだが、讀めば讀むほどふしぎな魅力を以てゐる。殊に犬の描寫の所など恐らくは日本に文字あつて以來の名文章であらう。

いやしくも明治文學に關心をもつほどの者なら二葉亭全集だけは必ずみんな通讀しなければならない、飜譯雜纂の末まで見のがしてはならぬ。そこでは明治年間の最も優れた文藝作品に接し得るのみでなく、文人中最も大なる人の、最も大なる魂が時代の惱みを脊負うて息づいてゐるのと邂逅する。私が明治年間において最も畏服する文人は二葉亭四迷と後に說く幸田露伴である。

參考書――二葉亭について知らんとする人には先づ坪內逍遙、內田魯庵共輯の『二葉亭四迷』、內田魯庵の『思出す人々』、藤森成吉が日本文學講座に書いた『二葉亭四迷』、この三つをおすゝめする。

三　紅葉と露伴と鷗外

——明治極盛期の文學——

一　尾　崎　紅　葉

婦人に人氣のあつた作家

中興期明治文壇の諸恩人中、或は『文章報國』と唱へ、或は『七度生れて文につくす』といひ、徹頭徹尾文に殉じた者を求むればそれは尾崎紅葉であらう。坪内逍遙は半ば敎育家で大學で修めたものは政治學であつた。森鷗外は軍醫が本職である。內田魯庵は丸善の社員である。長谷川二葉亭は經世に志ある夢想的な政治青年である。だが尾崎紅葉だけは頭から尻尾までどこを削つても出て來る本質は文學であつた。明治文學は紅葉において完全に獨立したといへる。廣津柳浪、江見水蔭、川上眉山、巖谷小波、石橋思案などと硯友社を組織して自から統帥者の位地に立ち、門下には泉鏡花、小栗風葉、德田秋聲、柳川春葉その他の諸秀才を集め、海內の文權を一手に掌握して、紅葉に睨まれたら文壇に立てないかの觀さへあつた。讀書界の人氣も最も多く彼に集まり殊に婦人の讀者が多く、『金色夜

叉』は蘆花の『不如歸』と並んで明治時代の最もポピユラアな作品である。

しかし私は實をいふと紅葉を餘り好まない。私達が文藝を修業したのは明治末期の自然主義時代で、紅葉を惡くいふのが常識のやうになつてゐた時代であつた。その感化を受けたのだらうが、そればかりでなくどうも肌合ひが合はないらしい。今は德田秋聲氏などを始め紅葉再評價の氣運が大いに向いて來てゐる。そこで私は改造社及び春陽堂から寄贈を受けた一圓本の紅葉集を讀み直しかけたが、甘たるくて我慢にも讀み通せなかつた。しかし私の妻は叉、貪るやうにそれに讀み耽つてゐた。婦人讀者には紅葉は依然として魅力ある作家らしい。

だが私も少年時代には『金色夜叉』だけは八九回位繰返して讀んだものである。十六の年の春であつたか、ある文學雜誌の懸賞文でこれを貰つて、朝から夜の八時ごろまで掛かつて一日に讀破した記憶がある。

『多情多恨』も讀んだ。これは紅葉が『自家の米の飯』だとも、『快腕一揮の大作』だ

とも號してゐるもので、新らしい批評家の間にも評判のいゝものであるが、私にはちつとも面白くなかつた。

なるほど、書き出しの三行に三日を費し、『金色夜叉』の發端の一枚は七回も書き直したといふほどの苦心談が傳はつてゐるだけに、明治年間第一の名文家には違ひない。しかし彫琢にすぎ、餘りに滑らかで、美人に譬へるなら丸ぽちやの色白の萬人向きの顏だが、それだけに特殊美に乏しい。私は格調の謹嚴さにおいて鷗外をより多く愛讀し、或は雄渾、或は枯淡、或は峻峭たるの點において、より多く幸田露伴を愛讀するものである。

紅葉については或は讀者諸君の方が私などよりよく通じてゐられると思ふから、これ以上を語らない。

二　幸田露伴

東洋的な理想主義

紅葉露伴と並び稱された位で、この二人は明治中期の文壇に日月の如く並び輝いた文豪である。

一般の人氣は勿論紅葉の方が遙かに多かつた。しかし少數の識者は露伴をより多く尊敬した。たとへば内田不知庵でも、高山樗牛でも、國木田獨步でも。

紅葉は單に描いたに止まるが、露伴はうちに何物か『想』を含めてゐる。この故に紅葉の寫實主義、露伴の理想主義といふ事がいはれた。そして露伴の想は佛典から來てゐるといはれてゐるが、必ずしもさうばかりではない。むしろもつと漠然と東洋的敎養から來てゐるといつた方が謬りなきに近からう。凡て西洋から舶來のものでなければ價値がないやうにいはれた明治以後の日本に、東洋的な理想を寓した小說など古くさくて讀まれぬではないかと思ふ人があるかも知れないが、露伴くらゐ博大に、深奥になれば、古い、新らしい面白くないなどといふ事を超越してしまつて、胸に響く者がある。それもメスが病患を抉るやうなのとは違つて、物古りた鐘樓の梵鐘が、秋の夕風に撞くともなく音を發して、陰

々として物寂びた空氣の中に傳はるやうな響き方である。

紅葉の『金色夜叉』に對比される露伴の大作は『天打つ浪』である。前者の未完なるが如く、後者も遂に完結されなかつた。併し露伴の眞價を伺ふには、この作は不適當である。中には西行法師を描いた『二日物語』をあげる人もある。私など少年時代にこれは丸暗誦してゐた位に愛讀したものであつた。後にこれは上田秋成の『雨月物語』を作り替へたものであることを知るに及び、模作は遂に原作に如かないと思つた。大町桂月の罵つたのも謂れなしとせぬ。

私は『五重塔』、『風流佛』、『一口劍』などに『土偶木偶』、『露團々』その他を併せ讀んで然る後彼を判じて貰ひたい。事實、これらの諸作から入つてゆくのが、眞に露伴を評價し得る近道であらう。

露伴にはすきな人物の型がある。それは平常は晝間の行燈の如くのらりくらりとして何の取柄もなく、いづれかといへば人並より鈍なのろまな男であるが、彼はどうかした機で

一念執着して藝に精進すると、すばらしい天來の妙品を作り出すのである。

この代表的な例が『五重塔』ののつそり重兵衞である。『一口劍』の正藏。それから『風流佛』の珠運などにも幾分似通つた所がある。

小說も傑れてゐるが、その小說のみを見て露伴を評價してはならない。紅葉は小說だけでその全貌が窺へる。尤も俳句などにも彼一流の才氣を見せてゐて、『春寒や、日たけて美女の口そゝぐ』『藝なしの餘寒を裸躍りかな』などの秀句があるが、しかしこれを知らなかつたからとて、彼の價値が減じて考へられる惧れはない。露伴は然らず、小說もえらいが、他の方面にもそれに劣らずえらい述作がある。『枕頭山水』などに見ゆる紀行の妙『爛言』、『長語』『蝸牛庵夜譚』などに窺はるゝ隨筆の味、『名和長年』、『成吉斯汗』などの劇作の考巧。みな捨て難い。それから芭蕉の研究に深く、『冬の日抄』、『春の日抄』などの註解は得もいはれぬ趣味があり、『運命』、『蒲生氏鄉』などの史譚の新體も只推服の外はない。

惟ふに和漢の文學に通ずる事、彼が如くに洽博なるは他に比なく、しかも一藝に秀でたる者は他藝にも傑出する。彼は將棋の强き事とその知識の豐富なる事とにおいても天下に冠絕し、魚釣りも、水の色を見ただけで此處には何が釣れるかをいひあてる事が出來る位に通達してゐると聞く。

繰返していふ。私の明治文壇において、最も、えらい人として推服してゐるのは二葉亭四迷と幸田露伴とである。

三　森　鷗　外

科學的批評建設の殊勳者

明治十五年ごろである。下谷から時々讀賣新聞に來る投書に、非常に物識りらしい人のがある。記者は敬服の餘り一度面晤を得ておかうと思つて訪問し、さぞ白髮の老人が出て來るであらうと待つてゐると、十四五歲の少年が現はれ出て、私がその某だと名乘り出た

のには、腰をぬかさんばかりに驚いた。

その白頭の老人かと謬られた物識りの少年こそ森鷗外であつた。彼は國文學を福羽美靜に、漢文學を依田學海に學び、大學では醫學を專攻した。大學を終るとドイツに留學し、專門以外に文學をも大いに蘊蓄した。

ある日ミュンヘンにおいて、たま〳〵哲學攻究のため來獨してゐた井上哲次郎と落合ひ、二人名物のビールの滿を引きながら、ゲーテの『ファウスト』を朗誦した。そして歸國の後は是非共この世界的名作を故國の文苑に移し植ゑやうと誓ふた。

この誓ひを彼は晩年になつて漸く果し得た。歸朝して間もなく世に問ふたのは『舞姫』の一篇で、文壇はこれにより紅葉、露伴以外、別に小說の行くべき道がある事を知つた。『うたかたの記』、『文使ひ』もその後に試みた創作で、今日からも何の割引もせずに名作といへる。外に彼はドイツを始め西歐の近代文學の名篇を次から次へと移植した。

その中で最も有名なものは『埋木』と『即興詩人』の二長編で、後に生田長江氏は『埋木』

を讀んでその夜安眠の出來るやうな人間だつたら文學など思切つた方がよからうとまでいつた。『卽興詩人』はアンデルセンの自叙傳小說だが譯文の名文なために有名で、原作はさう傑れたものではないから本國でも英米でも日本におけるほど名のある作ではない。つまり凡作を名譯によつて生かしたわけだ。泉鏡花初期の名篇『照葉狂言』が『卽興詩人』の感化を受けた事は明白である。

鷗外はそのやうに、創作と飜譯との上に新領土を開拓したのみでなく、批評壇において何人も企及し難い大なる貢獻をした。それはそれまで日本には無かつた科學的批評を建設した事である。

彼は『柵草紙』なる月刊雜誌を出して、當時著名だつた批評家外山正一、石橋忍月その他を手當り次第に叩き伏せてゐたがやがて『早稻田文學』に坪內逍遙がシエークスピアを註釋して『沒理想の作品』といへるを捉へ、縱橫に批判辨析すると、逍遙は直ちに立つて之に應戰し、ゆくりなくも兩大家の一騎打となつて、應酬半歲にわたつた。これによつて

幼稚な文壇が啓發された事はどれ丈けであるか分らない。鷗外は主としてハルトマンの美學を根據としてゐた。

彼は一時文壇と絶緣したが明治末期から又復活し、小說に、劇に、飜譯に、新史傳或は考證に往くとして可ならざるなき手腕を見せ、常に文壇を指導した。

殆ど萬能の才といふに近い人であつたから世はこれをレオナルド・ダ・ヴインチに比し又は新井白石に比する。本職の醫學の方でも歷代の陸軍軍醫總監中彼の如く有能で多くの業績を殘したものはないといはれる。晩年は帝室博物館總長を勤めてゐた。

四　明治文學の總決算

――その全面的展望――

一　民友社の人々

今までに少しく紙筆を費しすぎたやうであるから、この一回に、爾餘の重要事を網羅して、明治文學の總決算をするであらう。

文學を發達させる機關は時代によつて違ひ、或る時代には樂器が媒介となる。平家物語始め軍記ものは琵琶に負ふ所が多い。或る時代には書冊が媒介となる。江戸時代の物語は草雙紙など考案されて始めて隆盛を來した。ところで明治文學はどうかと見ると、書冊にも負うてゐるが、最も有力な媒介は新聞と雜誌であつた。以下雜誌を中心に少しく、明治文學の重要なモメントを窺うて見やう。

そして第一に念頭に浮かぶのは『國民の友』である。

實はそれまでにも雜誌が無かつた譯ではない。が、一世を開導する抱負識見あるものは『明六雜誌』『民間雜誌』『政理叢談』などの如く學者の片手間になり、然らざる者は『團

々珍聞』などの如く陋俗を極めたものであつた。『國民の友』が出て始めて、新興資本主義の鮮やかな感觸に充ちた雜誌の誕生を見た。

これは明治二十年の創刊。主宰者はそれまでに『新日本の青年』『將來の日本』の二名著を以て一躍新進文人の雄となつた德富蘇峰である。

『嗚呼、國民の友生れたり！』

それまで發刊の辭といへば『文選』『唐宋八家文』などを踏襲した千篇一律のものであつたのに、蘇峰は全然それを打破して、以上の一句を冒頭として淸新な文を書いたから、それは當時の青少年を魅し、從來の日本の文章の和文脈、漢文脈以外、別に歐文脈の一派を創始した。

文藝附錄を付けたのもこの雜誌が最初で逍遙の『妻君』、美妙の『蝴蝶』、鷗外の『舞姬』露伴の『一口劍』、紅葉の『拈華微笑』、二葉亭の『あひびき』など、明治第一期の短篇の名作は全部この雜誌に載つたといつてよい、換言すれば明治短篇小説の搖籃であつた

のだ。
社員にも傑れた人材が集まつた。純文藝方面で名をなした人としては德富蘆花と、國木田獨歩とを先づ推さねばならない。史論家としては山路愛山が出た。
歷史の運行の基底を經濟においた唯物史觀的な見方は、田口鼎軒に端を發し、山路愛山でかなり熟して來た。『源義朝』『足利尊氏』『德川家康』その他の史傳、『現代金權史論』など悉く愛讀するに足りる。
その他才人、多士濟々だが、民友社の當時の狀態を知りたいと思ふ人は蘆花の『富士』第一卷を讀むとよい。

二 文學界の人々

併し『國民の友』は文藝のみの雜誌でなく政治經濟風俗宗教科學その他社會萬般の事に涉るを主眼とし、旁ら文藝をも庇護して來たのである。

純文藝雜誌として華々しい先頭を切つたものは『都の花』、これに續いては『早稲田文學』『柵草紙』などであつた。後の二誌については逍遙と鷗外の項に言及しておいた。

その次ぎには『文學界』を擧げねばならない。これは星野天知が出資者となり、北村透谷が隱然統率者の地位に立ち、藤村、秋骨、禿木、敏などの青年文人が筆をとつた。始めは女學雜誌と看板を打つたが、そんなことには全然頓着せず、高踏的な、情熱的な詩文と議論とで全紙面を埋めた。日本文學で始めて『青春』といふものを明白に感知させてくれるのは實にこの雜誌である。

また從來の日本文學には、西洋におけるやうな聖處女禮讃の思想といふものはない。女を母として、妻として、或は遊女としてみた者は多々ある。しかし純粹に處女性のみを抽象してその價値を論じ、歌つたやうなものはあまり見當らない。その意味からこの雜誌は女性史の上にも顯著なる貢獻をしてゐる。

樋口一葉を有力に紹介したのも彼等だつた。『雪の日』『たけくらべ』などみな最初は

此の雜誌に出たのである。

北村透谷を思ふ度に、私はいつも尊い寶石の破片を連想する。彼は傑れた資質と、奔放なる情熱とをかね備へてゐた。そして世の卑俗性と勇敢に戰つた。が、戰に勝つべくあまりに脆くして、明治二十七年五月十五日遂に自殺して果てたのである。

その全集を讀むと、完成したものは殆ど一篇もない。みな斷片か、未定稿だ。けれども強く胸を打つものが鬱勃として動いてゐる。私は少年期から青年期の移り變りに彼の全集を耽讀し、しまひには、自分でも自殺しはしないかといふやうな恐怖に打たれて、わざわざ全集を遠ざけた事がある。

文學界に據つたのは多く、當時においては無名の青年文人であつたが、暗示として、示唆として、その殘したる業績はかなりに大きい、近代性（モダーニティ）を身を以て體踐して始めて示してくれたものは彼等である。

三　日清戰爭の影響

明治二十七、八年にまたがる日淸戰爭は、さま〲な意味において、日本史に重要な一線を劃したものといへる。

對外戰に勝つて國民的矜持を强め、高めた。軍事品の生産その他で資本の大集中が行はれ、商工業が異常な發展を遂げて、資本主義の基礎が確實に据ゑられた。戰爭の出費は資本家の勢力をいやが上に痛感させて、藩閥が金權に降伏する第一階段が備へられた。そして一般國民は支那から入つた償金の潤ひもあつて、暫く戰後景氣を謳歌した。

この汪然たる新機運を背景にして多くの文學雜誌が生れた。帝國大學の文科からは『帝國文學』、春陽堂からは『新小說』、博文館からは『文藝倶樂部』と『太陽』が創刊せられた。まさに春風春水一時に至るの盛觀である。

四　赤門派と早稻田派

帝國大學の文科は永い間不振であつたが戰後になつて高山樗牛、姉崎嘲風、大町桂月、上田柳村、鹽井雨江、武島羽衣、土井晩翠、桑木嚴翼などが前後して輩出し、大學の價値を上げたとさへいはれた。『帝國文學』は彼等の據つた牙城であつた。

彼等の中において、讀者に今日もなほ一讀をすゝめたいのは高山樗牛と上田柳村(敏)である。樗牛が學生時代懸賞小說の募集に應じた『瀧口入道』は女性に愛好される多くの要素を以てゐるから、諸氏も旣に讀まれたであらう。彼は評論においてもあの通りの絢爛華麗な、極めて情熱的な文を草して一世の靑年を魅了した。彼は美學を專攻し文明史の著述もあるが學者としては大したものではない。思想家としては或は帝國主義を唱へたり、或は美的生活論にニイチェを嘆美したり、晩年は日蓮に傾倒したりして、變轉に餘り系統がなさすぎると批難される。が、その永久に若々しい情熱だけは他の企及し難い彼獨特の武

器である。そしてその當時としては兎も角も第一流の見識と學問とを具へてゐたのだから、數年間は論壇の霸王の如き觀があつた。畢竟するに彼はスツルム・ウント・ドラング（飈風時代）の寵兒だつたのである。

樗牛の或は過當の高き評價を受けてゐるに反し、實價ほど世に認められてゐないのは上田柳村だが、文藝鑑賞家としては、私は、明治時代彼の右に出づる者はないと確信してゐる。彼はどんな目先の變つた新らしい西洋文學でも、一目で善惡を識別し、ペエタア、メエテルリンクなど、西歐の評壇でもまだ評價の定まつてゐない時に、十分の價値を認めて紹介してゐる。讀者の中にも恐らく海外文學の研究を以て生涯の事業とされる人があらうが、少くともさういふ人達にだけは自分の研究が深まると共に柳村の價値が次第に分つて來る。それから『上田敏詩集』だけは凡ての人に讀んで貰ひたい。その中の『海潮音』の如きは明治後半期新詩の方向を定めた稀有の名篇である。

右の外には、私は少時大町桂月の天眞無垢なる文章を最も愛した。

帝大に相對峙してこの當時早稻田の文科もまた大いに振ふた。これは坪內逍遙が統率の任に當り大西操山を補佐として迎へて薰育したものである。操山は明治年間隨一の識見の高邁な、學問の豐富な、生れながらの哲人であり、文明批評家であつた。その全集の如きは何人にも一讀をすゝめたいが、或は女性の嗜好には適しないかも知れぬ。いづれにせよ、明治の文壇乃至思想界が至深の感謝を捧げねばならぬ恩人の一人である。

その逍遙、操山の門下からは金子筑水、島村抱月、後藤宙外、綱島梁川、五十嵐力、長谷川天溪などが出た。

右の中、今日からは島村抱月と綱島梁川とを讀まれたら澤山だと思ふ。私の見る所を以てすれば抱月は、學識豐富、理解明透、情理並び至つて、文藝批評家としては明治年間第一の人であつた。晩年は新劇運動に投じ、松井須磨子の擁護者となつた事は世の知る通りである。

綱島梁川は始め文藝美術の批評家として現はれたが、倫理學の硏究から晩年は宗敎の方

へと歩み寄つてしまつた。常に病床に臥して薬餌に親しんでゐたことが自らさうさせたのであらう。『病間錄』の一卷は、高潮した宗教的感情を朗々誦すべき名文に託したものて明治末期屈指の名著である。殊に『見神の實驗』が世を動かした。

五　ホトトギスと明星

『ホトトギス』は正岡子規を盟主の如くに戴き、高濱虚子によつて發行せられた雜誌である。

正岡子規もまた明治文壇の諸方面の革新に貢獻する所の多かつた一天才である。大學在校時代から俳句に志し、中途退學して『日本新聞』に新らしい傾向の句と論とを載せ始めた。それが期せずして世の注目を集め、非難も數々蒙つたので、子規も勇敢に應戰した。世に日本派の俳句の名稱の生じたのは此の時である。彼は又歌壇の甦生も志し、萬葉への復歸を叫んだ。後の『あららぎ』派の歌は彼を出發點とするといつてよい。

彼は大膽に主觀への偏倚を排し、寫生を徹底的に唱道した。その結果、寫生文なる一新體の文を創造して、客觀文藝の樹立に資する所が多い。虚子の『風流懺法』長塚節の『土』夏目漱石の文などこゝに系統を曳く。

ホトトギスが主として俳句の全面目を一新した如く、『明星』は和歌を革新した。これは與謝野鐵幹によつて創刊されたが、社中に鳳晶子なる天才的少女がゐて、舊弊の道學者を氣死せしめるやうな大膽な情熱を、奔放華麗に歌つたので、新らしい機運が勃然として動いて來た。世にいふ新派和歌はこの傾向を汲んだ歌の事である。

ホトトギスの客觀を標榜せるに反し、『明星』は大膽に主觀の中へ、個人性の中へ燃燒して行く傾向を見せた。ホトトギスの寫實的なのに對して、『明星』の一派はあくまでロマンチツクであつた。

ロマンチツク！　これは日清戰爭後かなり思想界にも文壇にも深く根を据ゑた傾向で灼熱した情熱を通して、或は世界を觀じ、或は人生を解釋せんとした、端緒は早く前述の『文

學界』に見えて、北村透谷がその悼ましき犧牲となり、樗牛を通じて梁川にまで及んだが、『明星』もまた確かに華やかなその一つの里程標であつた。

『明星』と直接關係はないが、藤村操なる十七歳の一少年が人生の不可解を叫んで、華嚴瀑下に投死したのも、明治ロマンチシズムの一犧牲であつたといへる。彼は瀧の上の生木に左のやうな遺書をナイフで刻つてゐた。有名なものであるから全文を揭げておかう。

『悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以てこの大をはからんとす、ホレーショの哲學竟に何等のオーソリテーを値するものぞ。萬有の眞相は唯一言にて悉す。いはく『不可解』。我この恨みを懷いて煩悶終に死を決す。既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安ある無し、始めて知る大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを。』

個の探究、個への内潛——その結果の究まつた一例がこれであつた。今日もはやる華嚴の瀧や、淺間への身投げは、この藤村操が最初の例を作つたといつてよい。彼は菊池大麓博士の令孃に失戀したため自殺したのだといふ話もあるが、そのやうな事は別に深く穿鑿

するにも當るまい。彼の死骸がいつまでたつても瀧壺に浮かないので、彼はどこかに生きてゐるのだとの臆測も行はれ、泉鏡花の『風流線』はそれに想を構へた小説である。

六　硯友社と紅葉門下

しかし文壇の中心は小説によつて形づくられ、新小說、文藝倶樂部、太陽などが檜舞臺でもあり、新作家の登龍門でもあつた。そしてこれは主として硯友社同人、乃至は紅葉門下で獨占されてゐたといつてよい。

硯友社同人の中で最も深刻な作家は廣津柳浪である。好んで不具や、癈疾、ひねくれものを題材に取り、人生の暗黑面を深刻に描寫するので悲慘小說の名稱を得た。『今戶心中』『河內屋』『變目傳』『龜さん』などの數篇は、明治文壇の不朽の名作として永く殘るであらう。

文章家としては川上眉山を推さなければならない。他の硯友社員がどこか江戶の戲作者

臭くて、のんきに、遊び半分に人生を眺めてゐる時、彼のみは眞面目に人生苦、藝術苦に惱んでゐた。そして明治四十一年の初夏に自刄して果てた。紀行文『ふところ日記』は實に明治年間第一の名文である。

紅葉門下では泉鏡花の奇才が先づ世に認められた。始め『外科室』『夜行巡査』などにおいて理想小說の銘を打たれたが、中途から段々に神祕味、妖怪味を加へ來り、文も獨特の精彩ある一新體を創造した。出世作として『湯島詣』などが擧げられるが、私はこれを取らない。最も多く『高野聖』の變幻怪奇を愛する。彼が作、妖怪譚ならずんば花柳小說である。しかも俠骨稜々たる獨特の女主人公を點出して來るので、藝者などに愛讀者が多く彼女達の間にたとへば講中などのやうにして、鏡花會なるものさへ出來てゐた。

七　女學生小說の二傑作

女性史の上から見るならば、女學生の出現は少くとも明治時代に特筆すべき事柄の一つ

である。

明治の初年においては書生の横行が、天下注目の焦點となつた。『書生々々と輕蔑するな大臣參議はみな書生』といふ俗謠はかゝる時代に生れ、且つ逍遙の出世作『書生氣質』は新文學の先頭を切つた。

明治中期には女學生が出現して、その紅や紫の袴を蹴つて、快活に振舞ふさまは今までの人形のやうな娘のみを見てゐた當時の人に驚異の眼を見はらせた。新聞紙上には女學生の風教問題を論ずる文が連日のやうに見えた。讀者試みに明治三十四五年ごろから日露戰爭ごろまでの古い婦人雜誌を見るなら、そのころの女學生の珍がられた樣子の一半を諒解することが出來やう。文藝方面には女學生氣質を描いた小說が出でざるを得ない。

これを始めにしては小杉天外の『魔風戀風』があり、これを後にしては小栗風葉の『靑春』がある。この二作は女學生を主題としたものゝ雙璧であり、かつ紅葉、露伴以後の明治文壇の二大傑作といふことが出來る。

天外は齋藤緑雨に師事して始めは諷刺的な小説を書いたが、中途からフランスのゾラ流の寫實主義に着目し、これを文壇に唱導した。『初姿』『はやり唄』などの作は今日でもなほ讀める。

早稲田よいとこ目白を受けて魔風戀風そよ〳〵と

といふ俗謡なども流行し、魔風戀風といふのは當時の青年男女の一象徴語とも見られてゐたので、天外はこれを捕へたのであらう。併し寫實といふべく餘りに空想的に過ぎ、間間不要のエロチシズムを出すので楞牛などから峻烈な非難を受けた。

『青春』は、或る意味から圓熟の極に達した作で、ツルゲエネフの名作『ルーヂン』を摸した跡がある。新らしいといへばいへやう。しかし作者の思想なり生活なりが近代的になつてゐないのに、作でのみ近代的にならうとした無理がある。この故に口の悪い、皮肉屋の生方敏郎が擬新小説と命名した。

風葉は紅葉門下として鏡花について現はれ、紅葉の衣鉢の正統を繼いだものといふこと

が出來る。『戀慕流し』は確か法界節の夫婦を描いたもので出世作となつた。後期の、自然主義時代になつてからも『世間師』『深川女房』『耽溺』などの名篇を殘してゐる。

兎もあれ『魔風戀風』と『靑春』とは、道學者や女子教育家からは、墮落女學生を描いた二標本で、これを繙讀することは、その者も墮落へ誘引される怖れがあるやうにいはれてゐた。

明治四十二年の春、私の十六歳の時である。大阪の中之島圖書館で、この二册を借出さうとしたら、『若い學生があんな不健全な小說を讀んでは害がある』とて、館員から、小言を頂戴した事を覺えてゐる。

八　社會主義小說

日露戰爭がわが國全般の發展の上に一大時期を畫した事はいふまでもない。

文壇乃至思想界に二つの大きな機運が動き始めた。社會主義と自然主義がこれである。

社會主義の中心は『平民社』で幸德秋水、堺利彥の二人が柱石であつた。他に片山潛、安部磯雄などの先覺があつて、外においてこの運動を援けた。

この運動と並行して、名付くれば社會主義小說ともいふべき文學が新たに生れた。德富蘆花の『黑潮』がこの先頭を切るが、しかし代表的作家は木下尙江でなければならない。『良人の自白』『火の柱』『靈乎肉乎』『乞食』『墓場』『勞働』『火宅』などの諸作品は、當時の靑年を魅してゐかなかつたもので、讀んだ經驗のある者には、實際紅葉の『金色夜叉』以上の人氣があつた。これらの小說によつて、社會主義に眼を開かれた靑年は、どの位あつたか分らない。その位に宣傳效果が甚大であつた。

別に白柳秀湖の『黃昏』と『驛夫日記』がある。これはツルゲエネフの影響を見せてゐるが、純朴愛すべく、一讀の價値は優にある。

彼等社會主義者の一團は、講談が貴賤上下の別なく普く諸階級に浸潤してゐるのに着目しそれに新意義を賦與して甦生さすべく平講談なるものを作つた。それが大正に入つてか

ら社會講談と名が更まり、今日の大衆文學全盛の先がけをなすのである。『大菩薩峠』の中里介山も、もとは平民新聞寄稿家の一人であつた。自分のことをいつて氣がさすが、私が東京朝日新聞に連載した『島原美少年錄』なども單なる幕末の劍戟物と思つて貰つては困る。あれは不出來でも或る一つの新らしい社會的觀點の上に立つて、大衆に何事かを暗示しやうとしてゐるので、その意味から平民社の社會講談の系統につながるものだと自分では思つてゐる。

併し平民社は一再ならず解散され、その發行する新聞雜誌は度々發賣禁止の厄に遭ひ、後に大逆事件と共に徹底的に叩き潰されてしまつた。これで社會主義の方は明治年間には夭折して伸びなかつたといつていい。

九　自然主義の諸星

自然主義も世の迫害と壓迫の中に芽ぶき、自然主義即獸慾主義、肉慾主義、放縱、無檢

束とまで誤解されるに至つた。だが、社會主義ほどには世を怖れしめず、どうにか十分の成長を遂げた。理論の方面では島村抱月、長谷川天溪の功多く、作家の主なるものとして左の諸氏を數へる事が出來る。

田山花袋、國木田獨歩、島崎藤村、德田秋聲、正宗白鳥、眞山青果。

花袋は始め美文學、紀行文家として現はれ、初期には涙つぽい少女の戀愛小說のみを書いてゐたが、日露戰爭に從軍した前後から急に態度を一變して、自然主義作家の驍將となつた。『生』『妻』『緣』の三部作最も名高く、『田舍敎師』も一讀するに足りる。

獨歩は始めにもいつた通り民友社に育つた人で、早くから『武藏野』の如き名篇を出してゐながら一向世に認められなかつた。自分では自然主義作家なるか否かも意識せず、ウオーヅオース、ツルゲエネフなどの影響を見せた作品を書いてゐるうち、漸次に認められて來て、明治四十一年の夏、肺を以て茅ケ崎南湖院に逝いた時には、文名天下に喧傳し、世を擧げて痛惜せざるはなかつた。日本の生んだ最も傑れた短篇作家といふ事が出來や

う。

藤村は『文學界』の同人。始めは新體詩人として現はれた。明治の新詩に基調を据ゑた功績者としてロシアのプーシキンに比する人もある。『藤村詩集』一卷を、その青年時代に愛讀しなかつたなどといふ人は、恐らく文學愛好家の中には一人もあるまい。後に詩筆を折つて小說家として現はれ、ロシヤのドストエフスキイの影響を見せた長篇『破戒』に先づ世を驚かし『春』は花袋の『生』と並んで自然主義全盛期の雙玉として記念される。外に『家』『新生』短篇集『微風』『藤村集』など、みな傑れた作である。

秋聲は紅葉門下の出であるが、そのころは最も榮えない作家の一人であつた。然るに一度自然主義が起るに及んで、その質實にしてケレンなき作風は忽ちにして認められ、一躍第一流の作家に伍した。『足跡』『黴』『奔流』など有名である。しかし秋聲の最も評壇を騷がしたのはむしろ大正に入つてからであらう。

白鳥、青果は自然主義時代の新進作家の兩頭目であつた。白鳥はそのころから早く

リスチックな人生觀に特色を見せ、青果は到烈な筆致に一新境地を開拓した。後にこの兩作家とも劇壇に打つて出たのは奇といへば奇である。

十　漱石・荷風・その他

自然主義が一世を風靡し、これに屬せざるものは文學でないやうにいはれた時、ひとり世の風潮に抗して獨自の藝術を建設したものは夏目漱石である。『吾輩は猫である』『坊つちやん』などは明治に他に類例なきユーモラスな諷刺文學である。『虞美人草』『草枕』の絢爛、『三四郎』『門』の枯淡、『行人』『心』の思索味、みな捨て難い。彼は低徊趣味といふ事を唱へ、自然主義が『せつぱ詰まつた人生』の描破を一枚看板としたのに對し、それだけが藝術ではない、藝術にはもつと外の領域もあると論じて、意識的にさうした作品を作つた跡がある。

彼は古き帝國大學英文科專攻の學士、『文學評論』や『文學論』は日本人獨特の眼光をも

つて海外文學を評騰したもので、彼の學識の如何に豐富であつたかを窺ふに足りる。後に文學博士に推薦されたが、學位を返上して話柄を蒔いた事もあつた。大學の講壇を辭し、朝日新聞に入つて、大抵年一回か二回、長大作を寄せて、讀者を魅了してゐたのに、大正六年の正月、宿痾の胃を病んで長逝したのは惜い事であつた。

明治の末期にはさしも全盛を極めた自然主義も、その單調さと、餘りの光彩の乏しさに漸く世から飽きられて、別様なものを求める要望が起つた。享樂主義、耽美主義、惡魔主義、神秘主義の作品はかうして世に現はれて來た。總稱してネオ・ロマンチシズムともいふ。『明星』などの前期ロマンチシズムと異なる點は、自然主義を潜つて現實の洗禮を受けてゐる點である。

この傾向で最も現はれたのは永井荷風である。彼は天外など丶前後して始めゾラ流の寫實主義にかぶれ『地獄の花』『夢の女』などを公けにしたが、その後久しく海外に遊んでかの邦の近代文學を心ゆくまで味はひ、その餘香を華麗流暢、極めて音樂的な響きある名

文に移し植ゑて、一個渾然たる藝術を完成した。『あめりか物語』『ふらんす物語』などがこれ。後にまた花柳小説にも一新境地を開いた。『新橋夜話』『腕くらべ』などを代表作とする。

外には、初め「半獸主義」を唱へ、後に新自然主義を唱道した岩野泡鳴も少くとも一つの時代を作つた。次いでは小川未明と鈴木三重吉がネオ・ロマンチシズムの作家として並稱され、近松秋江も漸次に頭角を現はして來た。けれども最も目ざましかつたのはマソヒズム的作品を以て世を驚かした谷崎潤一郎の出現でなければならない。また老大家森鷗外が『あそび』を標榜して返り咲きしたのもこのころであつた。

かくして明治時代は終つた。

五　大正文學の概觀

――明治文學の遺產――

一　明治大正兩文化の比較

明治四十五年七月末、明治天皇の崩御があつて、大正と變つた。

今の日本の各方面を支配してゐる四十歳以上の年配の人は明治時代に成功の端緒を得てその自慢話をするものだから、一にも明治、二にも明治で、明治はさながら、黄金時代の如く大正はまるで光彩のないものゝやうにいつてしまふが、私達のやうに明治の丁度眞只中に生れ、全明治を十代の年齢で經過して、世間に眼のあきかける青年時代を大正に送つたものには、大正もまた面白い時代であつた。

私はかつて明治と大正の文化を比較してかう述べたことがあつた。

『明治の文化は、消化の文化であつて創造の文化ではない。胃袋の文化であつて頭腦の文化ではない。明治文化の異常なる發展は、主として鎖國日本と歐米先進諸國との間に、異常なる文化的壓力の差異があつたことに歸因すべきであつた。從つて極言すれば、明治

文化は異常なる低氣壓の流れが齎した文化的颱風に過ぎない。

『明治は確かに驚嘆すべき天才兒であつた。しかしながら天才には二つの種類がある。それは先天的天才と、環境が人工的に造り上げた早熟な畸形兒とである。天才兒明治は遺憾ながら後者に近かつたことは事實である。

『これに反して大正文化の重大なる特徴は善い意味にも惡い意味にも、著るしく大人化したことである。日本の文化的年齡が二十代から三十代に移つたことである。青年時代の夢と焦燥から完全に脫却し、ありのまゝの現實の姿を認識してそこに自分の眞の實力と立場と進むべき方向とを、日本の民族はこの十五年間に悟つたのである。この悟りは、少年期から青年期に達するまでの花々しい外形的成長とは全く本質的に異なつた、深刻な內面的進化である。

『大正年間にはもはや、歐米人と結婚して日本の人種を改良せよと說くやうな極端な歐化主義や、反動的狂熱的國粹主義が影を沒し、日本の傳統に對しても、外來文化に對して

も、落着いて正當な價値判斷を下すことが出來るやうになつた。今や日本の民族には、人類文化の最高位に立つて、各種の傳統を客觀的に評價するだけの餘裕が出來たのである。』

文學においても大體同じ事がいへる。

二　婦人問題

『女ならでは夜のあけぬ國』といふ言葉をまさかこゝに適用するわけにも行くまいがとも角も大正の世は婦人問題を以て開けたのである。

英國のブリユウ・ストツキングから思ひついた『青鞜』なる雜誌が創刊されたのは明治最終年であつた。

『元始、女性は太陽であつた！』

これが第一號にその結社の盟主である平塚明子の掲げた標語であつた。そして婦人解放

といふ事が騒然として評壇の中心問題たるに至つた。蓋し、かゝる婦人の新らしき呼聲も當然起らざるべからずして起つたもので、明治時代は先づ廢刀令や斷髪令などにおいて外形的封建制度を打破し、次いでは自然主義によつて心の底の隱微な奥に潜んでゐるチョン髷まで切り捨てたから、最後に殘されてゐるのは、實に女性を『人形の家』から解放する事だけであつた。

但し『青鞜』の風を望んで集つたものがみんな女子大學や女子英學塾のお孃さんで、今までを箱入りに育つて來た人であつただけに、白樺の人道主義が小間使ひ小説に終つたと同じく、靑鞜の黄色い聲を振り絞つての勢一ぱいの呼號も、經濟問題とは接觸する點なく、單なる觀念運動たるにとゞまつた。彼女達はバアで五色の酒を呻つたり、大擧して吉原へ押しかけたりした。それは甚だ奇嬌な行動として、世間の彌次馬は見世物に送るが如き喝采を浴びせた。だが今日から冷靜に批判するなら、それは不思議でも何でもない。『解放、解放！』と掛聲だけは大きくしたが、問題が經濟的に、社會制度の基根に觸れて

來ない限り、その若氣の餘りの解放心は、そんな事でもして放散させるよりほか仕方が無かつたであらう。腹立ちのやり場がなくて茶碗をこはしたりするのと同じ心理である。

靑鞜の運動を左翼とすれば、これに對抗して右翼ともいふべき新眞婦人會なる團隊も現はれた。前者が平塚明子、伊藤野枝、神近市子、尾竹紅吉、荒木滋子、荒木郁子など獨身の學校出たての婦人の集合であつたに反し、後者は凡て世帶持ちの寄り合ひであつた。主なる者は宮崎光子（豫言者宮崎虎之助夫人）木村駒子（千里眼の駒子夫人）西川文子（もとの社會主義者西川光二郎夫人）伊藤朝子（無我愛の伊藤證信夫人）などである。『眞に自覺した女性は、女性の本能を覺知して、男子から征服されることを望んでをります、自分を征服し得る男でなければ、夫とすることは出來ないのであります』といふのが彼女達の主張であつた。

この間に、田村俊子、尾寺菊子、水野仙子、長谷川時雨などの女流作家が若干の活動をしたことも見逃せない。

私一個の思出をいふと、早稻田の文科の豫科生であつたが、ある雜誌の文壇公開狀の募集に應じ、靑鞜を痛罵した一文を投じて幸ひにも當選し、懸賞金を貰つて滯納してゐた月謝をやつと收めたことがある。翌月の靑鞜には私の攻撃について何だか書いてあつた。その後一度、早稻田の文科の一部の有志が木村駒子を聘して來て講演して貰つた事がある。論旨はつまらないものであつたが、たゞ腕まくりをして『諸君！』と切り出した元氣には恐れ入つた。

三　人道主義と白樺派

吾等は大正が明治から繼承した遺產をこゝで再吟味すると、頽勢に向ひつゝあつたとはいへ花袋、藤村、白鳥、秋聲など自然主義正系の作家がまだ中樞に坐し、その周圍にたとへば枯れかゝつた根元に若々しい新芽の吹く如く小川未明、鈴木三重吉、森田草平等のネオ・ロマンチシズム、長田幹彥、近松秋江等の耽美享樂主義、谷崎潤一郎の惡魔主義、森

鷗外の「あそび」の文學などが萠え出してゐた。

たゞこの明治末期から大正へ掛けての數年間は、日本人の生活において一般に古い指導精神が倒れ、しかも新らしいそれは十分に大衆を率ゐるに足るだけに樹立してゐない。が何にしても自然主義の標語なる「灰色の現實」にだけには堪へ切れないので、何か新らしい足場を、頻りに模索して行つたのが、前記のやうな種々なものとなつて萠え始めたので、島村抱月は適切にもこれを『現實主義の分化』と呼んだ。

所が多くの芽の中で、一番後から發生しながら、最も健全に發育して、生長の速度に他を凌いだものがあつた。『白樺派』の、いふところの人道主義である。

『白樺』は確か明治四十三年夏ごろから發行せられた。同人は學習院の學生が主だつたので始めは華族のお坊ツちやまの道樂位にしか考へられてゐなかつたが、段々に世の視聽を集めて、大正の年號を冠して發行せられた最初の中央公論（當時の作家の唯一の檜舞臺）は志賀直哉の力作『大津順吉』を發表した。ついでその秋には武者小路實篤の著『世

間知らず』が出た。

元來人道主義の基調は愛の概念に出發する。この故に白樺の一派は、右には基督敎の經典なる聖書に根據を見出し、左にはトルストイの思想に源泉を汲んだ。槪念は空漠としてゐても作家の視野が廣汎であればトルストイやドストイエフスキのやうな作にならないにも限らぬけれど、白樺一派は何しろ溫室育ちである。彼等の愛、同情、憫憐の及ぶ範圍は美しい小間使ひと、華族向きに馴らされた別莊番の爺や以外に、殆んど及んでをらぬ。美しい小間使ひが朝早くから掃除してゐるのに同情する。これが彼等の人道主義である。その小間使ひと關係を結んで兩親の前に結婚を申出で、それを許されないと人道主義を楯に抗拒する。これが彼等の正義である。要するに白樺の人道主義は小間使尊重の外に出づること餘り遠くない。

然るにそれが意外な反響を呼んだ。此の方には幾分の社會的理由がある。

內田魯庵の傑れた隨筆『バクダン』の中にロシヤ革命運動の先驅者を調べて、その多く

が貴族の出身なるを說いたのがある。なぜ貴族がさうなるか？ それは資本主義が勝利を占め、ブルジョアが社會支配の地位に立つて來ると、今まで橫暴を逞しうした貴族の權力が非常に縮小されて來るので、貴族は最早や單獨ではブルジョアに抵抗し難い。そこで無產階級を味方に入れやうとするのである。白樺派の人道主義はいはゞ貴族がブルジョアに對するこの最後の抵抗の一つの現はれだつた。

これはある期間においては確かに民衆のよき指導に貢献するところがある。しかし民衆が指導を不要として一本立ちになつて來てまで、彼等は果して民衆の味方であり得るかどうか？ 有島武郎の如きは飽くまでも民衆の味方たらうとし、そのために北海道の廣大な土地も放棄して、身を以て體踐し血涙を以て此の解答を書かうとしたが、遂に民衆に同じ切れないのを知り、その矛盾のために自ら斃れた。たま〳〵一婦人が道づれとなつた如きは、死の機會を助長したに過ぎないので、愛慾の問題の如きは彼の死因の一部分に過ぎない。彼を尊敬した私はこの考へを捨てることが出來ない。兎もあれ『お末の死』『カイン

の末裔』『死とその前後』その他はよい作であり土地を放棄した時の小作人に與へた文の如きは、大正年間隨一の嚴肅な意義を帶びたものである。

さうかと思ふとこの反對に折角人道主義まで進出しながら、元の杢阿彌に歸つて、先年の曠野社の爭議の際には怪しげな辯解を創作の名において發表し、頗る我の强い個人主義の正體を完全に暴露した武者小路實篤のやうなドン・キホーテもある。

四　新技巧派の新思潮同人

自然主義は生活態度でも創作上でも『無理想、無解決』といふことを唱へた。又創作手法の上では『無技巧』を標榜した。『自然——ありのまゝ』を重んずる上から、これ等は當然の事である。

しかし後から續いて來たものは、そんな中途半端な態度では滿足出來ない。白樺派の人道主義は自然主義の無理想、無解決に對抗した有理想、有解決であるが、こゝにまた『自

然主義の無技巧に對する技巧尊重の一派が出現した。批評家はこれに『新技巧派』なる名稱を與へてゐる。技巧を重んずることは必然に理智的であることを要求する。この故に『新理知派』といふ。理知的である事はいはゞ、また、題材（テーマ）をはつきりする事でもある。この故にその一派の或る作家の作はテーマ小說ともいはれる。そして總じてこれ等の作家が第四次新思潮同人なるが故に、新思潮派とも呼ばれる。

この派の三重鎭を拾へば菊池寛、芥川龍之介、久米正雄である。

中で最初に文壇に擡頭したのは久米正雄であつた。彼は帝大英文科の出身、夏目漱石の門下である。題材の勁拔と筆觸の淸新とを以て、年少よく新進作家中に重きをなした。ついで現はれたのは芥川龍之介で、久米の同窓であり、同じく漱石の門下である。「新技巧派」の名稱は、特に彼の作のレッテルとして最も適はしかつた。昭和二年の夏彼が世の痛惜の中に自殺を遂げたのは讀者の記憶に新であらう。最も後れて出た菊池寛は、しかし、文壇に勢力を扶植することは最も廣く、最も强かつた。そしてそれ以後は確かに菊池寛の

文壇であつた。テーマ小說とは彼の作に與へられた名稱である。

この三人以外、新思潮出身の作家で注目すべきは豐島與志雄である、淸澄な、一味の神秘をひそめたユニックな境地をもつてゐる。

これと時を同じうして、早稻田の文科もまた幾多の作家を送り出したが、中で頭角をぬいたのは吉田絃二郎、谷崎精二、廣津和郎の三人である。

吉田絃二郎は宗敎的な、センチメンタルな作風で、特に若い女性に讀者が多い。谷崎精二は潤一郎の弟、兄とは全然作風を異にし、小說の定石ともいふべき堅緻なものを作り上げる。廣津和郎は柳浪の息、始め評論家として傑出し、後に明澄な作品に特に筆力の冴えを見せた。

但し以上の諸作家については說明するまでもなく、諸君も夙に承知であらう。

五　デモクラシイと民衆藝術

明治三十七年、社會主義者であつた木下尚江が、帝大政治科の首席卒業者と、早大政治科の首席卒業者とを會して一夕歡談する所があつた。それは何のためであつたかは分らない。招かれたのは、後、東大に政治史を講じてゐた吉野作造と、早稲田の教壇を去つて勞農黨の首領として活躍した大山郁夫とである。

その後二人は殆ど時を同じうして歐米へ留學し、歸來、母校に教鞭をとつてゐた。その少し前歐洲大戰が勃發し、わが國もその影響で民衆の力が徐々たりながら認められ掛つて來た。時勢の洞觀に敏な天才的ヂヤアナリスト瀧田樗陰は早くもこれに氣づき、自分が編輯してゐる「中央公論」にこれ等新進氣鋭の學徒を拉し來つて、思ふ存分筆を揮はしめた。

時しも歐洲の戰亂はいよ〳〵展開し、わが國も同盟國の仲間入りをして、諸列强の好感を博し得た。とはいふものゝ、靑島を攻略したのと地中海へ水雷を派遣したのとシベリア出兵をしたのと、兵を動かしたのは只それだけで大體にこれを對岸の火災視する事が出來

た。その結果海外の富は流れるが如くに集まつた、まるでお札で頬ぺたを叩かれるやうなうまい話に資本家は豚の如くに肥へた、資本家の肥る時は半面で勞働者の價値の認められる時である。隨つて彼等の間にもぼつ〳〵自覺が萠し始めた。

丁度そこへ吉野、大山といふ論壇の兩雄が、歩兵の突撃を掩護射撃する巨砲の如く、デモクラシイの論を主張したので、一世はために風靡せられた概があつた。これが間接に文壇に反映したものが民衆藝術論である。

尤も當時の民衆藝術の中には、今日からわざ〳〵振返つて見なければならぬほど價値あるものはない。たゞこの時を以て社會思想と文學とが相結んだ――も一歩進めていへば文學が社會思想に率ゐられるやうな位置に立つ端緒が開かれた。

六　文壇成金の出現

デモクラシイは勿論當然の過程として社會主義にまで進み、それが文壇への反映として

はプロレタリヤ文學論が起つて來たがその間に奇異な現象が生じて、全文壇を席捲した。

實業家は黄金に腐爛してゐる絶頂のころである。二十歳になるかならずの一青年が一堆の原稿を携へて批評家生田長江の門を叩いた、用事はその原稿の閲讀を乞ふことであつたが、長江も忙しいので長い間埃に埋もれたまゝにしておいた。

しかしその青年は幾回となく執念く尋ねてくるので、遂に長江も根氣負けがして、厭々ながら二三枚讀みかけた。地方の文學青年の送附して來る苦心の力作も、大抵はつまらないものであるのを何度も經驗した長江は、勿論、この作に始め何の期待する所もなかつた。が、二三枚讀んでゐる中に、彼の顏には『おや』といつたやうな案外な色が浮かんだ。——そして二三章も讀み進んだ時には彼はすつかりその原稿の虜となつてゐた。

全部を閲讀し終つた彼は、十分にその價値を認めて書肆への熱切な紹介狀を書いた。島田清次郎の『地上』はかくして世に現はれたのである。

先づ社會運動の長老堺利彦の批評が公けにされた。下層階級を題材にした點を賞めてあ

つた。次いで學界の耆宿福田德三の批評も現はれ、更に德富蘇峰が著者に送つたといふ書翰『この地上の主人公の如き靑年十人あらば、日本の前途憂ふるに足らず』云々の文が公けにされた。

今でこそ諸名士がポスタア代りになるのは一向珍らしくなくなつたが、その時は他に類例がないから讀書界は好奇心に驅られて『地上』を讀んでみると中々面白い。無氣力な衰頽的な文藝にあき〳〵してゐる矢先のこととて、この中に含まれてゐる素晴らしく旺盛な氣魄に壓倒せられ、魅惑せられた。かくして瞬く間に『少年天才島田淸次郎』の名は津々浦々にまで喧傳され、彼はまさに『一朝目さむれば天下の人』なる極東のバイロンであり得た。

嚴密にいふなら從來の日本文壇にも理想主義的文藝が無かつたわけではない。が、その理想が悉く弱者的理想であつた。之に反し『地上』は少くとも日本文壇の産んだ最初の若々しい、野心と抱負に滿ちた力强い英雄主義的作品であつた。

だが讀書界がかゝる英雄的理想主義を受け容れるやうな氣分になつてゐたのは、世界大戰に着彈距離以外で參與しておきながら、それで人並に戰勝氣分に浸つて、戰爭の利益で懷中の溫かい僅かな期間のことであつた。

彼れ島田淸次郞は『我れ世に勝てり』と豪語しながら、意氣揚々と外遊の途に上つたがその留守の間に世は全く變つてゐた。戰後の不景氣の襲來に伴ふ勞働爭議の頻發殊に隣國ロシヤにおけるボルシエヴヰキ革命の成功は、日本の前途に多大な暗影を投じはじめた。かうなると社會は別な英雄を要求する。

島田が今度は『我れ世に敗れたり』と泣言をいつて瘋狂院の一室から、自分にすつかり脊を向けた社會を恨めしさうに眺めてゐる時は、卽ち賀川豐彥の『死線を超えて』が『暴風』の如き實行を示しつゝある時だつた。

今日から『死線を超えて』を讀む人があるなら、あれがどうしてそんなにまで歡迎されたか多少不思議とするであらう。實際それは內容からいつても、表現からいつてもあゝま

で大騷ぎをして迎へられる資格には乏しいもののやうな氣がするが、當時の社會狀態と著者自身の生きた廣告とが兩々相俟つて、あの作を宣傳した。當時關西では未曾有の大勞働爭議が頻發し、時ありては馬上にこれを指揮した賀川豐彥は、劇的、歷史的人物として、その一擧一動の末まで巨細に日々の新聞紙上に報道された。そして始めて勞働爭議なるものと、その重大なる社會的意義とを知つた一般民衆は、更にこの小說を通じてよりよくこの未知の世界を窺はうとしたのである。

勿論、彼の作に盛られた適度な宗教的甘さも、この書に羽翼を生ぜしめた一大原因であつたに違ひない。

その證據には、これらの書と相前後して讀書界に狂的歡迎を受けた書はみんな宗教がゝつてゐる。卽ち倉田百三の『出家とその弟子』、江原小彌太の『新約』、西田天香の『懺悔の生活』、大泉黑石の『老子』、石丸梧平の『親鸞』等。

七　プロレタリヤ文學その他

大正十一年平林初之輔が雜誌『解放』で、確固たる社會思想の基礎に立つプロレタリア文學を主唱するや、有島武郎も時を同じうして之に應じ、雜誌『種蒔く人』がこの機關となつて、小牧近江、前田河廣一郎、今野賢三、藤森成吉、青野季吉などがひとしくこれに據つた。

右の中藤森成吉は新思潮派と殆んど時を同じうして世に認められてゐた。出世作は學生時代に出した『波』（後に『若き日の惱み』と改題）でこれには少年の日の夢想と憧憬とを盛つてゐるが、後次第に厭人的色彩を深めたり、人道主義的な含蓄もあつた。社會主義同盟の結成と共に此れに加はり、大正十三年には自ら勞働生活に入つて、思想界に一つの異常な衝擊を與へた。これについては毀譽さま〴〵で大いに世論を沸騰せしめたが、併し彼の性格を知るものは、それが眞摯な慾求に出でたものである事を疑ふ者は一人もなかつ

た。

その前年、即ち大正十二年關東の大震災が起り、無産階級文學は他のその派の運動と共に一切斷滅を餘儀なくされたものの、先づ無産派の大同團結なるフエビアン協會が頭を擡げ、ついで『文藝戰線』が立つた。

地震の後には新感覺派、コントなど、さまざまなバラック式文學が簇生して大正時代は終つた。

六　唯物史観明治文學ノート

一　安定なき理由

明治以降の文學――ばかりでないが、特に文學上でも――に於て、常識的にも最も明白に萬人の承認を受けてゐる特徴の一つは、それが外國の粉本の跡を追うてどんなにあはただしく推移し去つたかと云ふことである。

初期の思想を形成したミル、スペンサア、ルツソオ。中期以降の小說に影響したゾラ、モウパツサン、フラウベル、イブセン、トルストイ、ドストイエフスキ、後期の思想を刺戟したジエームス、オイツケン、ベルグソン、詩人ではタゴール。「晨にオイツケン、タにベルグソン」と、當時の人達は自分でも自分の氣の早さを嘲つてゐた位だ。

そして此の氣の早さは、從來の史家や道德家によつて、日本人の國民性の缺陷として指摘されて來たものである。

だがアルミニユームの湯たんぽのやうに、すぐ熱し、すぐ冷めるのが日本人のみの特性

であらうか。それは日本としては或る時期、たとへば明治以降だけに於ける特性で、それに類似の條件の下にあれば、外國人だつて同じやうな特性を現はすのではないか。

明治とは違つた制度の下に於ては、日本人も隨分氣が長かつたので、德川三百年の封建制度を、いろいろと內的にも外的にも彌縫しながら保持して來た辛棒强さは、史を讀む度に私達のあきれ返る所である。その辛棒强い日本の國民性が、百年もたゝぬ中に『晨にオイッケン、夕にベルグソン』と急變する筈はない。もしそんなに急變するものだつたら、それは『國民性』の名に値しないのだ。

又別な例を取れば、フランス革命のゴタゴタしてゐる時には、フランス人が輕佻だと云はれてゐる。又堅實と沈着の最高標本のやうに云はれてゐるイギリスだつて、頻りにオランダを模倣してゐる頃から、クロンウエルの革命當時は、最も落つきのない輕佻な國民だと列國から指彈されてゐたのだとの記述を、或る史書で讀んで、私は多少意外であると共に、又大いにうなづいた事もある。

だから私に云はせれば、『晨にオイツケン、夕にベルグソン』は、決して日本人の特殊國民性ではない。

では明治時代に於けるこの現象の說明は何に求めたらいゝかと云ふに、端的に云へば、第一に日本の資源の貧弱さに歸してよいであらう。或は、日本の資源は幕府時代も現在も大して變りはない、だからそれでは、幕府時代にあれ程氣の長かつた日本人が、明治になつて急に氣早くなつた說明は、資源に依つては出來ないではないかとの反問もあらうが、開國以前の自給自足時代には、豐富にも貧弱にも、他に比較の標準がない。開國して外國交易が初まつて、やつと資源の貧弱さが他との比較で分つたのである。

そして、それからの日本の全行程は、この貧弱さの自覺から發したあせりであり、もがきであり、焦躁であり、努力であつた。

恒產なければ恒心なし——孔子樣の口から出たか、それとも孟子樣か、誰の口から出たか知らないが、さすがに古來からの金言と云はれてゐるものは、用ゐやうによつては、大

學の國文科の先生の講義よりも生きた說明の補助をして吳れる。明治文學の映畫も只ならざる急テンポの轉變は、要するに恒產なく、從つて恒心なき氣持の表現であつたのだ。

『日本は人口過剩で、資源が貧弱で、おまけに地理的に膨脹しやうとしても對立國によつて反對される。だから最近六十年の驚異すべき進步に於ても、未だ文藝上の整理と、安定性とは得てゐない。』（ソーンダイク「文藝概說」四三頁）

二 『明治の聖書』の意味の檢討

明治文化は又、一口に飜譯文化と云はれる。云ひ直せば、即ち舊來の封建文化から資本主義文化への轉換だつたのだ。

そして眞に飜譯の名に値する正確な、精密な文藝書は中村敬宇の『西國立志篇』（明治四年刊）を以て先頭とする。

これがどんなに全明治時代を通じて迎へられたかは、『明治の聖書』とさへ稱されたに

依つても明かである。併し此の『聖書』の意味を萬一にも宗敎的に解したりしたら、それは非常な誤謬に陷る。

所が茲に困つた事には、從來の史家によつて、明治初期の文化開拓は、物質的方面は福澤諭吉これを擔當し、精神的方面は中村敬宇これを擔當せりと云はれて來たのが、そのまゝに今日まで踏襲せられて、その適否、又はその內容が些も解剖も、再吟味もされてゐないことだ。そして敬宇先生が、洋行されて、西洋文化の底に基督敎あるを發見されたこと（今日だつたらその基督敎の底に又何があるかを先生も發見されたかも知れないが）を歸來、西人某に代つて基督敎承認論を草されたことなどゝ相結び、この『聖書』の意味が全然宗敎的に解せられてゐるらしいのである。

これは大變な間違ひだ。

一體この『西國立志篇』は、英國ではどんな意味をもつた書であつたらう。それはトロロープの小說、タツパアの詩と並んで『ヴイクトリアニズムの三代表』と云はれるものゝ

中でも特に、此の書がその生粋だ。

ではヴイクトリアニズムとは何かと云へば、産業主義と解してよい。十九世紀の世界を指導したものが二つある。曰くフランスの自由思想。曰く、英國のテクニツク（産業上の）。これはノールス夫人の言である。

又、ヴイクトリヤ王朝の貨幣に刻まるべきものは、女王の姿ではなくて、機關車の煙突だ。と、これはシツトキルの言である。

まだ引用すればこんな言葉は無數にあるが、紙數もないし、衒學的になつてもいけないから、止すが、要するにそれでヴイクトリアニズムの內容は暗示できたらうと思ふのである。

『西國立志篇』はこの風潮の代表的文書なのだ。明治文化全集の解題者は、この原書を本國ではさまで重要さを持たなかつたものゝやうに云ふがこれも大間違ひ。出版されると『暴風の如き賣行』を見せ、誰だつたか名を忘れたが、兎に角日本で云へば永井柳太郎と

か鳩山一郎とか云ふやうな地位を占める當時の政界の名士が、もし少年時に一讀してゐたら、自分の全生涯は一變してゐたらうと折紙をつけた。出版されたその年に十七ヶ國語に飜譯されたとも傳へられる。

だからこの飜譯を『明治の聖書』と云ふのは、産業立國、富國强兵なる明治初年のわが國のスローガンの演繹だと云ふ意味に於てだ。

讀者は勿論、汽車の機關の起原を尋ねて、鐵瓶の蓋を動かしてゐた湯氣にまで溯るのを別に不思議としないであらう。然らば今日の野間淸治の『榮えゆく道』、鬱然たる講談社の日本ジヤアナリズムに占める勢力、更に古くは增田義一の『實業之日本』――それらの源流が『明治の聖書』の鐵瓶にある事は勿論否まぬであらう。

天は自ら助くるものを助く――宜い哉言や。政府からは補助金を搾り取るが、使用する勞働者からは、賃金値上の要求などはされたくないと思つてゐる産業家に、かうもうまい事を云つてくれるのは、正しく資本主義時代の聖書たるに恥ぢぬ。

そしてかくの如き書を暴風の如く賣れ行かした一つの原因としては當時の英國教育を指摘せねばならぬ。

それは著しく普通教育が擴大されて、文字のよめる人の數は驚異的增大を示した。だが支配階級は文字は敎へても、眞の知識は授けなかつた。これは凡ゆる國を通じてのブルジョアの奥の手だ。實業教育などゝ云ふことも、勿論最も露骨なこの一例證である。

批評家はヴィクトリアニズムの下にあつた讀者大衆を『文字を知つてゐる無智者』と云つた。

本質的には無智者でも、文字を知つてる限り讀み物を欲する。これが『西國立志篇』を賣れ行かせた。これがノースクリツフをしてジヤアナリズムに制覇せしめた。

日本でも、それと同質なる明治政府の教育方針、それと同質なる文字を知つた無智大衆の生產が、敬宇先生の譯書を明治の聖書として神棚に祭り上げ、實業之日本、そしてキングと云ふ順序のジヤアナリズムの系列を作るに到つた。

そしてこの文字を知れる無智大衆がやゝもすれば智に眼ざめて、彼等が繫縛しておかうとする埒外に逸脱するのを恐れては、色んな企てがなされる。『御用明治文學史』などもこの必要から生産が急がれてゐる現状である。

三　科學小說と探偵小說

廣く、一般文藝書の飜譯の先頭を切るものが『西國立志篇』なるに反し、小說としての謂はゆる精密譯は、明治十一年に出でた川島忠之助翁の『八十日間世界一週』を以て最初とする。

原著者はジュール・ベルヌ、云ふまでもない科學小說の御開山である。

科學の正しき認識が資本主義の發達に何を意味し、又その枉曲が資本主義の沒落に何を意味するかは事々しく說明する必要があるまい。要するに科學は資本主義の脊髓骨である。資本主義が別名を科學文明と呼ばれて來た所以である。

そして明治飜譯小說の最初が、實に科學小說を以て初まるは、從來、等閑に見過ごされて來た事ながら非常に意味がある。而も明治二十五年頃までの飜譯を調べてみるのにベルヌのものが數に於て最も多く占めてゐるのも偶然でない。

それにしても明治最初の飜譯小說が科學小說のベルヌである事は、神樣が謀んでしたつて、かうお誂え向きには出來まいと思はれる位だから、從つて、私は久しくその原書が如何なる經路を辿つて譯者の手に入り、如何なる動機で飜譯に着手されるに到つたかを疑問としてゐたが、今年（一九三八年）の夏久しぶりで川島翁を訪ねて親しく聞くを得た。

それによると翁の從兄に當る人が一八八五年（明治八年）の巴里博覽會の時フランスに行つてゐて、そこで丁度『八十日間世界一週』が脚色上演せられてゐるのを見て興を催し、繪入の豪華版一本を求めて翁に送つたのだ。翁は餘りの面白さにそれを耽讀した。翌年翁も亦米國を通過してイタリに行く事になり、サンフランシスコの停車場のスタンドでその英譯を發見し、汽車中のつれづれに讀んでみると、その英譯には米國の部に原書にな

い事まで詳しく書き添へてある。

いよいよ面白いと思つて、翁は翌年歸朝すると飜譯に着手し、翌々、明治十一年出版の運びになつたのである。

つまり巴里の博覧會があの書の日本人に入る最初の機縁を作つたので、極端に云へば日本の新文學移入は、巴里の博覧會で口火がつけられたのだ。

この飜譯の面白さから、これはベルヌと云ふ作家に着目しなくてはいけないと、さとくも考へついた人に矢野龍溪があつた。新聞界の大御所の氣のつく所はさすがに非凡である。そして明治初期の飜譯に比較的ベルヌのものゝ數の多いのは確かに龍溪の推稱が預かつて重き因をなしてゐると傳聞したとは川島翁の直話である。

ベルヌを數種譯してゐる森田思軒も、元より龍溪のすゝめに依つたので、かくして思軒が科學小説を渉漁するうちに、同じ叢書に探偵小説の數々あることに氣づき、探偵小説の飜譯移植はこれを黑岩涙香の分擔に讓つた。かくして明治の探偵小説は開けるので、云は

ば此の源流も亦巴里の博覽會まで逆上ることになる。

なほ、これは私が外でも一度言及した事があるのだが、『八十日間世界一週』に關する栗本鋤雲の批評が面白い。

元來、あの作は一讀すれば分る通り、ある紳士が一夕、八十日間で世界一週して來やうと云つて友人と賭けをなし、いよいよ出發すると、いろいろな障碍が起り、幾多の危險に遭遇するが、結局數時間の差で勝つと云ふ話なのである。

鋤雲の曰く『支那や日本の小說だと、災厄四方に起り、進退きはまれば、之を救ふものは神佛の加護でなければ、狐狸妖怪の助力だが、この小說でみると、さうした窮境を救ふものは常に金である。そこが面白い。日本の小說でも今後はこのやうに金が口をきくやうにならう。』

文藝作品に對する斯くも正確な斷案は、或る意味で明治の批評史に、後にも先にも下されたためしが無いと私は思ふのである。

四 『小說神髓』出現の意義

明治の文學思潮に主たるキイ・ノートを求むれば、誰しもリアリズムの一語を以て答へるであらう。いろいろ小さな反動はあるが、リアリズムが常に樞軸をなし、その末期、自然主義によつてこの精神は最も旺盛に發揮せられた。リアリズムとは換言すれば科學精神の文學思潮だから、資本主義明治に、これがキイ・ノートをなしてゐるのは當然である。そしてリアリズム展開のために、最初の巨大なる礎石を置いたのが坪内逍遙博士の『小說神髓』で、それから沒理想論、天外一派の寫實主義などを經過し、遂に自然主義に歸結するのである。

だからこの『小說神髓』こそは、今よりももつともつと詳しく研究されねばならない書であると思ふ。私はかつて『小說神髓小論』なる一文を書いた事があるが（『明治文學展望』所收）あれは今から六七年前のもので勿論不完全であつた。ブルジョアの勃興勢力が文學

論に顯現したものだとしたあの見方は、當時新銳の藏原惟人氏から冷笑されたと覺えてゐるが大體の見方はあれで違つてゐないと私は今でも思つてゐるし、それから藏原氏の多くの論譯を繼承して輩出した新銳の批評家諸君も、細末は兎もあれ、大體論としてあゝした見方を承認されてゐるやうである。

だが、その點を今云はうとするのではない。この『小說神髓』の缺陷を拾つて高山樗牛がかう云つた。

『その寫實の意義の偏狹に失したる、傳奇及びノヴェルの並立を認めざる、心理描寫を過重し、又心理的描寫の適用せられ得べき小說の如何なる種類なるかを究めざる、理想小說の眞價を認むることを欲せざる……等々』

右の中、更に後世の批評家がほじくり立てゝ、そのノヴェルと傳奇の並立を認めない一條を取上げてこれを擴大細論し最後にこの書の功罪を斷じて、明治年間に浪曼的傳奇の充分に發達しなかつた罪を溯つてこの書になすりつけたのを讀んだことがある。

見方としては面白くなくはないが、明治に浪曼的傳奇の隆盛を遂に來さなかつたには、來さなかつた社會的理由があらう。資本主義の顚潮時代には、浪曼的傳奇などは隆盛を來すべき約束には決してゐないのだ。

更に『ノヴェルと傳奇との對立を認めなかつた』のを『小說神髓』の缺陷として指摘する如きは、以ての外のことである。あの書の一番の功績は、その對立を認めなかつた點にあるのだ。

この二つを對立させる見方は、分類的、停滯的で現社會の恒久不變を希念する御用學者の議論としては尤もであるかも知れぬ。その立場から、これは缺陷であるだらう。

だが吾々から云へば著者が明白に、小說を以て十九世紀の新興藝術形式となし、傳奇戲曲を揚棄して、成長して來たものとして把握して、歷史的に、辯證法的に、進化の過程に於て理解してゐる點にこそ價値を認めるのであつて、この一點を缺けば『小說神髓』の革新的意義の大半、そして今日の吾々にも抱かるゝ興味の殆んど全部が失はれたであらう。

五　フリイチエの議論

なほ明治の寫實主義理解のために、フリイチエの『藝術社會學』の中から次の説明を引用しておきたい。

『寫實主義的樣式は次の樣な社會に於いて發生し且つ確立する。其處では封建的・階級的神官制度は沒落し、經濟が自然力から獨立して合理的其礎の上に建設されてゐる。此の社會では世界に對する宗教的崇敬の地位を占むるものは科學的探求心、世界研究心及び世界を征服しようとする努力等である。換言すれば、他のより以下に立つてゐる反抗的な階級から未だ大なる脅威を受けない時代のブルジョア社會に於て寫實主義的樣式が發達する。此の極端な二つの樣式――理想主義的と寫實主義的――の間には、是等二つの流れが混じ合つた樣式がある。卽ち、封建制度から、資本主義への推移の行はれる過度期に適應した樣式である。』

私は『ラグーザお玉』なるビオグラフイ・ロマンセエを書いてゐた時、ラグーザが執拗にお玉に向つて寫實をすゝめ、それもありきたりの日本の草花などを寫生させたのでは、お玉がどうしても從來の粉本にたよるから、日本に全然ない西洋草花や鸚鳥を與へてまで、粉本に影響さるゝ所のない白紙で寫生させやうと努め、漸くにしてお玉が寫實畫に興味を覺えた文獻をさがして、非常に興味をもち、その時も上記のフリイチェの此の言葉を思ひ浮かべたのであつた。

そして明治時代の凡ゆる藝術を通じて、リアリズムは本能として動いたことを考へたのだが、お玉が鸚鳥によつて寫實に興味を持ち初めた時より六七年を經過し、『小說神髓』はリアリズム・マニフエストとして世に出でたのである。

『小說神髓』の研究では、私は亡友平林初之輔君の批判に九分通りまで贊成である。彼の遺稿集に見る明治文學に關する諸篇は、やゝもすると諸研究家に看過されてゐる恐れがあるのでこゝに更めて注意を促しておきたい。

六　政治小說は靑年日本の聲

『小說神髓』の前後に纒綿して、明治に入つてから、日本では初めて見られた新らしい文藝的ジャンルは政治小說である。

一體、政治小說を目して、才子佳人の功名談で、文藝の幼稚な時代には、どこの國にでも歡迎される種類のものであると云ふやうに、從來、解したのは甚だしい誤解であつた。

政治小說は、歐洲に於ては殆んど英國にのみ發達したので、その創始者は、後に大宰相になつたディスレリであつた。

これが創始された頃の英國の情勢を見ると、不合理な偏狹な選擧制度が漸く變改の緖について、遲々とした併し堅實で明白な議會主義を通じて徐々に民意の伸びやうとしてゐた時代である。

大陸ではフランスに大革命からナポレオンの勃興沒落があつた時、アウストリヤではメ

ツテルニツヒのアブソリユーテイズムに、國民が反逆と抗爭と分裂と混亂とを續けてゐた時代である。

そしてそんな國は政治小說のよき苗床にはならなかつたのだ。

さきにも引用したが、十九世紀の世界を支配したものを、史家はフランスの自由思想と、英國の產業テクニツクだと云つてゐる。

そのフランスを繼承した政治運動が、日本では、自由黨で、英國を繼承したものは改進黨だが、一口に政治小說と云つても、自由黨系統のは多く飜譯に留まつてゐる。それもステプニヤツクやデユマの回想や傳記などを無理に自由黨的イデオロギイにこぢ付けて、移植したものが多い。

これに反して改進黨系統のは、近く柳田泉君の數年沈潛の研究が公けにされれば明白に分ることだが龍溪、鐵腸、南翠など、眞に政治小說の名に値する業蹟を殘してゐる。

政治小說とは、進步的議會主義の產物に外ならないので、これが主として英國主義に則

らうとした改進黨方面にのみ成果を結んだのは、因果の自ら然らしめた所で、些とも不思議はない。

繰返して云へば、政治小說とは革命もなく、アブソリユウチズムもなく、進步的色彩ある議會主義を取つた十九世紀の英國にのみ、發生し、そして發達したもので、日本でも當然に英國の政治思想を繼承して進んで來た改進黨にのみ成果が收穫せられたのだ。この一點を捕捉しそくなつたら、明治の政治小說は全意義が分らなくなる。

英國でそれがヤング・イングランドの聲と云はれるやうに、日本でも當時、議會制度を眼前に控へて待望する所多かつたヤング・ジヤパンの聲であつた。同じやうに議會制度の題材が取扱つてあつても、明治三十年代の諸作は、もう政治小說とは呼ばれない。そこには積極的に議會主義を宣傳する氣持も、待望もない。ヤング・ジヤパンの響がない。そこにあるのは政治家や御用商人や選擧區民の失行や暗黑面の摘發のみである。だからそれは社會小說なる別な名稱で呼ばれるのだ。

社會小說は必ずしも政界の缺陷の摘發のみを意圖したものでなかつたのだが、出來上つた實際作品は殆んど全部さう云ふものになつてゐるのは、私が前に指摘した通りである。

私は唯物史觀明治文學概說なる題を與へられたが、問題が餘りに大きくて、そして許される頁は餘りに狹少である。

だからノート の形式を取つて、なるべく短かく短かくと努めたが、それでも少し超過してなほ明治の前半しか綜らなかつた。後半は別な機會に追補する。

私の硏究方法はなるべく事實を澤山集めて、少しの結論を出すと云ふやり方なので、さきに理論の骨組を作つてそれに材料を押しこむ『押しぬき壽司』方法とは眞反對である。そこに私の俗學的傾向があるのだと思ふ。間違つた考へ方には敎示を願ひたい。

七　日本雜誌興亡史

一　初めはオランダ雜誌の飜譯

新聞が日要品なら、雜誌は月要品だ。

私達が子供の時は、學校の教師が、雜誌はなるべく讀まない方がいゝ、雜誌をよむと頭が散漫になつて、纒まつた勉强を嫌ふやうになると、よく云つてゐたものだ。

今日は恐らくそんな事を云ふものはあるまい。それに『纒まつた勉强』をして、大學を首席で出ても、職業は先づ無い現代だから、それよりも讀んで面白い雜誌でも手にして、時代のスピードと脉搏の合つてゆく日を送つた方が、時代離れのした存在にならない丈けでもいゝと、有意識的にか、無意識的にか考へるので、今日の若い人の中には、雜誌も讀まずに勉强に凝る人は先づあるまい。

その月要品の雜誌が吾が邦に生じた歴史を辿ると、決して天日と共に古くから存在したものではなく、この六七十年のものである。一番初めは蘭學者がオランダ人を通して、雜

誌なるものが西洋にあつて、而も雜知識を豐富に盛つた便利で面白いものである事を知つたのだ。

私は前年長野市に旅行した時、犀北館なる旅館に泊つたが、そこの主人は非常に佐久間象山の崇拜家で、その遺品をいろ〳〵倉庫に蒐集してゐるのを見せて貰つたが、その中に數册のオランダ雜誌があつた。中を開いてみると詩などもあつた事を記憶する。

その時はオランダ語を些とも知らなかつたし、又辭書も持つてゐなかつたので、格別の收穫はなかつたが、今度は機を見てオランダ辭書携帶で行つてもう一度あれを見せて貰ひたいと思つてゐる。

オランダでは雜誌の事を magazijn と綴つて、マガゼインと發音する。

幕府の蕃所取調所から出た『官板玉石志林』は Hollandische magazijn から色々な話を箕作秋坪が飜譯したもので、玉石とは玉石混淆から『雜』を意味し、志林は『誌』を意味する。これが吾が邦に於ける西洋雜誌飜譯刊行の嚆矢と見てよいであらう。

このホーランデイシェ・マガゼインは、前年オランダに行つた時、古本屋で買ひ集めて數冊を私も所有してゐる。

二　明六雜誌と花月新誌

明治以降の雜誌發達史の中で、目立つた里程標のみを拾つて名づければ、明六雜誌時代、國民の友時代、博文館時代、實業之日本時代、中央公論改造對立時代、講談社時代と、區分してもいゝやうな氣がする。

明治最初の雜誌を『明六雜誌』と見る事には、研究家の間に於てもほゞ異議はない。そしてこれは明治文化全體の上にも非常に大きな意義と交渉とを持つから、少し詳しく說明しよう。

初めはアメリカ歸りの森有禮が洋學者の間に一つの結社を作らうではないかと提議して、三田の福澤先生を社長に推す積りであつたが、先生が固辭して受けないので、森自身

が社長になつた。メムバアとして加はつたのは西村茂樹、津田眞道、西周、中村正直、加藤弘之、箕作秋坪、福澤諭吉、杉享二、箕作麟祥、森有禮の十人であつた。

この結社は明治六年に作られたから明六社と云ふのだが、その機關誌として『明六雜誌』が出初めたのは翌明治七年からである。

歴史家は、『當時、天下の論を擧げて明六雜誌獨占の觀があつた』と云つてゐる位で、最高、最新の知識が玆に開陳せられた次第だ。婦人に關する說もなか〳〵あつて、第八號以下數回に涉つて分載せられた森有禮の『妻妾論』、三十五號の津田眞道の『男女同權辨』二十二號の『夫婦有別論』、三十三號の西周の『善良なる母を作る說』などこれである。

この雜誌はその內容が百科の事に涉つてゐると云つてゐるが、その中で文學に關する事のみは比較的閑却されてゐる。而も『ラヴ・イズ・ベスト』と歌つて名高い詩人なるロバアト・ブラウヰングや、社會主義的詩人としても或る程度まで尊重さるゝロバート・バーンズ、漱石の『三四郎』のハイドリ・オタフイアで誰しも名を知るトマス・ブラウンなど

が斷片的に紹介せられてゐる。（詳しくは拙著『明治文學展望』の第一章參照）

何しろ明治七年に於て一年の賣上十萬五千九百八十四冊だつたのだからあの時代としては驚くべき數字ではないか。

この雜誌と體裁がよく似てゐて、西洋の學問を紹介するのでなく風流韻事に專らなのは成島柳北の『花月新誌』である。

日本の雜誌で初めて小說をのせたのは、この雜誌である。『楊牙兒奇談』と云つて、文久元年に神田孝平がオランダの探偵小說を譯しておいたのを、成島柳北が若干の删潤を加へて揭げたのである。

森鷗外博士でさへが、西洋小說を讀んだのはこれが初めてだと云つてゐる。（『雁』參照）又これに連載せられた柳北の渡歐した時の日記『航西日乘』を讀むと、パリで初めて『椿姬』の劇を見たこと、アンバリイドで、毛利家が馬關海峽の海戰に分捕られた大砲を見たことなど、記入してあるのは面白い。

三　勝海舟の譯詩

投書雜誌は明治十年三月創刊の『穎才新誌』を以て最初とすると思ふ。後に明治末期の小說壇の覇者となり、且つ投書雜誌中最も有力なものと見てよい『文章世界』を主宰した田山花袋氏は、その初め、この投書家であつた。

何でも月初めになると、繪草紙屋の店頭にこの新刊號がつり下げられる。田山氏はそれを胸を躍らしてみて、自分のが入選してをれば買ひ、さうで無ければ買はずに來たものださうである。

『こゝはお國を何百里』の唱歌の作者眞下飛泉なども、この雜誌最終期の投書家の一人であつた。

まだ探せば、この雜誌からは幾多の名士が巣立つてゐる筈である。

明治十年代になると仲々いゝ雜誌が出たもので、その中『政理叢談』は中江兆民主筆、

自由民權運動を指導した有名なルツソオの『民約譯解』は、この雜誌に連載せられた。經濟雜誌としては、明治年間恐らく最もいゝと思はれる田口鼎軒の『東京經濟雜誌』が明治十二年の創刊。イギリスの『エコノミスト』に傚つたものである。

『東洋學藝雜誌』は最高學府として、一國學者の淵叢として、羽翼漸く整つて來た東京大學系統の機關雜誌である。これで注目すべきは日本最初の新體詩の一つと言はるゝ(中島廣足のはもつと古いのだが)勝海舟の『思ひやつれし君』を明治十五年に掲げてゐる事である。

日夏氏の『明治大正詩史』でも、山宮允氏の『新詩の發生及び展開』(日本國民一號參照)でも海舟のこの譯詩が明治三十年の『舊幕府』に依つて初めて發表されたものと記してゐるが、これは飛んでもない間違ひであつて、それは明治十五年の昔疾くに『東洋學藝雜誌』に出てゐるのだ。その全部を示す。

思ひやつれし君？（Loefden Heer）

なにすとて、やつれし君ぞ。
あはれその思ひたわみて、
いたづらに、わが世をへめや、
あまのはら、ふりさけみつゝ、
あらがねの、土ふみたてゝ、
ますらをの心、ふり起し、
清き名を、あめにひゞかし、
かぐはしき道のいさをを、
あめつちの、いやとほながく、
聞く人の、かゞみにせむと、

我はもよ、思ひたわます、
おほろかに、此世をへしと、
面やつれしも。

これは海舟が、多分文久二年頃オランダの詩を譯しておいたものである。
所が明治十五年外山ヽ山、井上巽軒、矢田部良吉の諸學者が、初めて新體詩の試作をなし、それを刊行したのを、一日、ヽ山博士が海舟翁に呈すると、海舟は、『それなら自分も青年時代に試譯した事がある』とて上記の一篇を示したので、外山博士は『先覺者はさすがに違つたものだ、こんな事まで手をつけてゐる』と言つて、感心して引下つて、それを東洋學藝雜誌にのせたのである。（拙著『明治文學展望』參照）
併しこれを新體詩とみていゝなら、未だ外に擧げねばならないものが澤山あるのを、日夏氏も山宮氏も看過してをられると思ふ。私はオランダにゐる時、苦心してこの原文をさ

がして Loefden Heer とは『主基督を讃ずる歌』の意の讃美歌なるを知つた。

讃美歌を新體詩前史として掲げるなら、明治二年以來幾多の試譯があり、何冊かの刊行も見てゐるのだからそれを拾ひ上げねばなるまい。

なほ日夏氏の詩史にしても山宮氏のでも、新體詩前史の研究は非常に疎漏であるから、私は他日一文を草して質問したいと思つてゐるが、兎に角本誌の讀者諸君は、明治に新體詩が生れるまでの、前史的材料として最も貴重な海舟の譯詩は、明治十五年の『東洋學藝雜誌』に初めて載つたものである事を、よく記憶しておいて貰ひたい。

四　婦人雜誌の出現

明治十年代も後半期になると、婦人專門の雜誌が出初めた。

一、女學新誌（明治十七年六月創刊、近藤賢三編、廢刊日未詳）

一、女學雜誌（明治十七年七月創刊、同氏編、多分上記の新誌を廢刊してこれに代へた

のであらう）

一、女學叢誌（明治十八年十二月創刊、積文社、廢刊日未詳）

などは最も早いものに數へてよいであらう。

今、私の許にこれ等の諸雜誌が一部もないから、その一つ〳〵に就いては茲に何も述べる事が出來ないが、只大體論から云ふと、一體ジヤアナリズムが婦人讀者層に着目すると云ふことは、一つの大きなエポツクをなすものである。英國でも新聞が百萬を突破する盛況を呈するやうになつたのは、婦人への着目が主因だし、今世界で最もよく賣れてゐる雜誌も大部分は婦人雜誌でなくば、婦人吸引の要素を多分に含むものである。なぜ婦人への着目が、言論機關の大衆化にしかく役立つかは色々考察を要するであらうが、男子の興味は專門的差異によりてバライテイが多いに反し、婦人の興味は編物とか、流行とか、化粧とか、比較的に共通性が多い。これが最も有力な原因であるとはジアナリズムの研究家が夙に論證してゐる所である。それかあらぬか上記の雜誌も長命を保ち、就中『女學雜誌』

の如きは私達の少年時代まで續刊してゐて、母や姉の愛讀してゐたのを今も記憶する。

五　國民の友の意義

明治二十年代になると、雜誌は實に百花繚亂の全盛時代に入るのである。

急進的な歐化の鼓吹を努めたものには德富蘇峰の『國民の友』があり、これに對立して國粹保存の役を買つて出たものに三宅雪嶺博士の『日本人』がある。

雪嶺博士も偉れた學者であり、立派な評論家だが、單にジヤアナリストと云ふ點から見れば蘇峰氏に一籌を輸さねばならない。私は、蘇峰氏こそは日本の生んだ最大記者の中の最も傑出したものだと思つてゐる。その『國民の友』は明治二十二年二月の創刊。明治文學通の第一人者であつた內田魯庵翁が『當時德富蘇峰の國民の友は政治を中心として普く各方面の名士を寄書家に網羅し、嶄然として思想壇に重きをなした雜誌界の霸王であつた』（「思出す人々」）と語つてゐる。

この雜誌は蘇峰氏の愛讀せられた『ネーション』から思ひ付いて編輯をそれに摸したものだが、初號の發刊の宣言からして淸新の歐文體に天下の眼をみはらせたものである。

『嗟呼國民の友生れたり。何が故に生れたるか。現今日本の時勢其の必要を感ずればなり。必要とは何ぞや、吾人乞ふ試に之を說かん。』

これが書き出しだが、こんな發刊の辭は從來全く類例がない事であつた。

それから外艦の渡來から、王政維新、下つて明治に於ける社會の諸變遷を說き、維新の諸改革兒が今や或は死し、或は高官を貪つて安臥してゐるのを憤り、更に付け加へて言つた。

『然らば卽ち改革彼自身も亦安息するを得べき乎。曰く否、改革よ、改革よ、汝は決して安息する事を得ざるなり。』

改革と云ふやうな抽象名詞に擬人法を用ひたのは、前に小室屈山の自由の歌があるが、文章ではまだ珍らしかつた。

そして彼は維新後文化は進んだと言つても、富の分配の不平均もある。學問の普及の不平均もある　殊に男女間の權利の懸隔は餘りに激しいと論じて、歐洲の平民主義に則つてそれらの陋習を打破しようと云ふのがこの雜誌の抱負であつたのだ。

則ちこの雜誌は政治もしくは社會改革の上では平民主義を旗標とした。當然、當時用ひられた分類の歐化と國粹保存では、前者の牙城と見られた。思想史の上からその兩方面への貢獻は著大なものだが、それは聊か私の課された問題外に涉るから、茲に言及しない。

雜誌の編輯技術の上から言ふと、今迄ばら〳〵に分離してゐる觀のあつた政治、經濟、宗教、文藝、娯樂、その他社會萬般の興味を集成した綜合的な社會雜誌である。ここに從來と違つた重要な特色がある。

文學史の方面から見ると夏期附錄として小說をのせ、第一回は春のや（坪內逍遙博士）、美妙、思軒の三者を選み、爾後次々に名作を登載して、文壇の登龍門はおろか、大家號授與所の名稱まで冠さるゝに到つた。殊に美妙が挿畫を注文して初めて入れた裸體美人は囂

々たる論難の渦卷を起した。夏期附錄、裸體美人の挿畫――さうした一二の編輯上の現はれた特色のみを拾つてみても、如何に編輯者の目さきが機敏に働いてゐたかゞ分る。

私はかつてこの雜誌を『日本雜誌の中、最初に最も敏感に、最も鮮明に新興資本主義と呼應した』と書いたら（拙著『明治文學展望』）蘇峰先生から『果して然る乎、否乎、一考を要す。予が國民の友初號を發刊した間もなく西園寺公と相見えたる際、公は予に向つて何やらソシヤリズムの臭がすると言はれた。初號の社說などは新興資本主義との呼應でなくして寧ろそれに反對して起つたものと思はるゝ節が無いでもない』との高諭を辱うしたが、この雜誌は勿論社會主義を一般に普及し、勞働組合の設立を最初に叫んだり、メエデエの通信をのせたりした功蹟は持つてゐる。

併しこの雜誌の據つて以て根本の主義とした平民主義そのものが既に泰西に於ける資本主義イデオロギーの結晶である事を思はなければならない。そして明治以來の諸雜誌が大抵學者の餘技、閑人の手すさびにあらずんば封建的卑俗趣味の繼承であるに對し、國民の

友のみが潑剌として最も多く新時代の『商品』の資格を具備してゐた事は爭はれない。
當時に於ては自由思想は最も活潑に進歩的役割を務めてゐた時代なのだから、私の論は『國民の友』の推讃の辭でこそあれ、決して排斥の意は毫も含んでゐるのではない。
私は『國民の友』の合本を今でも時々繙いて見る事がある。そして六號の埋草に到るまで緊張し切つてゐる編輯ぶりに心から感心する。さきに言つた『嗟呼國民の友生れたり』の文などは、古い形容詞を用ふれば、文勢急雨の如しとでも言ふべき名文で、今日讀んでもその清新味は感得できる。この雜誌は田舍の隅々まで行き渉つてゐるから土藏の底など搜しても二三冊は見つかるであらう。熟讀してその編輯ぶりを見て貰ひたい。
日清戰爭後三國干涉の際たま〳〵蘇峰氏は遼東を視察し、それから氏自身の考へも變ると共に、平民主義の看板も動搖して來ざるを得なくなつた。その後氏が政府に致仕されたりして、變節改論者などの謗りも受けられ、遂に雜誌廢刊の止むなきに到つたのは明治三十一年であつた。蘇峰氏に贊すると贊せざるとに論なく、皆これを痛惜した。

結語として私は繰返して言つておく。『國民の友』は日本最初の綜合的社會雜誌で、編輯の隅々まで緊張し、常に時代のトップを切つて直往した點、確かに明治のジヤアナリズム中群を壓して卓立するもので、その主筆であつた蘇峰氏は天分努力共に吾邦最大記者の一人である。或は隨一人と言つても言ひ過ぎでは無い。

六 文學界の魅力

文學評論雜誌の雙璧である『早稻田文學』と『柵草紙』が創刊せられたのも、同じ二十年代前半期である。

前者の主筆は坪內逍遙、後者のそれは森鷗外。

この文壇の兩巨頭が兩々相峙して論戰したのが沒理想論で、吾が文壇にあつては實に空前絕後の大論戰であつた。文藝批評の用語などはこの論戰で一定されたのが多く、それ以外にも文壇を急速度に進步せしめたる事幾何なるを知らぬ。但し本誌の讀者には大して興

ひたいと思ふのは『文學界』である。

その前後に出た雜誌で、『若草』の讀者諸君などに是非、特別に詳細な研究をして貰ひたいと思ふのは『文學界』である。

既に御存知の如く北村透谷、島崎藤村、平田禿木、馬場孤蝶、戸川秋骨、上田敏、星野天知など、當時の純情な、ロマンチックな青年が、世に背く感傷の思を吐いた雜誌で、明治思想史研究の上から特に興味があるばかりではない。彼等は日本の對女性觀の上に、今迄全くなかつた清新な憧憬を注入した。

久遠の女性！　又は處女にして母なる聖母禮讃!!

かうした女性觀は日本には未だかつて無かつた。日本にあるのは、女を妻として、即ち子孫傳承の方便として、或は遊女として、即ち性慾の同伴者として、母として、即ち孝道の對象として考へるやうな見方のみであつた。

然るに西洋には別な女性觀がある。人も知る如く中世の騎士は、任俠、以て主義とな

し、強を挫き、弱を助けるを原則とし、諸國遍歴の武者修業のかしま立ちに、城塞を仰いでは竪琴を奏でゝ、欄による美姫麗人を讃へた。

こゝから歐洲の對女人道德は非常に淨化され、女性の地位は著しく高まつたのだが、さうした清純淨潔の處女讃仰の思想を、初めてわが國に移植したのは實に『文學界』同人である。その意味から私は、讀者諸君の中などには、『文學界』の研究に一時沒頭する程の熱心家が現はれてもいゝやうな氣がする。

この中でも島崎藤村氏は當時古藤庵無聲と號し、青春の煩悶止み難く、一簑一笠、飄然身を孤杖に托して西國流浪の旅に上つた。そして紫式部が源氏物語を起稿した近江の石山寺に詣でて、ハムレット一卷を獻納したりしてゐる。

今の青年諸君にはどうか知らぬが、私達の少年時代には、かうした行爲が堪らない程魅惑とも憧憬ともなつたものである。

藤村氏の大作『春』は實にこの流浪がはてゝ、文學界同人と東海道の一寒驛に再會する

所から初まり、北村透谷の性格をよくスタディして描いてある。

なほ樋口一葉の不朽の名作『たけくらべ』も元はこの雜誌に出たものである。

七　日清戰爭前後の壯觀

日清戰爭が日本の資本主義史上にもつ重要性は、そのまゝに又わが國の雜誌發達史の上にもつ重要性である。

今迄も見て來た通りにそれ迄の雜誌の、高級なるものは多く學者の啓蒙事業に非れば、進歩的青年の小使錢の餘りを振りむけた道樂で、下品なものになると粹人の慰さみ、羽織ゴロのゆすりの道具たるに過ぎなかつた。その舊態を全く淸算し、脫却して、雜誌が立派な資本主義的企業となつたのは、實にこの日淸戰爭の時の事である。

純文藝雜誌では博文館の『文藝俱樂部』と春陽堂の『新小說』が相對峙した。明治中期文壇の傑作と云はるゝものは、この兩誌に出たのが多い。文藝評論雜誌としては『早稻田

文學』と『帝國文學』が相對峙とした。前者は依然として坪内逍遙博士主宰の下に、抱月、筑水、不倒、代川、梁川その他早稻田の青年秀才が輩出し、後者には高山樗牛を筆頭に、桂月、敏、嶺雲、雨江、羽衣など群星の如くに輝いてゐた。あのやうに文壇が活氣を呈した事は前後に珍らしい。そしてその上に王者の如き貫錄を以て座してゐるのが『太陽』で、學界百科最高の知識を集め、殊に樗牛の華麗なる文藝時評は天下の青年を魅したものである。

これらの諸誌が文壇の中心を形成して數年を推移したが、明治三十年代に入ると、その傍側に忽然として一つの新雜誌が遊星の如くに出現した。與謝野寛氏主宰の『明星』である。謂はゆる新派和歌の發源地である。右の外『新聲』(新潮の前身)『文庫』などの青年文學雜誌も出現し、學閥も、文壇閥も、出版閥も持たぬ文學愛好青年が、鬱屈の氣を吐く舞臺になつた。

文學とは關係が薄いが『勞働世界』と云ふ勞働問題專門の雜誌が三十年の十二月から發

刊せられてゐる事も見落してはならぬ。この編輯者は後にモスコオにゐて、第三インタナショナルの最高幹部の椅子に坐してゐた片山潜氏であつた。

そして日露戰爭が日本の雜誌發達史の上に與へた影響も大きいものではあるが、併し日清戰爭の時程劃期的ではないと思ふ。

八　私の思出

日露戰爭を過ぎると、私も、初めてそれ〴〵の雜誌の直接愛讀者たる年齢に達したから、今迄記述した雜誌のやうに歴史として調べたのでない、直接記憶を持つ。だから茲から少し記述の調子を易へて、私の個人的思出を綴つてみよう。

私は美作の山の中の寒村の農家に生れたので、雜誌など取つて讀むやうになつたのも、都會の少年に比較すると隨分遲かつた。元より近隣に雜誌屋などないから、初めて東京へ爲替を組んで送つて少年世界の讀者になつたのが明治三十八年十二の年である。翌年投書

して三度目に出したのが初めて掲載されたのが、今でもよく覺えてゐるが明治三十九年の九月の少年世界で、題は「秋の風」と云ふので、七點を與へられた。或る物好きが調べて何かの雜誌に書いてゐたのだが、その號の考へ物の入選者の名前の中に芥川龍之介氏もあるさうである。少年世界はその後二年ばかり投書したが、當時の投書家でも覺えてゐるのは劇作家であり、且つ立教大學のドイツ語の教授である番匠谷英一君だけである。

但し東京に遊學してゐた兄が送つてくれるので、私は少年世界と一緒に中學世界や文章世界も讀んでゐたが、三十八年時代の投書家で後に中央に名をなした人で私の記憶するのは童謠の葛原しげる氏などその一人である。

當時中學世界の投書欄の選者なる大町桂月氏は『文壇に出すとも耻しからぬ名作あり』と常に誇つてゐたが、三十九年頃から加藤武雄氏が活躍し初めた。加藤氏の第一作は『別れの記』と云ふので、親戚の少女が京都の舞子に賣られてゆくのを書いた抒情文で、選者が『一字一涙……』何とか評してゐた。爭はれないもので、加藤氏が後年文壇に名をなす

センチメンタルなフエミニズムはあの少年時代の時から現はれてゐた。

九　投書家華やかなりし頃

併し加藤氏などの投書時代を振返るには中學世界より文章世界の方がいゝ。これは三十九年の創刊。謂はゆる日露戰爭景氣で出たものだ。主幹は田山花袋氏、編輯は前田晁氏。博文館主の積りでは何でも丁稚や小僧さんのよむ手紙などの講釋を書いた雜誌にする積りだつたさうだが、それが時勢の潮に乘つて、自然主義の中心論陣の一つとなつたのだから世の中の事はまことに分らぬ。

前田氏は殊に投書家の指導には熱心で、常に彼等を鼓舞し、鞭韃するを怠らなかつた。今日文壇にゐる人で、前田氏の厚い奬勵を、直接間接に受けてゐる人は隨分多いと思ふ。

一時名を現はして直ぐ消したが久保田萬太郎氏なども詩壇の投書家であつた。當時の號は虹泉。朝日新聞の記者で一時は西洋へも行つてをり、登山家として聞えた藤木九一氏も

詩壇によく投書してゐた。當時の號は紫蔭。

散文欄で最も活躍した人の中には加藤武雄氏、中村武羅夫氏、水守龜之助氏などが、最も初期からの投書家であつた。この三人が後に新潮社編輯室で机を並べるやうになつたのは奇縁である。

以上の諸氏を第一期の投書家とすれば、第二期には三上於莵吉、丸木砂土（當時の秦菱歌）、米川正夫、中村白葉などの諸君がゐた。

第三期では細田民樹氏、宮島新三郎君などの名も見える。私もこの頃の投書家で、文章世界の懸賞小說の金でやつと滯納してゐた早稻田の月謝を收めたりした事もある。

私達の次には片岡鐵兵君の名がよく見えたし、又劇作家の額田六福君が、小笠原露葉の名前で投書してゐた。近頃田山花袋氏の家庭を題材にした小說を書いた阪本石創君もこの頃の投書家である。

日露戰後の文壇の霸權は、島村抱月氏の歸朝と相俟つて、一時早稻田の手に握られた事

がある。而も近松秋江氏は、文章世界を目して、青年文士養成のため早稻田大學の文科の教室以上の事をしたとさへ言つてゐた位だ。投書家華やかなりし頃は、實に文章世界時代を以て頂點とし、又實際に於て現代文壇の中堅どころには幾多の文章世界投書家出身、乃至はその雜誌によりて最初の文學のＡＢＣの手ほどきを受けた人が非常に多い。

私は又いつか折を變へて、文章世界時代の思出を詳しく書いてみるであらう。

一〇　世界大戰以後

文章世界の衰微と共に、又『投書家華やかなりし頃』も過ぎ去つた。

一つは同人雜誌がらくに作られるやうになつたので、數多くの投書によつて、活字慾を充たさなくても、勝手に自分達で雜誌を編輯することが出來るやうになつたからである。

世界大戰が吾邦雜誌發達史の上に與へた影響は、日清戰爭のそれと同じ程重大なものである。この機に到つて社會運動の風潮、汪然として勃興し、永らく本邦諸雜誌の王座に控

へてゐた『太陽』が光輝漸く薄く、『中央公論』がこれに取つて代るに到つた。
戰爭の終結と前後しては『改造』『解放』『新時代』『中外』など、政治思想を中心にした雜誌が數多く輩出したが、その中で今日まで健全に成育して、權威に於て『中央公論』と對立してゐるものは『改造』のみである。この二つの雜誌は何と云つても、今の所吾が國言論界の最高權威である。
併しかゝる高級な雜誌は大衆の間への傳播力は何と言つても限られてゐる。三十萬、五十萬、百萬の讀者を獲得するものは、謂はゆる大衆雜誌である。
そして大衆雜誌の型を完全して、日本のジヤアナリズムに一新時機を劃したものは何と言つても講談社である。『キング』と『講談倶樂部』の二つの雜誌は、たとへどんな卑俗性を附帶してゐようとも、大衆への浸潤力の大きい事では見のがしてはならない。
大衆雜誌以外に、讀者範圍の大きいものは婦人雜誌で、三十年代前半期は博文館の『女學世界』が先頭に立ち、日露戰爭以後は實業之日本社の『婦人世界』がこの位置を奪ひ、

現在では『主婦之友』が他を壓して、『婦人倶樂部』がこれに雁行してゐる事、更めて私が說明するまでもあるまい。

併し日本の雜誌界は漸く今一つの行き詰りに面してゐる。之を如何に打開してゆくかゞ現在の各誌の頭痛の種子になつてゐる。今年（昭和七年）の後半期あたりは大衆雜誌が續々と刊行を見るやうだが、私の聞知した範圍では、どうも『キング』を打破した創新なものがあるやうな氣がしない。

せめて型でも變へて、現在の菊判本位を改正し、又月刊制度を週刊制度かフォートナイトリイ制度かに變更してみるなどの工夫を積んだら、それに必然的に强ひられてそこから又別な編輯法でも湧いて來はすまいか。私は菊判と月刊本位をそろ〳〵揚棄すべき時機に到達してゐるやうな氣がしてならない。

以上は極めて勝手に綴つてみた日本の雜誌の發達過程で、正確な歷史的な研究の見たい人は『現代ジャアナリズム研究』にのせてゐる拙稿『日本雜誌發達史』の御參照を乞ふ。

八　リットン卿を迎へて

祖父バルワアは我が文壇開發の恩人

上

廿九日（昭和七年二月）横濱に入るP・クーリッヂ號で、國際聯盟支那調査委員長のリットン卿の一行が來る。日支の紛爭の調停に關して國際聯盟が徹底的に無力を說明した如く、この調査委員なるものにも、恐らくは大した業績は期待できまい。しかしいづれにしても遠來の珍客である。それに氏は小說家として有名だつたバルワア・リットン（エドワード・ジョン）の孫であつてみればわが文壇とは祖父を通じて少なからぬ緣故がある。といふのはこのバルワア・リットンは明治廿五年頃までわが國で最もよく讀まれた泰西作家の一人であり、その「歐洲奇事花柳春話」（原作は「アーネスト・マルトラバアス」及びその續篇「アリス」）は明治における西洋小說飜譯の最初のものである。その上にこの作は創作の上にも或る影響を及ぼしてゐるので、春のや主人（現在の坪內逍遙博士）の初期の名作『妹と背鏡』は明かにこの作に暗示を得たものである事は、篇中に原作の詳しい梗概が

挿入せられてゐるのでも知られる。とすれば、國際政治上の意味は除いても、單に文壇として、少くともわれ〳〵明治飜譯文學の研究者としては、氏を歡迎してよい理由を持つ。

だが、先づ眼前に迎へる人の事から語ると、リツトン氏は父君が印度總督だつた關係上、印度で生れたが、教育は勿論英國本土で受けた。ケンブリツヂの出身。後に再び生地へ歸任し、レデイング卿が印度總督となつた時、ベンガル總督をした事もある。聯盟に關係が繋がるやうになつたのはレデイング卿が英國代表となつたからに違ひない。

さて氏は、愈々、支那調査委員長をひきうけて日本にも立寄る事がきまると、

『私の家の書架の中に、祖父の小說の日本譯があるのを子供の時から見知つてゐる。それには珍しい日本の挿畫が入つてゐた。そんな關係から日本へ行くのは特になつかしい』

といふ意味の事を語つた。

この日本譯の小說が何であるかは分らない。なぜなればバルワアの小說の飜譯は左の如く澤山あるのだから。

(1)歐洲奇事花柳春話（原書前掲）丹羽純一郎譯、明治十一年出版
(2)歐洲奇話寄想春史（ポンペイ最後の日）同氏譯、十二年出版
(3)開卷驚奇龍動奇談（ストレーンヂ・ストーリイ）井上勤譯、十三年出版
(4)開卷悲憤慨世士傳（リエンヂ）坪内逍遙譯、十八年出版
(5)諷世嘲俗繫思談（ケネルム・チリングリ）藤田茂吉、尾崎庸夫譯、同年出版
(6)文學小說連理談（ユージン・アラム）服部誠一譯、十九年出版
(7)サクソン王名殘ハロールド物語（ハロード）磯野德三郎譯、二十年出版
(8)奸雄の末路（廷臣カルデロン）吉田喜六譯、廿一年出版
(9)夜と朝（ナイト・アンド・モーニング）益田克德譯、廿二年出版
(10)白浪艶話（ポール・クリツフオド）小川漁夫譯、廿四年出版
(11)聖人歟盜賊歟（ユージン・アラム）原抱一庵譯、三十三年出版
以上は友人柳田泉君の調査の中から目につくものを書きぬいて見たのだが、この外に大正

になつてから大町桂月の『ポンペイ最後の日』の抄譯があり、震災の直後中村詳一君の同書の完譯がある。その少し前、福永渙氏が『幽靈の家』(Haunted and Haunter)を譯された事も記憶する。一番最近のものは世界大衆文學全集の一冊として出た『ポンペイ最後の日』で、これらは昭和五年の出版。

してみればリツトンの小説は明治から昭和にわたつてわれ〳〵の知る限りで一ダース以上の邦譯があるわけである。

下

丹羽純一郎が『花柳春話』を譯するに至つた動機は、同氏が英國留學中その原書をロンドンで得て、歸りの船の中で一讀して大いに興を催し、歸朝後譯筆を取つたのである。何しろ譯語には慘憺たる苦心をしたもので、たとへばキツスといふ字一つもその頃は未だ定譯がない。だから、今ならば『僕に接吻を許して下されば……』と譯してすむ所を、

『僕、若シ幸ニ卿ガ朱唇を一嘗スルヲ得バ能ク安眠ニ就カンノミ』

と、パラフレーズして漸く意を達してゐる始末である。

苦心の甲斐があつて、この書は非常によく賣れたと共に、また、前述の如く、明治年間における最初の飜譯小說として、文壇に永久に輝やかしい地位を占める事になつた。（尤も川島忠之助翁の『八十日間世間一週』はこの書に數ケ月先んじて世に出てゐるがこれはジュベニル・ストーリイとして暫く計算外においたのである）

坪内博士の『妹と背鏡』は狩野芳崖が一讀して非常に感動し、わざ〳〵博士邸をたゝいて話し合つた事が、逍遙集所收の回憶談の中に見える。してみると非常に間接の上にもまた間接にではあるが、リツトンの影響がこの二名家を結ぶひもとなつたといつてよい。

だが有體にいへばリツトンの讀まれるのは日清戰爭前で止まつたのであつた。

そしてその興味を再び英學書生の間に燃やすのに幾分の貢獻をしたものとしては、ラフカデイオ・ヘルンが帝國大學でなした英文學講義を擧げるべきであらう。

かれは『ストレーンジ・ストーリイ』その他がポウに影響を與へた事を論じて、その卓拔な見解にわれ〳〵の眼をみはらせた。(文學解說 Interpretation of Literature by Lafcadio Hearne 第一卷參照)

當時、講堂にその講義をきゝ、その刺戟によつてリツトンを讀んだ事を、厨川白村は『小泉先生そのほか』の中に述べてゐた事を記憶する。

そして最後にわれ〳〵がリツトンに注目したのは何といつても關東大震災であつた。但しこれはリツトンにといふよりも、その一番有名な作『ポンペイ最後の日』にといひ直した方がよいかも知れない。

復興の東京にはその映畫が舶載せられて、まだ震災の記憶のまざ〳〵と殘つてゐる人々の興味を吸收した。

もう一つ、私は重大な事を付記せねばならないのを、危く忘れる所であつた。この三月はドイツの大詩聖ゲエテの百年祭だが、リツトンの『マルトラバース』、即ち『花柳春話』

の原本は、作者がゲーテの『ヰルヘルム・マイスタア』から脱化したのである。私はまだマルトラバースを原著で讀んでゐないのだが、序文にその事の斷つてある由、二三の文學研究書に見える。

實は今度リツトン卿が見えたのを機として、それらの邦譯は手に入る限り集めて獻呈しかた〴〵一席、祖父に對する卿の回顧談でも聞かうではないかとの話も、同好者の間に出たのだが、日程を聞いてみると多忙でそんなひまなど無いらしいので、こゝにこの一文を草して、同志に代り歡迎の意を表する次第である。卿の旅寓中の多幸を祈る。

九　シエークスピヤと明治文學

一

この兩者の關係は一般に思はれてゐるより遙かに密接である。

これより前、普及版沙翁全集が出版されるので、早稻田出身の坪内博士に敎を受けたものが百五十人ばかり、中央公論社から招待を受けた事がある。その席上で、私はテーブル・スピーチの指命を受けたので立つて云つた。

『明治文學の曉鐘をついたものは「小説神髓」である。併し小説神髓はいかにして著作されたか。坪内博士は學生時代に、外人敎師からハムレツトの中の王妃ガーツルードのキヤラクタアを批評せよとの題を出され、このキヤラクタアの意味が分らず、道德的に解して怪しげな答案を書いて、ひどく惡い點を貰はれた。これに發奮して初めて泰西の新らしい文藝批評を讀み漁らるゝに到り、さうして初めて近代小説發展の徑路を知つて、あの

「小說神髓」を書かれたのであつて、それが新興明治文壇のスタートになつてゐるのだから、明治文學の新ページはつまり博士と沙翁の因緣に依つて、開かれたものだ。』

此れは、實は出たらめな、座興の積りで云つたのであつた。だが、後になつてよく考へてみると、此れはまさに此の通りである。後に明治文學史を編む者に、いつかは引用せられるであらう新見解のやうに思へ出して來た。

一體、明治文學の基調はリヤリズムである。「小說神髓」はそのリヤリズム・マニフエストで、この精神は明治文學の全歷史を貫流してゐるものである。それが、シエークスピヤを根源としてゐるとすれば、明治文學は何より基本的底流に於て旣にシエークスピヤの影響を受けてゐる事になる。

二

明治年間に於けるシエークスピヤの飜譯や飜案、又は上演の歷史は、旣に綿密な表が出

來てゐるから、それらを一覽せられるとよい。私は、こゝで、第一は　創作の上に、第二は　生活の上に、第三は　隨筆の上に、シェークスピヤが、明治文學に對して如何なる影響を與へてゐるかを論じて見やう。

創作上に最も顯著な影響を受けてをられるのはやつぱり坪内博士であらう。坪内博士の沙翁研究の動機が、歌舞伎劇と沙翁劇との類似の發見にあるのは、博士のしば〳〵說かれる所である。又、『牧の方』の創作には、ぼんやりと『マクベス夫人』の聯想があつた事も博士が說いてをられる。

併しそんな大きな、又は漠然とした問題を取上げずとも、場面の取り方、せりふの言ひ廻し方にも、明白に沙翁の影響の看取せられる節がある。博士のやうに沙翁を精讀せられると、無意識の間にでもそれが筆の穗先ににじみ出てくるのだ。

たとへば『桐一葉』。――これが明治年間の歌舞伎として第一位を占むる名作である事は衆口の一致する所だが、この中に沙翁の面影がある事は、逸早く『柵草紙』が批評した。

この筆者は森鷗外博士であらう。

今、その批評が手許にないが、要はかうだ。

『桐一葉』の第五段、其四の「淀君寢所、珍柏横死」の場は、內股膏藥で、利を見てどちらにでも付くお茶坊主の珍柏を、淀君が物の怪に襲はれ、夢遊病者のやうに寢所を忍び出て無意識につき殺す。

これが『ハムレット』の中の第三幕第四場「王妃の間」(中央公論社版一六〇頁)の

ハム まゝ、お下にござれ、お起ちなさるな。こなたの心の奥底までも鏡にかけて見さす程に、そこ一寸もお起ちあるな。

妃　何としやる? わしを殺さうでな?……あれ、誰れぞ來て、あれい!

ポロ (垂帳の蔭にて) やア〳〵! 出あへ〳〵!

ハム (劍を拔きて) や! 鼠? こたへたか、うぬ!

（と垂帳越しに突く。）

ポロ　（中にて）おゝ！　やられた！

（と倒れて息絶ゆる。）

から暗示を受けてゐる。

又『桐一葉』の第五段第三場「奥殿長廊下乳母自害」の場は、美少年だが白痴の銀之丞が且元の娘で腰元の蜻蛉との婚約が調ふた嬉しまぎれに、他の腰元達にはやされて舞ふところがある。そこへ蜻蛉の横死を聞いてこの白痴は發狂し、蜻蛉の幻影に誘はれて、狂舞しつゝ、遂に庭の池に落ちて死ぬ。

これがオフイリヤの狂亂から水死の場に似てゐる。

狂亂の場は卽ち第四幕第五場「エルシノーア城内の一室」（中央公論社版一九二頁以下）にあり、水死の場は第四幕第七場「城内の他の一室」（中央公論社版二二〇頁）にある。

だが、それは、何も鷗外博士を待たずとも容易にできる指摘だが、私は、この作には、『ヂューリヤス・シーザー』からの暗示も若干あるやうに思つてゐる。

即ち第三段其三の「片桐邸」の場は木村重成が上使となつて、片桐且元の本當の腹を聞きに來る。庭には一徹短慮の石川伊豆が潜んで、片桐の言に些の逆心でも見えたら刺し殺さうと構へてゐる。犬が泣く。片桐の弟と妻が出て警戒する。

これはシーザーの第二幕第一場「ブルータスの庭園」に髣髴たる所がある。一味の者からシーザー弑殺の祕謀に誘はれて、夜々に眠りをなさぬブルータスの邸へ、黎明を犯してカシヤス以下の徒黨が潜びこむ一場景が無意識の裡に、坪内博士の構想を支配してはをらぬだらうか。

三

坪内博士以外、直接に沙翁の筆意を幾分でも模さうとした例は、宮崎湖處子の小說にあ

る。私はその標題を忘れたが、京に東陽樓西陽樓の遊廓があり、元は縁戚だが、今は反目し、對立してゐる。併し東陽樓の息子の大學生と、西陽樓の娘とは、ひそかに戀し合つてゐるが、所詮許されぬ仲なので、娘は發狂して井戸に落ちて死ぬ。

この構想は、『ロミオとジュリエツト』の轉化で、そして娘の發狂と水死は、確かにオフイリヤの轉化である。

さう云へば日露戰爭當時の有名な家庭小說『琵琶歌』にも、櫻吹雪の月夜に琵琶歌をうたふ可憐な狂女がヒロインになつてゐる。思ふにオフイリヤから趣好を借りて來たものであらう。同じやうな趣好を田口櫻村の部落小說でも讀んだ事がある。

いづれにせよオフイリヤは多くの詩人畫家の魅惑となり易い。

夏目漱石は『草枕』の中で『スキンバーンの何とか云ふ詩に、女が水の底で往生して嬉しがつて居る感じが書いてあつたと思ふ。余が平生から苦にして居たミレーのオフエリヤもから觀察すると大分美しくなる』と書き、更に、土左衛門の贊まで作つてゐる。

雨が降つたら濡れるだろ。
霜が下りたら冷たかろ。
土のしたでは暗からう。
浮かば波の上、
沈まば波の底、
春の水なら苦はなかろ。

（縮冊漱石全集三卷八三頁）

但し、漱石とシエークスピヤの關係に就いては、野上氏が別に書かれるさうだから、これ以上は觸れるのを止さう。

四

併し逍遙博士にしても、漱石にしても、沙翁から受けた影響は、文學の範圍に留まる。

人生觀若しくは實行の上までの感化はない。

それが『文學界』の同人になると、さうした人生觀上、實行上の、感化を、シエークスピヤ、中んづくその『ハムレツト』から受けてゐる。

青年時代の島崎藤村氏（當時古藤庵無聲と號す）が胸中の情熱、抑ふるに由なく、一簑一笠、飄然と關西に流浪して石山寺に『ハムレツト』を納めた記は『文學界』の第二號（明治二十六年二月發行）に出てゐる。左に引用しやう。

石山寺へ「ハムレツト」を納むるの辭

名にしをふ瀬田の唐橋に立つて、湖上はるかに浮ぶ詩神を拜み、むかし紫式部が源氏の風情をうつせし石山寺に詣づ。予や旅に寢て風雅に狂する身のこゝに一の至友あり、今この友を笈中より取出し、「ハムレツト」一冊と記して此寺に納む。紫女が靈のとゞまりたらんと覺ゆるかなたを見やりて、ひたすら今日の風雅を祈るに、雪風飄々孤身をうづめて寒

山の一鴉この狂客のはらわたを斷つ。
　湖に浮ぶ詩神よ、心あらば
　　落ち行く鏡のこなたに聽けや
　千年の冬の夜毎に石山の
　　寺よりひゞく讀經の聲。

藤村氏がこの流浪の旅から歸るのを『文學界』の同人が東海道吉原まで迎へた所から、あの有名な小說『春』は初まる。

宿で、北村透谷がハムレツトの話を連中の間にし始めた。そこを藤村氏はかう書いてゐる。（この青木と云ふのが北村透谷のことなのである。）

『其日の、青木は『ハムレツト』の悲劇を持出した。彼は橫濱で西洋の俳優が演じたの

を見たといふ。その舞臺面の話から始めて、ハムレットに扮した男の身振り手眞似までやり出した。さあ、他の友達の眼は瞠る。中には口をモガ〳〵させて物を食ひ乍ら彼の方を觀て居るものもある。力の籠つた青木の聲は彼の名高い獨語を暗誦するに適して居た。彼は西洋人の寢言を借用して、實は自分の胸の底に蟠る言難い思ひを傳へようとするらしかつた。其時胸を躍らせたは岸本で、青木の言ふことが一々思ひ當る。岸本は斯の友達に導かれて、今迄自分が考へて居たよりは、更に深く狂皇子の悲壯な精神を感得したやうな氣もした。青木に言はせると、ハムレットは最も悲しい夢を見た人間の一人である。斯の最も悲しい夢を見たといふ言葉が、妙に岸本の胸に響いた。青木は科白を遣つて居るのか、自分を白狀して居るのか、解らなかつた。彼の眼――狂熱の光を帶びた彼の眼は燃え輝いた。彼は冷くなつた酒を飲んで、歔欷くやうに笑つた。

菅は足を投出し乍ら見て居た。

○

ハムレツトを見せた青木は更にオフエリヤを見せると言出した。彼は酔つて起ち上つた。花束のかはりに白い帕子(ハンケチ)を振つて、清しい聲で歌ひ出したのは彼の可憐な娘の歌である。

"How should I your true love know
From another one?
By his cockle hat and staff,
And his sandal shoon.

He is dead and gone, lady,
He is dead and gone;
At his head a green grass turf,
And his heals a stone.

White his shroud as the mountain snow,
Larded with sweet flowers:
Which bewept to the grave did go,
With true love showers."

右譯歌

『いづれを君が戀人と
わきて知るべきすべやある。
貝の冠と、つく杖と、
はける靴とぞしるしなる。

かれは死にけり、我ひめよ、

かれはよみぢへ立ちにけり、
かしらの方の苔を見よ、
あしの方には石立てり。

柩をおほふきぬの色は
高ねの花と見まがひぬ。
涙やどせる花の環は
ぬれたるまゝに葬りぬ。』

（『おもかげの』譯より）

友達仲間で斯の歌を愛誦しないものは無い。彼等は斯の歌を口吟む毎に、若々しい思想が胸の底に湧き上るのを覚えた。　も岸本も酒の香に酔つて、青木の歌に調子を合せた。』（傍點は木村）

この中の岸本は藤村氏自身がモデルである。

五

この、透谷が横濱で見たと云ふ西洋人の演じた『ハムレット』は、坪内博士も見にゆかれた。その事は、博士の舊憶談の中にある。何でもこの時は、三人の日本人がそれを見に行つたが、一人が坪内博士、一人が透谷であつた。

さて、右のオフイリヤの歌は、藤村氏は、鷗外博士の譯を引用してをられるが、玆に對照のため、坪内博士の譯を引用しておかう。

そして殿御の共扮裝(いでたち)は?
杖に草鞋に一しほ目だつ
笠につけたる帆立貝。

今は此世にならう方さまよ、
足にや墓石、頭上には
いつも緑の八重もぐら。

雪と見るよな蠟かたびらよ……
花でつゝまれ、涙の雨に
濡れてお墓へしよぼ〳〵と。

（中央公論社版一九二——三頁）

狂女の歌だから、勿論この譯の方が調子としても正しい。

六

自然主義時代になると、明治文壇はシェークスピヤには、ひどく緣が遠くなつた。

たしか『中央公論』はその當時の文壇人に『なほシェークスピヤを讀む必要ありや』なる質問まで發した（尤もこれは『趣味』であつたやうな氣もする）。

さすがに誰も讀む必要がないと云ひ切つた者は少なかつたが、大いに讀めとすゝめた者もなかつたやうだつた。

所が、意外な方面から、シェークスピヤはその頃の謂はゆるモダーニズムの青年の關心を呼んだ。

それはツルゲエネフの『ハムレットとドンキホーテ』なる講演のためである。

尤もその頃、ツルゲエネフは最も熱心に讀まれた。そしてツルゲエネフの小說の主人公は、云はばみな近代化したハムレットであると云ふも過言ではない。

さて、ツルゲエネフの講演は、當時たしか桑木嚴翼博士も紹介せられたと思ふ。又朝永三十郎博士も紹介せられてゐたと覺える。斷片的には島村抱月氏も紹介せられた筈だ。

彼は人間には、ドン・キホーテ型と、ハムレット型と二つの型があると云つた。一節を

譯載するとかうである。

『ドン・キホーテは理想に對する熱愛心に溢れてゐた。理想のためになら彼は凡ゆる艱難にも堪へ、生活を犧牲とする事をも厭はなかつた。生活！　それは彼に取つてはたゞ、理想の具現に役立ち、地上に眞理と正義とを昂揚するに役立ち得るがためにのみ價値があるのであつた。彼は同胞のため、人類の兇敵なる妖魔や巨人（それは壓迫者の象徴である）に反對の任に當るために生きてゐる。……それ故彼は恐れを知らず、又辛抱强い。粗衣粗食にも甘んじてゐる。彼の考慮はさうした衣食などと言ふ事以外にあるのである。胸は謙虛だが、頭腦には偉大な、果敢な所があつた。……之に比してハムレツトはどうであらう。何よりも解剖癖が强く、主我主義的である。それ故に信仰がない。彼は徹頭徹尾、自分のためにのみ生活してゐる。彼は自我主義者であるが自分自身を信ずる事は――たとへ自我主義者であつても出來ないのである。……ハムレツトは凡ゆる者に疑惑をもつが故

に、勿論自分自身をも決して容赦はしない。彼は、自分の中に見出し得るものに滿足すべく、その理知が餘りに明徹であり過ぎた。彼は自分の弱さを感じてゐる。が、その自意識は一つの力である。それ故に彼はドン・キホーテの情熱と好對照をなしてゐる。』

この講演は英譯がないので、不便であつたが、しかしクロポトキンの『ロシヤ文學史』の中に一節が拔かれてゐる。此の書は至大な感化を及ぼしたもので、その頃の大部分の青年はこのクロポトキンの節錄の英譯を通して、講演の全內容を想像したのであつた。

七

沙翁に關する隨筆のすぐれたものとしては、恐らく島村抱月氏の『沙翁の墓に詣づるの記』に留めを刺すであらう。

島村氏は、日露戰爭の前から終結にかけて滿三ケ年、歐洲に留學してをられた。

歸朝せられた時は、小說壇の王者紅葉は死し、論壇の雄樗牛も逝いて、文壇の水準は低下してゐる時であつた。而も戰勝によつて新文學は勃然として起らうとする機運が漲つてゐた。

そこへ當時、文壇第一等の秀才として自他共に許した島村氏は、新知識を滿載して歸朝し、數年廢刊してゐた『早稻田文學』を再興して有名な『囚はれたる文藝』を書いて異常なセンセーションを起したのである。まるでそれは政治家のやうな華やかな登場ぶりであつた。

氏の第二論は天下がこれを翹望した。すると讀書界の豫想を全く裏切つて、今度は『沙翁の墓に詣づるの記』が出た。

論文を待つた文壇は肩すかしを食つた形だつた。殊に『囚はれたる文藝』が絢爛華麗な美文調なのに引換へ、今度のが謂はゆる言文一致であつたのも、世の意表に出でた。

だが、此れは又此れで素晴らしい收獲であつた。謂はゆる紀行文の舊套に墮ちないで、

さすがは昔近松の影響を受けて布置整然たる小説を數々發表し、更に新進學者として蘊蓄の深い島村氏だけの事はあると、みんなが推服したものであつた。

氏の文章は、青春二十二歳のシェークスピヤがロンドンへ出向く旅路の幻想から初まり、敎養ある一紳士とその令嬢と共に、數々の遺跡を見て廻ることを書いたのだが、情趣兼ね具はつた好小品。私は本全集の讀者が必ずみんな一讀せらるゝ事を切望する。左の一節など、私は宙で暗記してゐる。

『ホテルへ歸る途々も、娘（そこで道づれになつた）は、かの舟の事が心にかゝると見えて、月の冴えた夜、自分等も、エヴン川に露墜ちるまで葦を分けて、シエークスピーアの歌の本でも讀んで興をふかして見たいと繰り返して言つた。けれども今は生憎月が無い。明日は早や三人ともに此の地を去らばならぬ。我れも月のエヴンの舟遊びは期してゐたのであるが、此度は齟齬して了つた。明月の一夜を、露が骨身に冷え徹るまで此の流れ

に上下して、或時は牧場の岸に舟を寄せ、或時は寺に沿うて木蔭にしばし纜をかける。耳を澄ませば彼方の牧場には銀絃を彈くやうな蟲の聲、寺を周つてささやくものは、楡菩提樹の葉に戯れる風。あゝ此の時、願はくば舟に樂手の乙女あれかし。樂器はヴィオリン、曲は戀、泣かずには已みがたき興趣であらう。

而して東海の一後進が捧げる愛慕の歌に、詩人の夢も凉しめられやう。』

明治の論壇が又、シエークスピヤによる開發を數々受けてゐる。

第一、文壇空前絶後の大論戰と云はれた逍遙鷗外の沒理想論が、口火は坪内博士のマクベス評註から切られたのだ。ついで逍遙梼牛の史劇も中心論題となつたのは、シエークスピヤの史劇である。

これらは又更めて語るを妥當と思ふ。

十 ツルゲエネフの日本文學に及ぼした影響

ライラックの花の香のやうな「やさしさ、なつかしさ」！

ツルゲエネフが明治文壇に與へた影響、それに依つて構成せられた明治文學の諸ページ、それは强さでも、深さでも、又朗らかさでもない。實にやさしさであり、なつかしさであつた。だから今、百年祭に際して彼を回顧しても、感ずる所は畏敬、感謝又は反撥、嫌惡等の何者でもなくして、實に親愛に外ならない。

ツルゲエネフの作から直接に影響を受けたのは矢崎嵯峨の屋氏の『初戀』位なものである。

その他の人は凡て二葉亭の飜譯を通してであつた。

有名な『あひゞき』が『國民の友』に出たのは明治二十一年であつた。それは誠に渺たる一短篇に過ぎない。だが、それは新興明治文學の全神經に響き渡つた。小さな短篇の飜

譯がこんなに大きな反應を呼んだことは恐らく世界の文學に於ても稀有のことであらう。
蘆花は、その甘やかな美しさ緻密さに醉はされたと云つてゐたと思ふ。自叙傳なる『富士』の中で。
併しその影響を、身を以て受けたのは國木田獨歩であつた。
彼の作には『あひゞき』は、只に創作上に感化を與へたばかりでなく、その生活態度をまで動かしてゐるのを見る。
試みに『武藏野』を開いて見やう。私はこの中から『あひゞき』の文句を隨所に拾ふことが出來る。
その（二）の日記の九月二十六日の項「林の奥に坐して、四顧し、傾聽し、睇視し、默想す」とあるのは『あひゞき』に「自分は坐して、四顧して、そして耳を傾けてゐた」とあるのから出てゐる。
然も獨歩に於ては、これは單に文章の彩を眞似たに留まるのではない。彼は實にさうし

た生活態度、乃至は生活方法を學んだのだ。

その證據には『欺かざるの記』にも『四顧、寂又寂。吾れ曰く、林は人間の祖先の家なりき……』等の句が見えるではないか。

又『武藏野』に返ると、獨歩はその（三）に『あひゞき』の冒頭の二節を引用して揭げて、「自分がかゝる落葉林の趣を解するに至つたのは此の微妙な叙景の筆の力が多い」と、白狀し、（四）に於て獨歩は又もや『あひゞき』の結末を引用してゐる。

二

併しこゝで注意しておくが、獨歩が『武藏野』に引用してゐる『あひゞき』の文章と現在定本として世に行はれてゐるもの卽ち春陽堂本との間には、若干の差がある事だ。

たとへば――

『自分は坐して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上でかすかに戰いだが

その音を聞いたばかりでも季節は知られた。」（獨歩の引用したもの）

「自分は坐つて、あたりを見廻はして、耳を傾けてゐると、つい頭の上で木の葉が微かに戰いでゐたが、それを聞いたばかりでも時期は知れた。」（春陽堂本）

又

「アア秋だ！　誰かゞ禿山の向ふを通ると見えて、から車の音が虛空に響きわたツた。」（獨歩の引用）

「秋に違ひない！　誰やら禿山の向ふを通ると見えて、空車の音が高く響き渡る……」（春陽堂本）

殊に此の「あゝ、秋だ！」の一節は、田山花袋を初め『あひゞき』の感激の思出を語る人が必ず引用する有名な一節だのに、單行本ではそれが「秋に違ひない」と更められてゐるので、初めて讀んだ時は、私達は隨分戸惑をしたものであつた。

これは二葉亭が、單行本にする時、改修したから、違つて來たのだ。

併しその改修は改修として、明治文學への影響と云ふ點からすれば、原譯の方が重要なのだから、文學史的にはその原譯保存の方法も講じておかなくてはならない。
なほ獨歩の有名な『空知川の岸邊』には、『獵人日記』の一節と、そつくりそのまゝな所もあり、他に飜案の作などもしてゐる。
獨歩曰く「ツルゲーネフの作のバツクには深い悲哀が横はつてゐるやうに思はれる……此の點が誰れよりもツルゲーネフの好きな所以だ。」と。
封建的桎梏への反逆は、文學上に於ては先づ逍遙のリヤリズム提唱に口火を切り、ついでは民友社の一部や文學界の如き、感情の思ひのまゝの開放の形で現はれた。獨歩が「悲哀のバツク」ある故にツルゲエネフを好むのは、性格に根ざす嗜好以外に、一つはその時代の風潮でもあつたのである。
但し、當時に於て名譯『あひゞき』を、眞に味解し得たものは獨歩、湖處子、蘆花、藤村、花袋等の小數の清新な感情の保持者の間に留まつた。

一般に向つては豚に投げられた眞珠だつた。だから石橋忍月は、わざ〳〵註解を作つてそれを宣明したさうだ。私は、實は未だそれを見て居ないので、その註解の出來榮への批評は差し控へねばならぬが、それに依れば忍月も亦先覺者の一人であつた事が分る。

三

それ以外にも二葉亭はツルゲエネフを、數篇飜譯してゐるが、一番影響の著しかつたのは明治三十年四月から約一ケ年に渡つて『太陽』に連載せられた『浮草』であつた。卽ち『ルーヂン』の全譯である。

この飜譯は、二葉亭が金が欲しくていさゝかなぐツた傾があつたゝめに、自分では單行本には纏めなかつた。併し田山花袋はそれを愛讀した餘り、太陽の切抜を製本させて所持してゐた。

これをみんなが爭つて借りて讀んだのである。その人々に國木田獨步がゐた。小栗風葉

がゐた。島崎藤村氏も確かさうだつたと思ふ。風變りな所では柳川春葉もその一人であつた。『浮草』の中に確か「頭が熱くて、感情の冷やかな人」と云ふ句がある。獨歩などは此れが氣に入つて、花袋などとの酒席の獻酬には、よく此の言葉を口にしたさうだ。風葉の『青春』が、此の著しい影響の下に出來た作であることは、今、云ふまでも無からう。

Words, words, but no action の人間を描いた點で似てゐる。場合によつては、譯文と同じ文句をそつくり使つた所さへある。併し風葉の作には、獨歩の指摘したツルゲエネフの特徴なる「バックとなる悲哀」が全然缺如してゐる。

春葉の、たとへば『春葉集』に收められてゐる短篇の中にさへ、思ひ掛けずも『浮草』そのまゝの文句の使つてある所がある。私は又、死ぬ少し前春葉を訪問した事があるが、彼は極力『浮草』の描寫の妙をたゝへて、殊に新聞小說は、ツルゲエネフのやうに急所を代はす術を心得てゐなくてはダメだ、自分は念としてツルゲエネフを狙つてゐるとも語つ

てゐた。『生さぬ仲』の作者がそれだつたのだ。

花袋の作では、自然主義に轉換する直前のものに、ツルゲエネフの影響が著しい。たとへば『名張乙女』を初め、あの『花袋叢書』に收められてゐる頃の諸篇が、その代表的なものと云へるであらう。

私達の少年時代まで、その『浮草』は本になつてゐなかつた。で、私もそれを初めて讀んだのは、田舍の土藏の中で搜し出した『太陽』に於てゞあつた。

やがて二葉亭がロシヤに行くので『浮草』は不滿を訂正されないまゝに、金尾文淵堂から出版せられた。それが當時、どんな感化を文學青年の間に與へたかは、たとへば同じ文章世界の投書家として私が文通してゐた加藤武雄氏は、上京して來た序に、圖書館で讀んで「悲しい小說だ」と私の許へ書いてよこした。加藤氏が二十二三の頃である。私は今でもこの手紙を保存してゐる。

米川正夫君や中村白葉君がルーヂンを論じたものは、當時の文章世界の投書欄に發見で

きる筈である。自分の事を附記するのが許されるなら、私の處女作と云つていゝ『兎と妓生』とが大毎の夕刊に連載せられた時、生田春月君がある新聞で「ツルゲエネフの面影がある」と批評してくれた。

だが、ツルゲエネフから、本當に、血となり、肉となるやうな影響、感化を受けたのは恐らく私達が最後であつたらう。又、さうでなくてはならないと思ふ。あの甘さにいつ迄も停滯してゐてはならない。

ツルゲエネフは主にフランスに住んでゐた。そして思出に殘るロシヤを現實として描いた。だから追憶のなつかしさはあるが、現實の鋭さがない。又ツルゲエネフは生涯獨身で暮して、本當の女を知つてゐない。だから彼女の女性は憧れの映像であつて、肉身を具へてをらぬ。

だから今後とても永久に、親愛はされるであらうが、生きた血となり、肉となる感化力は、もう恐らく持たぬであらう。

私はある雜誌で蕪村と芭蕉を論じた時、ツルゲエネフとドストイエフスキを比較に取つた。そして俳句に入るには先づ蕪村を潜るのが食ひつきがいゝ、そして芭蕉に落ちつくべきである。丁度西洋文學を味讀する階程も、ツルゲエネフを一度通つてドストイエフスキイに至るが順序であるやうに、と、論じた。

これには半田良平氏がひどく同感を表されて、わざ〳〵手紙を送られた事を記憶する。

十一　『蕪村句集講義』に現はれた正岡子規

一

子規の研究に、從來『蕪村句集講義』が全く閑却せられてゐるのは當を得ない。

此れはその凡例にもある通り『明治三十一年一月より三十六年四月に至る六年間、鳴雪子規、虚子、碧梧桐、黄塔、紅綠、靑々等、每月一回、子規庵又は老梅居に會し、蕪村句集を輪講し、筆記し、雜誌ホトトギスに連載した』ものである。

なぜ此れを閑却してはならぬかと云へば、第一には、此れは子規の側面的な病床日誌として、興味がある。初め、子規の病が大して激しくない時は、彼は多々大いに辯ずる所がある。しかし病が重くなると、講義所も自分の病床の枕頭から、鳴雪翁の老梅居にうつした。自分はそれに參加しないで、その出來てきた筆記の末尾に、後から、所見を書きこんでゐる。然も、全く無批評に口をつぐんでゐる句の多いのは、病苦のために物を云ふのも、或は書くのもいやなのであつたらう。

講者に異說紛々として起つた場合など『鳴雪翁の說が正しいのである』と、理由も何も說明せずに、ぽかりと斷定を投げつけてすましてゐる所もある。この一言の裏には、病苦そのものが鮮やかに讀み取れる。

そして暫く老梅居で續行されてゐた講義を、又、自分の枕頭でやつてくれと云ひ出して數回にして彼は永眠したのだ。然も此の死の直前は、子規の句解の最も銳利さを示した時であつた。

第二は、子規の蕪村觀は、輪講を除外しては、決して完全に把握はできないのである。子規には『蕪村と几董』なる論文がある。だがそれは三十一年十二月の作だ。又『俳人蕪村』の一篇もある。だが此れは、それより前の二十九年の起稿、三十二年訂正のものである。それから死ぬ迄の子規の蕪村觀は、隨筆にも稀に散見するけれど、この輪講こそ、最も端的に此れを窺はすのである。

未だ、此の輪講の檢討に値する理由は、他に數へられるが、子規を中心に見る時は、さ

しづめ上の二點が、私には關心の中心となる。

二

明治四十一二年の頃と思ふが、角田竹冷がロンドンへ行つたので、在留の日本人有志が相會して句會を催した。

その時、竹冷は席上で、正岡子規などは、もつといゝ句があるのを知らなかつたから、それで蕪村などを擔ぎ上げたのだと云つた。この事は、當時文部省の留學生としてロンドンに滯住し、その句會に出席した大谷繞石の『案山子日記』に書いてあつたと思ふ。

竹冷の『もつといゝ句』と云つたのは何人を指すのか。明かに芭蕉に違ひない。それは竹冷一派に、ホトトギスの蕪村輪講を摸した『芭蕉句集講義』があるに見ても明かである。所で子規は芭蕉を知らなかつたらうか。そんな事はない。少くとも彼は蕪村を手にする前から芭蕉を知つてゐた筈だ。

然も芭蕉を貶して蕪村のみ持ち上げたかに竹冷一派に見えたのは、單に一篇の『俳人蕪村』の論文のためのみではなく明治三十一年に初まり明治三十九年に終つたホトトギス紙上の蕪村輪講が、マツシヴに、量的に、蕪村プロパガンダの威壓的な印象を與へたからである。

ところで、十目十指、蕪村の一段上にある芭蕉を子規が貶したのは、少し奇怪に映るがそこは時勢と子規の性格による。

ルネツサンス以前の藝術よりラツフアエロ前派の運動が一時、十九世紀の英詩壇を風靡したではないか。

芭蕉より劣る蕪村を、子規があれ丈けに宣傳した所に、吾等は、特殊な理由を發見することに努力せねばならぬ。芭蕉を知らなかつたと云つて了ふ見解は淺い。

併し私はその『特殊理由』を發見する前に、此の蕪村句集輪講を一讀して得た大まかな感想の一つ二つを書きつけておくことの必要を感ずる。

第一に、この輪講者の群はよく、『侘び人の氣持がよく現はれてゐる』と云ふ風な評語を用ゐる。(たとへば「冬の部」葱買つて枯木の中を歸りけり　の句に對して、墅水が「……侘びた貧しい人が黄昏になりて……云々」(縮册一一七頁はその一例)

そして彼等が『侘びた』と云ふ場合、偏斥、非難、侮蔑の意味は毫末も含んでをらず、むしろ侘びに對するおとなしい同感の氣持が見える。此れは必ずしも俳人に限らず當時小ブルジョア通有の陰性反逆心で、破竹の勢ひにあるブルジョアに蟷螂の斧的に對抗して、文學者が誇り得る唯一の武器は此の『侘びた氣持の鑑賞』以外には殆んど無かつた。

尤も此れは必ずしも、特にそのために彼等が蕪村に推服した特殊理由にはならぬ。徳川時代の俳人は多く下級武士か裕福な町人で、彼等は如何とも楯付き得ない制度に覇心を壓殺され、わづかに吟懐に別な天地を作つて、そこで觀念的に、上級武士より上座に坐つて、わづかに自ら慰めてゐた。明治の新知識階級の構成した文學は、氣持に於て此れと相通ずるものがある。『侘びた』と云ふ事の價値認識はそこから出發する。

併し『侘び』を愛したのは、月並俳人と雖も同じだが、然らば子規はなぜそれを排して特に蕪村に行つたか。此れは明治の文藝思潮の脊椎骨をなすリヤリズムの展開と分離しては考へられない。

『小説神髓』をリヤリズム・マニフエストとしてスタートを切つた寫實思潮は、明治中期に於ては小杉天外の一知半解なゾライズムと、子規の寫實說との二股に分れ、自然主義に到つてそれが又合流した。

子規が元、月並の句を愛したのは、逍遙が馬琴に惑溺したのと同じであつた。

物いへば唇寒し秋の風

知の一つ足らでをかしき案山子かな

の類の句を子規は初期の頃好んだことを告白し『其美と認めた事は眞の美に非ずして、知識の上より生ずる一種の快感を美と認識せしなり。知識の上より生ずる快感は謎を解き數學の問題を解きたる時に生ずる快感の類なり。』（俳句の初步）と云つてゐる。そして『理

屈を含みたる句』『譬喩の句』『擬人法を用ゐし句』『人情を現はしたる句』『天然の美を誇張的に形容したる句』等一切を排して、寫實の一點に眼ざめた時、子規は蕪村にひきつけられた。

三

だが、子規の蕪村發見は、彼のリアリズムの成長に幾分でも資する所があつたらうか。否、結果は、却つてその反對であつた。

一體、子規の缺陷は、目標的な御本尊を一つ過去に求めねば安心のできない點である。和歌に於ては萬葉を偶像にした。俳句に於ては蕪村を偶像にした。そのために折角の鋭利な改革家的一面、精刻なリアリストの一面が、偶像との妥協に於て鈍磨して了つた。

だが、此れはひとり俳句や和歌に限らない。小說壇も同じであつた。『小說神髓』『浮雲』と展開したリヤリズムが、あのまゝの強行軍を停止しなかつたら、素晴らしい實を結

んだらうと誰でも惜しむのだ。あの頃逍遙も、二葉亭も過去の日本文學に偶像を求めてはゐない。暫く經つて西鶴が偶像として入り來るに及んで、折角の强行軍が足踏みをしたのである。

この背後には勿論、自由民權運動で氣勢を上げた明治の新興ブルジョアが、藩閥と妥協苟合すべく餘儀なくされた社會狀態があつて、それが小說をも、和歌をも、俳句をも、あの妥協的結果にしたのだ。

リアリストとしての資質に於て、私は、子規こそ明治文壇第一の人であつたと思ふ。彼にもし小說家的才能があつたら、彼の寫實主義は天外にも、泡鳴にも兜を脫がせてゐたらう。

それは兎もあれ、子規は蕪村の發見に於て

『芭蕉の俳句は古來の和歌に比して客觀的美を現はすこと多し。しかも猶蕪村の客觀的なるには及ばず。極度の客觀的美は繪畫と同じ。蕪村の句は直ちに以て繪畫となし得べき

者少なからず』。(『俳人蕪村』)

と云つてゐるのはよい。

だが、次のやうに云ふ事によつて、子規は、その改革家たる資格を捨てゝ了つてゐる。

『文學の實驗に依らざるべからざるは猶繪畫の寫生に依らざるべからざるが如し。然れども繪畫の寫生にのみ依るべからざるが如く、文學も亦實驗のみに依るべからず。寫生にのみ依らんか、繪畫は終に微妙の趣味を現す能はざらん、實驗にのみ依らんか、尋常一様の經歷ある作者の文學は到底陳套を脫する能はざるべし。文學は傳記にあらず、記實にあらず。文學者の頭腦は四疊半の古机にもたれながら其理想は天地八荒の中に逍遙して無碍自在に美趣を求む。羽なくして空を翔るべし。鰭なくして海に潜むべし。音なくして音を聽くべく、色なくして色を觀るべし。此の如くして得來る者、必ず斬新奇警人を驚かすに足る者あり。俳句界に於て斯人を求むるに蕪村一人あり。』(『俳人蕪村』)

なる程、事實の說明としてはこの通りであらう。この通りである丈けに、それは分り切

つた事で、云ふ必要のない事である。改革家は、云ふ必要のない事を云つて、自分の主張の論旨を弱めてはいけない。

『文學者の頭腦は四疊半の古机にもたれながら其理想は天地八荒の中に逍遙して無碍自在に美趣を求む』る特長がもし蕪村にあるなら、子規はその點を攻撃すべきであつたのだ。

さて今迄の事を要約してみると、子規は俳句の修業途上、寫生に眼ざめて、蕪村に偶像を發見した。

だが、蕪村は子規が心に思ひ描いた程のリヤリストであつたかどうかは疑はしい。その蕪村の挾雜物が、子規の折角のリヤリズムの翅を粘りつかせて、反動的傾向に妥協させた。少くとも以上の豫備概念を持つことは、蕪村輪講に現はれた子規を、手つ取り早く把捉させるに役立つであらう。

四

本題の輪講に歸るが、句を解するに人には各々偏した好みがある。
鳴雪は兎角王朝を好み、宮中趣味を好むが、子規はなるべくその時代に、且つなるべくならば下級社會の事に解しやうとする。

一例――

龜山へ通ふ大工やきじの聲

（他の諸氏の講述を略す）**子規氏曰** 大工は山路を歩みつゝあるものなれば一所に固着したる花にては調和せず。聲なれば時間を含み、且つ遠近に響き渡ればよく調和す。況や雉子の聲はキャン〳〵と強く、大工もキツパリしたる感じなければ殊によく調和するを覺ゆるなり。（鳴雪、子規兩氏共に、大工と雉子との調和極めて宜しきをいふ。而して子規君の所謂キツパリしたる感じは鳴雪氏の有せざるところ、一旦大工の形狀を詳說するに到りて兩氏の想像著しき相違あり。子規氏のはつツかけ草履、印半纒的のもの、鳴雪氏のは烏

帽子を着、一刀を腰にしたる飛彈の匠の如きもの、終に一笑。)

即ち、此の場合は子規の鑑賞の態度の方がリヤリスチツクだと云ふてよい。それから子規が、しば〳〵輪講中に洩らしてゐる評語に『蕪村でなくては云へぬ』と云ふのが頻發する。試みに書きぬいてみやう。

勝手まで誰か妻子ぞ冬こもり

……蓋し複雜したる趣向を善く言ひ得たる處伎倆驚くべきものあり。蕪村ならでは到底言ひおほせず、と信ず。

我も死して碑に邊せむ枯尾花

……「ほとりす」は蕪村の造語であらう。斯ういふ言葉を拵えて旨くつゞめて行くのは蕪村の獨得である。

蕭條として石に日の入る枯野かな

……「石に日の入る」は蕪村で無ければ言ふまい。其上へ蕭條と置いたのも蕪村である。

菊は黄に雨疎らかに落葉かな

……かゝる複雜したる客觀的の趣味は、到底明治以前にあるべく思はれぬ事である。

以下、この調子で拾つて行くなら、何十百句に及ぶであらう。

そして子規が蕪村獨特と賞揚してゐる所は主として用語の放膽さ、自由さ、嶄新さで、次いでは取材の範圍の廣さ、細かさである。そして蕪村の寫實性に言及せるものは、吾々の豫期する所より遙かに少ない。

その賞揚するのが『蕪村獨特』の形容語なのに反して、出來そくなつた句を偏斥する場合用ゐられるのは『厭味な句』と云ふ言葉である。以下の數例を見よ――

牙寒き梁の月の鼠かな

……これは梁の月といひかけて、それから月の鼠とひツかけたのですから、此句はつまらぬと云ふよりも厭味が出て來ました。

町はづれいでや頭巾は小風呂

(鳴雪氏の解をきいて)さうですか。それでは此句は極めて俗ないやな句になりました。

雪折やよし野の夢のさめる時

……無雑作にいふたゞけ厭味はないけれど元來趣向は蓼太的の者で、あぶない趣向じや。

朝霜や室の揚屋の納豆汁

……禪味ある遊女といふやうな特別な場合をいふたものではない。地獄太夫見たやうな特別な場合を想像すると厭味が出來るかと存じます。

以上に依つて子規の云ふ厭味の內容を推すと、かけ言葉や、謎的な含蓄や、わざと作つたやうな趣向をさしてゐる。即はち、なだらかで、自然でないのが厭味なのである。だから蕪村獨特と賞揚する場合は、多く表現の自由さが指摘せられてゐるが、厭味なと云ふ場合、子規は卽ちリアリズムを擁護してゐるのである。

そして槪して子規が蕪村の句を、なるべく寫實的に解しやうとして、努めてゐることは左の一例でも充分にわかる。

英一蝶か畫に賛望れて

四五人に月落ちかゝるおどり哉

紅綠氏曰。英一蝶のかいた畫に賛を望まれて作つたといふ前置。私は嘗て蕪村がこの賛を書いてゐる踊の畫を見た事がある（實物ではないかも知れぬが）。其の畫は下の方に上へ手をあげて踊つてゐる四五人の手と頭とが書いてあつて、上の方に月が出てゐたと思ふ、四

五人にといふのでもう踊も淋しくなり夜が更けて月が横合ひからさして來る、共に顔を照らされて踊つてゐる趣きであらう。落かゝるといふのは月光が横合ひから人の顔を照らしてゐるのを面白く形容した言葉である。踊といふやうな俗なものをこれだけに美化したのは大伎倆で蕪村集中でも有數な句だと思ふ。**碧梧桐氏曰。**紅綠君の解によると始めは大勢人がゐたのが、夜が更けて四五人になつたとあつたが、左樣な時間的な想像は全く無いと思ふ。唯四五人揃つてゐる其を月光が上から浴せかけるやうに明かに照らしてゐる其瞬間の光景を叙したのである。**虛子曰。**兩君の解共に「月落ちかゝる」といふのは月光が人の上に落ちかゝつて明かに照らしてゐる、といふやうに聞こえたが、これは矢張月が西空に落ちたので紅綠君の解の如く踊が夜更けて四五人になつた、月も西空に落ちた、といふ景色を思ひ切つて四五人の上に月が落ちかゝるといつたのではあるまいか。尙斯う思ひ切つていつた爲め、月と四五人の踊り手の外は何物も目に入らず從て連想上からは兩君の解の如く明かに照らしてゐる心持もあるのである。**鳴雪氏曰。**私は碧梧桐君のやうに解したいの

である。さう解する方が句が面白いと思ふのであるが併し「月落ちかゝる」はどうしても虚子君のやうに解さねばなるまい。虚子君に賛成します。

虚子附記。鳴雪先生の碧梧桐君のやうに解する方が句が面白いといふ御說は一寸わかり兼ねる。席上でもいつた通り、月の西方に落ちた事を四五人の上に月そのものが落ちかかつたと大膽にいつたところが此句の主眼で、例の蕪村が主觀的叙法の大伎倆を認めてやらねばならぬところだと思ふ。如何なものでせう。**子規いふ。**無論虚子君の解の通りでよいのだが、鳴雪翁の碧梧桐君のやうに解したいといふ注意の點がよく自分の考へに合してゐる。卽ち夜が更けたから月が落ちるといふ主觀ばかりになつては面白くないので大きな月が人の上に落ちかゝつてゐる客觀的の景色の方が主にならねばならぬのである。要するに此句を以て夜の更けた踊り場の景色を主觀的に說明したのではなく、客觀的の景色を主として見せるのであるといひたいのである。

特に傍點を打つた數行に注意して貰ひたい。この類の子規の努力は、しば〳〵諸所に散見する。

五

次に輪講中、子規が激稱し、もしくは特殊な評語を下してゐる數句を掲げやう。

朝霧や杭打音丁々たり

……一面に霧が深くかゝつてゐる、遠くに杭を打つ音が聞える、僕はかういふ句は好きでたまらぬ。

凧きのふの空のありところ

……此句を讀んで一番に感じるのは、此句が蕪村の特色を最もよく現はしてゐることで、且つ天明の特色を最も善く現はしてゐることである。此のこまかい着想も巧みない

ひ方も決して元祿にはないことで、全く天明の代表者と云つてゐゝ。

磯ちとり足をぬらして遊びけり

打よする波や千鳥の横ありき

……同じ場所を二樣に云つたのは一番面白い。又蕪村の句は讀むほど段々面白くなつてくる。

鶯や茨くゞりて高う飛ぶ

……鶯が荊蕀の中をくゞりぬけて高く飛んだといふので、それだけが大變おもしろい。鶯の身細い所が殊に克く現はれてゐる。

此れ等の句を子規が好くに異存はない。寫生主張の彼としては當然である。只、次のやうな句を好いてゐるに到つて私は首を傾けざるを得ない。

こからしや何に世わたる家五軒

此句はうまい句と思ふ。其うまい處は「何に世わたる」と中七字を据えた處にある。「凩や……家五軒」と云ふ客觀的景色で、中七字は作者の考である。蕪村は好んで主觀的形容詞を挿み、又此句の如く主觀的形容句を中に挿むことを創めて大に都合よくしてくれた。

此の、私が傍點を打つた所は、子規の妥協で、リヤリストとしての彼の屈服である。尤も個人的に見れば無理のない話で、彼は宿痾のため、病床に寢たきりになり、描寫すべき對境としては、天井の板の木目か、折取つて來た青梅の枝しか無くなつた。この時彼の偶像蕪村も句中に縱横に主觀を驅使した句を作つてゐる事の分析と發見とは、劃られた世界しか持たない彼への大きな慰藉であつたに違ひない。そして此の慰藉に甘へた所に、子規のリヤリズム宣傳の銘刀は鈍磨し去つたのである。(尤もそれでありながら彼が熱烈に寫生を思慕したことは、彼の作句や、繪畫のスケッチ帖に見える)

だが、これの、子規の病氣と云ふ個人的理由のみで解してはならない事は、前に逍遙、二葉亭のリヤリズムが硯友社の元祿文學復歸に妥協したのと、同じ社會狀勢によることは前に說いた通りである。

六

なほ、此の輪講を讀んで氣づいた事を、二三、補遺しておかう。

指南車を胡地に引去る霞哉

……予が此句を始めて見た時は、漢語が如何にも耳立つて、斯る堅い詞を使はなくても他にもつと調和したいゝ詞があるであらうと、此句はそのためいやに感じて居つた。今から思へば何故さう感じたか殆ど圖られない程で、是位はお茶の子同樣になつてしまふた。思へば蕪村の句に就いての感じも幾回變遷したか知れない。

子規は蕪村の、この漢語使用癖が隨分氣になつてゐたのである。なほ——

瘦脛の毛に微風あり更衣

では、初めて見た時、微風の漢語が氣になつたと云ひ

ほととぎす平安城を筋違に

では、初め蕪村の句を讀んだ時、いろ〳〵の漢語を不調和に感じたが、この平安城なる漢語はその時でも調和すると思ふたと云つてゐる。

それから子規は、よく、かゝる用字は蕪村に初まると云ふ類ひのことを、大膽にしば〳〵云つてゐる。例——

春水や四條五條の橋の下

……天津橋下陽春水から來たので、「春水」と漢語で置いたのは此句が始めである。

この類のことを云つたのは非常に多い。或る時、碧梧桐がそれを眞似ると、子規はペシヤンコにやつつけた。

草いきれ人死に居ると札の立つ

碧梧桐氏曰「草いきれ」と云ふ語は蕪村がこさへたのであらう。子規いふ「草いきれ」と云ふ語は蕪村がこさへたのではない、元祿にも「かぶるゝなけふの細道草いきり　濫吹」「草いきり駕籠に云つく野駒哉　露江」等の句がある。

自分は平氣で、蕪村の新造語と云ふことをしば〳〵繰返し、人がそれを云ふと、直ちに反證を出す。

これは餘程の研究を積んでゐなくては出來ることでない。俳句研究家としては、子規が特殊な天稟を持つてゐた事は輪講一卷がよく證明する。

この輪講は子規の歿後四年も續き、遺稿まで講義し終つてゐるが、子規がゐなくなつてからは、急に興味が失せて、讀んでも些とも面白くない。やつぱり子規のゑらさが分る。

思へば、少年の私が偶然手にして、俳句もなか〳〵面白いものだと思ふやうになつたのは、此の輪講からである。何年か前、よみ返して氣づいた事にしるしを付けておいたのを基にして、今度はそれを拾ひよみしながら、この一篇を綴つた。是非全部よみ返してから論じたいと思つたのだが、舊臘以來、デコブラが來て、その案內をしなければならなかつたので、再讀の暇がないのは殘念だつた。

十二　漱石の道義觀

漱石の作は凡てを通じ、アンダア・トオンの一つとして、道義と云ふやうなものが響いて來る。世は凡て御都合主義によつて軌道を外れた進み方をしてゐるが、本當はこの上を歩かねばならないのだと言ふ道を暗示してゐる。

それが初期の作に於ては、彼の指示する道義は非常に江戸ッ子臭い。下町の兄哥連や傳法娘でも持つてゐさうな、勇み肌の、べらんめぇ口調の、勢のいいものである。「坊つちやん」「猫」「野分」等に暗に閃めいてゐるのはこの道義觀である。

然るに「虞美人草」に於ては大分近代的な憂愁味を交へて暗示されてゐる。

が、中期の作になると、道義觀が眞實な道と言ふやうなものに一變して來た。「彼岸過迄」の中の何とかと言ふ女が須永に「あなたは卑怯です。私を戀してもゐないのに、どうして嫉妬なさるんです」と言ふあたりや「行人」の盲景淸の挿話などが之に當らうかと思ふ。かく一變せしめた一つの大きな原因は彼がイブセンを頻りに讀んだことだと思ふ。現に漱石全集別冊の談話をよんでみると、彼が一時大いにイブセンを耽讀したことが分る。

漱石を全然宗教的苦悶の無かつた人であるとは私には思へない。成程、漱石は「草枕」に於て「この世の中を作つたのは神樣ではない、向ふ三軒兩隣りに家を作つてゐる人間だ」と言ふやうな見解を述べてはゐる。又「文學論」の中で、西洋人の言ふやうな神の意識が日本人にない事も述べてゐる。又そのジエームスのプラグマティズムを喜ぶにしても、宗教味だけはわざと顧みないで讀んだのではないかと思はれる點もある。

併し「行人」の後半を讀んだ時には、私は一種の嚴肅な氣持に打たれた。少くとも私にはそれが漱石の宗教的苦悶の反映のやうに思はれた。そこに「猫」の作者とは著しく異る著者を見た。彼の健康のひどく損じたことか、或は何か大きな生活上の刺戟かゞ、彼を驅つてあゝ云ふ思索、あの追及に耽らせたのではあるまいか。マホメットが山を呼ぶ話にしても、何とか云ふ禪坊主が竹に石の當つた音を語る話にしても、單なる挿話と云ふ以上に私の胸に響くものがあつた。少くとも「行人」の後半は、晩年の漱石の心生活を考へる上から見のがしてはならないもののやうな氣がする。私が漱石の中一番好きなのは「彼岸過

迄」と「行人」とである。

それから漱石の作中、男女の三角關係の描いてないのは少ない、これも考究を要する彼の一面だと思ふ。「彼岸過迄」「行人」などはその代表的なもので、「門」「それから」「虞美人草」みんな三角關係がある。「坊つちやん」のやうな作にさへその片鱗が窺はれる。尤も恐らくこんなことは、既に外の批評家に依つて論じられたらう。

生田長江氏が漱石を評して、彼の作は啓蒙的である。第二義以下のものは悉く揃つてゐる。が第一義が足りないと言ふ意味のことを言はれたと思ふ。根本の批評となれば、その一語につきる。

私は漱石の作は大抵讀んだ。

「文學論」などは學生時代に五六回は繰返してよんだ。私が多少でも英文學を讀み嚙つ

たのは、大抵あの本を案内とした。「文學評論」も面白かつた。「創作家の態度」なども面白かつた。彼の文藝批評にはやつぱり道義が根本をなしてゐる。そしてゾラやモウパッサンの或る作を批難してゐる、この點は私は大賛成である。それからシェークスピヤの「オセロ」を厭な作だと言つてゐるが、私もさう思つた。「オセロ」はどの點で傑作であるにしても、厭な感じを起させることは確かである。

それから「全集」の中に「別冊」と言ふものがあつて、彼が讀書中に記入した評語が集めてあるが、これが面白い、私は全集は買はなかつたが、この一冊だけは古本屋から求めて今でも時々出してよみ、自分が讀書の際の參考としてゐる。

一體漱石のものは小說でも評論でも讀むと、學識の廣さを感ぜしめて、勉强しなければいけないと言ふ鞭を暗示する、その點から言つても有難い先生である。

私は學校で漱石と上田敏との講義をきく機會を持たなかつたことを今でも多少殘念に思つてゐる。

十三　蘆花氏に關する斷片

一

私は少年の頃蘆花氏初期の著作を頗る愛讀した。『自然と人生』『巡禮紀行』などが最も好きで、外に『青山白雲』『青蘆集』その他をも。

但し途中で日子日女（ひこひめ）の思想が顏を出し初めてからは大いにもて餘した。著作で言ふと『新春』以後で、私は或る時は氏等夫妻の傲岸な思ひ上つた態度を憎み、或る時は誇大妄想狂になつたのではないかと疑つた。然も氏の著作出づる毎に大抵は一過讀したのは、一に少年時代愛讀の惰性である。

晩年の『富士』三卷は以前とは別樣な意味で興味をひいた。と言ふは、あれは民友社を中心として觀じた精刻無比の文學史資料だからである。

私は愛讀久しきだけに、これまでも蘆花氏に就いては二三回書いた事がある。現に先月の新潮へも哀悼錄を寄せたのだから、茲では或は舊記のむし返し以上、多くを出でないか

續篇を出して、この作は大規模な社會小說、明治廿年前後のとは違つた意味での政治小說にする積りであつたのに、途中で筆を折つた。

四

『黑潮』の序は蘇峰氏に宛てた絕交狀として時の文壇を異常に刺戟した。そしてその續篇は石川三四郞氏の編輯してゐられた社會主義雜誌『新紀元』に、出る〳〵と豫告だけは每號され、確か著者の前書きまで載つたがとう〳〵尻きれとんぼになり終つた。

紅葉は身體さへよかつたら『金色夜叉』は完成したらう。露伴と蘆花の作が未完のまゝになつたのは、紅葉と違つたある內的苦悶に因由するものと思はれる。

蘆花氏は遂に巡禮に出てエルサレムから、ヤースナヤ・ポリヤーナに廻りトルストイを訪ふた。歸國すると今度は田舍へ引こんで行つた。

『百姓して働いてばかりゐると人は獸になる。書齋にゐて本ばかり讀んでゐると人は惡

魔になる』。かう言つて氏は半農、半讀書人の境涯に入つた。

私の見る所によると、この時を以て氏の生涯は前期と後期とに區劃された。氏の名聲は讀書界を風靡してゐたのに、氏は少しも書かなかつた。

五

『書かざる所以』と題して氏は曰つた。

『私も、何も書かないと云ふわけではありませんが、どうも書くべき事實が無いのに弱ります。見聞の事實が少しも興を誘はない。何事にも興味をもてないのです。だから他人の作物を見ると、どうしてかう澤山に書く事柄があるかと思ふ位です。

『一體文學と云ふものは決して職業とすべきものではありますまい。筆によつて生活するとなつたら、文學位危險千萬な職業は無いでせう。

『で自分が書けなくても私は少しも驚かないばかりか、人が書けなくなるのは寧ろ悦ぶ

べき事であらうと思ふのです。それは眞實に好いものを書かうと思つたら、やはり色々の境遇を經て來なければいけまいと思ふ。で書けない人はつまり其人が修養の時期にあるので、書物も何も讀まないでゐても、書かないと云ふ事實が既に非常な修養だらうと思ふのです。』（明治三十九年十二月文章世界）

沈默した氏は、粕谷の奥で土をいぢりながら、この無爲の修養をしてゐたのだ。

六

その間にたつた一度ちらと生活の斷片を見せたのは『廿八人集』にのつた『國木田哲夫兄に與へて余が近況を報ずる書』である。

『廿八人集』は主として田山花袋氏などの肝煎りで、瀕死の病床にあつた獨步の慰藉のために編まれた諸家の文集で、題字は獨步がかつて食客をしてゐた緣故のある西園寺公が一筆を揮ひ、序文は部下の社員として新聞社に彼を使つてゐた蘇峰氏が寄せた。

花袋、藤村、秋聲、白鳥、靑果など、當時文壇の中堅を占めてゐた花形の顏合せではあつたが、實際は蘆花氏の寄書に一番の人氣が湧いた。

これは只、隱栖後沈默してゐた氏が久しぶりに筆を執つたためばかりでない。世間一般は、愛好して措かなかつた氏の筆が、長い間の沈默にも銹びず、あの『自然と人生』に示された靈活な觀想が、一段の圓熟味を帶びて來たのを見て、その健在を歎んだのである。

これが後半期の蘆花氏のスタートであつた。その後數年を經て公けにされた『みゝづのたわごと』の卷頭は、これを改刪したものが占めてゐた。

『みゝずのたわごと』が出た時、私は早稻田の文科の學生であつた。あのビラを見ると私はすぐ本屋へ買ひに行つたが、第一版にはあの箱貼りや表紙のカットに兎が書いてあつたものだ。後に田植か何かの繪と變つた。或はその逆さであつたかも知れない。

この中で最も評判になつたのは『梅一輪』の一篇であつた。『メエ・フラワーの歸り』と云ふ挿繪の挾んであつた事も思出す。

『あそこに描かれてゐるのは哲學者の鹿子木員信さんださうですよ』
あるミッション・スクールの英文科にゐた女學生が、かう言つて、私に話して聞かした事があつた。眞僞は今でも知らない。

七

『新春』以後の蘆花氏は隋性で讀まれてゐたのだ。親愛を感ずるのは『みゝずのたわごと』までだ。これは大抵の人がさうだらうと思ふ。たゞ『富士』は明治文學研究資料として貴重だ。

去年の夏、私は安部磯雄氏のお伴をして北海道へ講演旅行に出かけた。新聞ゴシツプに見えた赤松克麿君と同じく、私も行儀見習と言つてもいゝ旅行をしたのだが、併しいろいろな話がきけて生涯忘るべからざるいゝ旅行でもあつた。

津輕海峽を渡る歸りの船の上であつたと思ふが、二人で蘆花氏の話をした。

『あの人は細かく日記を付けてゐるのに違ひありません。實は「黑い眼と茶色の眼」の中に私が同志社時代に作つた詩がひいてあります。「筆底巧藏鬼神力。留得洛陽幾片花」と云ふので、當人の私は何十年と云ふ間全く忘れてゐたのですが、あの小說を讀んで、成程そんなこともあつたと、思出した』――かう安部さんは語られた。

卽ち歸來、私はあの小說を讀み直してみると、同志社の學生が東京に憧れて續々と退校する。その時町尾といふ學生がそれを戒める熱さましの文一篇を圖書室に公けにした。その效果が多少あつて、浮き足の連中をひきとめたものだから、それで安部氏は序詞として「留得洛陽幾片花」を書かれたのである。

私は、社會民衆黨の主領たる氏に、學生時代漢詩の作ある珍らしさを茲に語らうとするのではない。この安部氏の保證でも想像のつく通り、蘆花氏の提供する資料がかなり確かなものである證左とすることが出來やうかと思つて、敢へて同好の志に告ぐるのである。

十四　南蠻趣味の小說『長崎の星』

——百合若傳說は斯うして傳はつたか？——

南蠻趣味の横溢したものを小說に求めれば、さしあたりアントニオ・デ・カンパス・ジユニオール（Antonio de Campas Junior）の『長崎の星』（Estrell de Nagasaki）などはその尤なるもの丶一つであらう。作者はポルトガルの現代作家で確か陸軍の下士上りだと聞いてゐる。

小說取材の時代は十六世紀の終末、ポルトガルが本國は旣に世界の覇權を失ふて沒落したが、東方植民地には未だ海上雄飛の名殘りを留めてゐる頃である。マカオにジヨルゼ・フアルカンなる好靑年がゐる。日本通ひの武裝貨物船サンタ・マリヤ・デ・ナガサキ號の船長の子で、自分も同船の火繩銃隊長である。

これに配して長崎のポルトガル植民街に、マルガリーダなる美女がある。別名を「長崎の星」と呼ばれてゐる。

物語は海を隔つた二人の綿々たる相思に、日本における切支丹の迫害を背景として初まるが、マルガリーダには長崎奉行の息子ナシモト（梨本）が、又、ジヨルゼには有馬の大

名の娘カツラ（桂）が横戀慕して、事件が錯綜する。

だから南蠻趣味の大衆小説として珍重すべきなのだが、それ以外に、この小說は、各節に、材料の出所を解說した詳しい註を付してゐるのが面白い。いや、南蠻派の諸君には、小說よりもこの註の方が面白いに違ひない。

就中、マカオの詩仙洞で、カモーエンスをしのびながら、ルシアーダスの一節を朗誦する條に入つた註は、特に諸君の一顧をひくに足るかと思ふ。

これよりさき、明治三十九年、早稻田文學復活の第一號に坪內逍遙博士が、足利末期からある百合若傳說の本源を、遠くギリシヤのホーマーの『ユリセス』にあるとされた興味深い考證は、その後幾多の話材を提供したが、その移入の經路の推究は新村出博士の『南風』（續南蠻廣記）に語られた『史的空想』が一番合理的な解釋で、かつ詩趣が深い。

博士は『ルシアダス』の題名の、一五七、八〇年代に行はれたおとぎ話に、リスボン主

都は、ルスス、エリサが開き、後にウリス（ユリセス、即ちオデツシユウズ）が建て直したといふ建國傳說に緣ある事を考證し、更に『リスボアの建立者ウリツセア』又は『ウリシツポ』なる敍事詩が『ルシアダス』と前後して廣く行はれた事を說かれ、結論として東洋へ渡つた船頭商賈の口から日本人はそれを傳へ聞いたのであらうと推考せられた。

實際當時東洋へ渡來した船頭や植民者達が、今、私達が考へるよりも遙に多くこれ等の詩書に親しんでゐた事は『長崎の星』の左記の註からも窺えるのである。いはく――

『「ルシアーダス」はポルトガル本國において九版も發行せられた。一六〇二年には一年の間に、二版も出した程素晴らしい賣行だつた。實際當時のポルトガル人は「ルシアーダス」を熱讀し、文盲でさへ、讀んでもらつて傾聽して、暗誦してゐるのが常であつた。

リスボンの港には、全世界に擴がつてゐたポルトガルの領土を保護すべき軍船の影さへ見えず、國威徵々たる時、往事の隆盛を讚美し、祖先のポルトガル魂を、永久化した詩卷

「ルシアーダス」が、或は海外の異郷にある植民同胞をして、祖國愛を燃えたたしめ、國威回復の偉業につかしめる端緒にもならうかといふので、本國の人々は、當時、この詩卷を爭つて、領土の同胞に送つたものである。』と。

この當時送られた「ルシアーダス」の一卷がマカオか長崎の古道具屋から發見された事にでもすれば、芥川龍之介の『れげんだ、あうれあ』の二の舞が演ぜられやうといふものだ。

同じ『長崎の星』の註には日本にチーズをもたらしたのは一五九九年長崎入港の蘭船であつたと記してゐる。然し永の航海で、折角のチーズが石のやうにカン〳〵に固まつたので、日本人達はその圓形なのをいゝ事にし、蹴まりの遊びに用ゐた――と。

一五九九年入港の蘭船ならウヰリアム・アダムスの乘つてゐた船である。私は別な機會に『本邦チーズ傳來考』でも書いて見るであらう。

十五　明治文學研究指針

明治文學は、西洋文化（資本主義文化）との接觸を以てスタートを切つた。だから戯作者でさへ、西洋趣味を加味しなければ、讀書界から取り殘された。（假名垣魯文の『西洋膝栗毛』などよい一例）

但し、どれ丈け資本主義文化を正確に認識し把捉し得たかに依つて、文學者としての凡ての勝負がきまつた。唯物史觀の立場からする研究家は、こゝに尺度を置くべきだと思ふがそのよい參考書はない。

平林初之輔「現代文學の背景及び前景」（遺稿集）

木村毅「開化期明治文學解說」（改造社、現代文學全集第一卷卷末附錄）

などが僅かにある一例である。

その時代の代表は明六社及び福澤諭吉である。これに對する研究は多い。

但しその次の時代の讀書界を風靡した成島柳北の『花月新誌』などは、明白に歐化の反

動として現はれた事、明治中期の元祿文學復興と同じであつたのに、そこ迄明白に氣づいてゐる批評家は少い。私などもあゝした漢文の戯文は江戸の殘物としてのみ認識してゐたが、さうとばかり解しては不充分である。

この點で炬の如き眼光を以て洞察をなしてゐるのは山路愛山の「明治文學史」である。これは北村透谷との有名な論爭で、その存在だけは誰しも知つてゐるが、國民新聞（明治二十六年の頃）に掲載中絶されたので、單行本になつてゐないから、讀んだ者は極めて少い。

私も最近、漸く一讀することを得て、右の點で非常な啓發を受けた。何しろ歴史的な文献なのに、纏められてゐないのは殘念だから、何かにレプリントされると、後來の研究家に役立つと思ふ。

明治の飜譯小説がジュール・ヴェルヌの科學小説から初まつた事は、その後の明治文化

の動向を規定してゐるものとして非常に意味が深い。これについては

柳田泉『川島忠之助翁（八十日間世界一週譯者）傳』（早稲田文學）

木村毅『唯物史観明治文學ノート』（新潮及び本書所收）などで、充分と思ふ。

政治小説は、柳田泉の倦まざる研究によつて非常に明白になつた。

從來の研究家は、自由黨のそれも、改進黨のそれも、一しよくたに考へてゐたのだ。

併しそれには明白に差異があり、自由黨の政治小説は主として魯佛の飜譯よりなり、改進黨のそれはディスレリーを模倣したもので、國としては英國の影響下にある。

この位な事さへ、從來の研究家に識別できなかつたのは、政治史の知識が不足だつたからで、從つて此の點に氣づいた柳田泉の功績は大きい。

岩波講座の附錄に載つたもの、及び明治文學談話會の講演速記の、東京講演會のパンフレットとなつて出たものなど、手に入れ易いであらう。

坪内逍遙の「小説神髓」を、單なる文學理論として是を檢討せず、小說とはそもそもブルジョア勃興に伴ひ起つた新文學形態であると云ふ立場から批評したのは、木村毅が最初であり、且つ書いたものの數も一番多い。

手に入り易いのは『小說研究十二講』の卷頭の一章、『明治文學展望』の「小說神髓小論」など。——之を思うてみるに逍遙の研究などは、本當には未だ殆んどなされてゐない事が分る。『書生氣質』も化政度の殘臭のみを問題にして排斥してゐる批評のみである。只一人小島政次郎が、自分の生ひ育つた下谷の町の藝者の出入した病院の思出などから、『書生氣質』のもつ寫實味に言及してゐるのは、さすがに群をぬいた見識である。餘り問題になつてゐないやうだが小島の研究は必ず見のがしてはならない。私の讀んだのは文藝春秋社の「文藝講座」に於てゞあつた。

二葉亭は内田魯庵の『思ひ出す人々』に語られてゐるものが最も詳細に躍動してゐる。ついでは坪内逍遙の近刊隨筆『柿の蔕』に收められてゐるものも暗示に富んでゐる。

この二人は二葉亭と親友であつたが、後の人のでは藤森成吉の『二葉亭四迷』（新潮社日本文學講座）が斷然光つてゐる。

但し、これを執筆した時の藤森成吉は、藝術上に於ては未だアナーキスチックな見解を捨てなかつた。今日の彼が二葉亭を何と再批評するかは、非常に興味がある。

森鷗外については、やつぱり小島政次郎の細緻なる解說を推す。併し鷗外については、たとへば藤森成吉が二葉亭を論じた程度の、新らしい立場からの批評は未だ試みられてをらぬ。

尾崎紅葉は本間久雄の舊著に『人及び藝術家としての尾崎紅葉』がある。最近福田清人の『硯友社の文學運動』が出た。後者は未見、明治文學研究に最も反動的な立場を取つてゐるのは、現在のところ東大國文科系の人々である。だからこれもその埒外に出でゝゐるものとはどうしても思へないが、著者が文壇の新人だし、何しろ一冊の本だから、淸新味に於て、資料として、何物か期待できる。

小島政次郎の森鷗外に於けるが如く、實證的に細緻な研究を、幸田露伴に對してなしてゐるのは柳田泉である。岩波の講座に出てゐるものが手に入り易い。たゞ少しく、社會狀勢を說くこと煩瑣に過ぎ、それと聯關して作を說くこと聊か粗であつたかと思ふ。柳田泉の露伴研究は決してあの程度のものではない。

『文學界』又は北村透谷については平林初之輔の『日本に於ける浪漫派の先驅者としての北村透谷』（遺稿集）が先づ讀むべきである。

回憶談としては平田禿木（趣味所載）馬場孤蝶（孤蝶隨筆）などみな興味あり、島崎藤村のは回憶にスタディを綯ひ交ぜたやうなものである。

古い所で人が氣づいてをらぬが德富蘇峰の『透谷集を讀む』は今日も一讀の價値あり。新人では篠田太郎がこれを論じてゐるのが銳利で淸新である。

一體『文學界』は、研究せうにも、原物が殆んど手に入らないのが不便であつたが、最

近、原物のまゝの複刻版が出るさうだから、此れは研究家の是非座右に一本を具へねばならぬものである。

『明星』に對してはいゝ研究はないと思ふ。或は私の眼に觸れてゐないのかも知れぬ。併し此れ亦最初の五號までが珍品で絕對に手に入らぬ。五號以下は古本でもたやすく手に入る。

社會小說を獨立して硏究したものとしては、先に木村毅のがあり（『明治文學展望』）後に篠田太郎のが（木星社『明治文學講座』）ある。

社會主義小說は木村毅の丈けでは、見解が不充分だ。神崎淸がその研究に努めつゝあるが、未だ成果を發表したものは私の眼に觸れてをらぬ。

自然主義研究は、私の知る限りでは、唯物史觀の立場から滿足なものは一つも無いと云つてよい。

併しこれはその立場から最も鮮やかな業績を成し得る領域だから、今後の大成に期待すべきであらう。

明治文學研究參考書中、纒まつたものを左に掲ぐ

○明治文學史、大和田建樹（明治二十七年）

「小說神髓」以前の新聞評論家のことなどが他に比して遙かに詳しい。讀むべし。

○明治の小說　高山樗牛（明治三十年）

太陽紀念號所收。必讀。

○明治文學史　岩城準太郎（明治三十九年）

これも改版ができた。一讀すべし。

○文藝史（明治四十二年）

太陽增刊明治史第七編。自然主義全盛時代に出たものとして注目するに足る。

○明治の文學　相馬御風（明治四十二年）
早稻田文學社で編纂した文藝百科全書の中にある。
○明治文學の概觀　諸家（大正元年）
文章世界の增刊「金風號」である。頗る讀むべし。
○きのふけふ　內田魯庵（大正元年）
明治文學隨筆中必讀を要する面白いもの、後に『思出す人々』と改題さる。
○明治大正文學早わかり　小林愛川（大正六年）
自然主義時代の見方によるものなれど、簡にして要を得てゐる。後に『明治大正文學の輪廓』と改題された。入門書としては最もいゝ。小林愛川とは加藤武雄の變名であるから、後者に於ては、著者の名は本名になつてゐる。
○近代文藝史論　高須梅溪（大正十年）
○現代文學十二講　同上（大正十三年）

高須氏は明治文壇の後半期を身を以て潜つて來た人だから、殊に自分の周圍を評傳した所は最も光つてゐる。

○明治文學十二講　宮島新三郎（大正十四年）

少くともこの書に於て、從來の傳統を破り、全く鑑賞を新たにしようとの態度が取られた。讀むべし。

○早稻田文學特別號　本間久雄編

明治文學特別號を出すこと數回に及び外に河竹默阿彌號、坪內逍遙號も又出した。

○近代文藝筆禍史　齋藤昌三（大正十四年）

○文藝東西南北　木村毅（大正十五年）

○明治文學展望　同（昭和三年）

○唯物史觀近代日本文學史　篠田太郎（昭和七年）

この方面のものでまとまつたものとしては、この一冊しかない。私とは非常に見解を異

にする部面もあるが、此のアンビシアスな仕事を最初にまとめた努力は、何としても多とすべきである。總じて此の著は、アカデミズムの動脈硬化的研究を打ち破る方面では銳烈な才能を示し、自分の研究を建設する方面で今一息の感があると思ふ。

以上はほんの寸見に過ぎない。勿論初學者の參考として執筆したのである。

（完）

昭和九年五月七日印刷
昭和九年五月十二日發行

定價 一圓五十錢

著者 木村毅

發行者 東京市中野區江古田一ノ二〇五四 篠田太郎

印刷者 東京市小石川區茗荷谷町九六 小谷實

太陽舍印刷株式會社印刷

發行所 東京市中野區江古田一丁目 樂浪書院
電話四谷一〇八〇番
振替東京八〇〇四七番